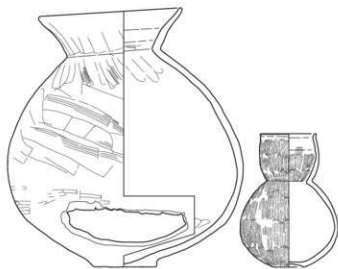


愛知県東海市

平成 27 年度

畑間遺跡発掘調査報告



2017年

愛知県東海市教育委員会



1 地点より常連寺を望む



7 地点より木田丘陵を望む



6 地点出土弥生土器（パレススタイル壺片）



7 地点出土土師器壺

序

伊勢湾に面した知多半島西岸の付け根に、私どもの愛知県東海市は位置しています。伊勢湾に面する本市は、はるか昔から海と関わりの深い生活を営んできています。現在では海浜部にはわが国でも有数の工業地帯が広がっており、海との関わり方も漁業などを中心にしたものから、工業を中心としたものに変化してきていますが、昔も今も海との関わりは切っても切れないものがあります。こうした伊勢湾を臨む本市の平野部には、多くの遺跡が残されています。

東海市では、名古屋鉄道常滑線太田川駅を中心とする区域を中心市街地と位置づけ、平成4年度から土地区画整理事業を実施してきました。教育委員会では、本事業区域内に所在する埋蔵文化財について、平成11年度から記録保存を目的とした発掘調査を実施しています。

本書では平成27年度の畑間遺跡における発掘調査成果について報告します。平成27年度の調査では、畑間遺跡の南端に近い地点を初めて調査することができました。弥生時代の住居跡や古墳時代の墓跡など、これまで考えていた居住域がより広い範囲であったことが分かってきました。

今後、本書が既刊の報告書と合わせて地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

愛知県東海市教育委員会
教育長 加藤朝夫

例 言

1. 本書は、愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、知多都市計画事業東海太田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市より調査依頼を受けて調査主体となり、株式会社島田組中部営業所と「畑間遺跡発掘調査業務委託契約」を締結し、発掘調査を実施した。
3. 本事業は、1・4～8地点の計6地点について、現地調査を平成27年6月8日から平成28年2月19日まで実施し、出土遺物の洗浄及び一次整理作業と注記作業を発掘調査期間の後半に現地事務所で行った。出土遺物の二次整理作業は、平成28年5月18日から株式会社島田組整理事務所において発掘調査報告書作成作業と併行して実施し、本書の刊行をもって終了した。
4. 各地点の発掘調査期間は、以下のとおりである。
 - 【1地点】平成27年6月8日～6月17日
 - 【4地点】平成27年10月14日～11月16日
 - 【5地点】平成27年12月7日～平成28年1月22日
 - 【6地点】平成28年1月14日～2月19日
 - 【7地点】平成27年6月22日～11月5日
 - 【8地点】平成27年11月18日～12月4日
5. 各地点の発掘調査面積は、以下のとおりである。
 - 【1地点】 176 m² 【4地点】 353 m² 【5地点】 434 m²
 - 【6地点】 205 m² 【7地点】 1,229 m² 【8地点】 104 m²
6. 発掘調査は東海市教育委員会社会教育課職員宮澤浩司の監督の下、箕 和也（株式会社島田組主任調査員）、丹生泰雪（株式会社島田組調査員）を調査員として、以下の者の協力で行われた。井上由子、下谷雅子、神野功一、中野まち子、平野光男、平野武光、藤井恵美子、藤井恭彦、水谷美子、牟田神東勝雄、山崎久男、山本 學（五十音順）
7. 発掘調査における記録のうち、測量は屋嘉慎太郎が行った。
8. 本報告書の執筆は、東海市教育委員会社会教育課職員宮澤浩司の監督の下、丹生泰雪が行った。内訳は、第1章を宮澤、それ以外を丹生が担当し、第3章自然科学分析については、冒頭に執筆者名を記した。なお、編集は丹生が行った。
9. 本報告書の遺物接合・復元・実測・トレースは植野良子、大川絵里、國分篤志、櫻田 萌、佐藤悦男、田中理恵、丹生雅子、増田知佳、村田麻実、山内千恵子、山越裕美がおこなった。
10. 自然科学分析については、出土した人骨の同定を株式会社パレオラボに依頼した。
11. 本報告書に掲載した遺物写真は佐藤右文（アートフォト右文）が撮影した。
12. 今回作成した図面・写真等の記録類、出土遺物はすべて東海市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺跡の略称は、HATAMA（畑間遺跡）のHMに調査年度（西暦）の下二桁を付し、HM15とした。これらは、遺物の注記や写真フィルムの注記などに使用している。
2. 遺構記号は東海市教育委員会の指示により、愛知県埋蔵文化財センター発行の「埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル」2011に準じた。主な凡例は以下に記す。
SK：土坑 SD：溝 P：ピット SP：柱穴 SB：建物 ST：墓・埋葬施設 SZ：周溝墓
SX：その他（性格不詳）
3. 遺構番号は、発掘調査時に遺構の種類に関係なく調査区毎に4桁の通し番号で付与（1地点：1001、1002、1003…4地点：4001、4002、4003…）して管理した。本報告書では、この番号に遺構記号を合わせて提示している。例えば、SK1001、SD1002と標記した。
4. 本調査における測量記録の方位及び座標は、世界測地系に基づく平面直角座標系第VII系に準拠した。なお、標高はすべてT. P.（東京湾平均海面高度）を基準としている。
5. 発掘調査時における土層の土色および、遺物の色調は『新版標準土色帖』を用いてJIS notationと日本語の対応土色名を示した。
6. 遺物図面（挿図）における各遺物の番号は通し番号を付与した。
7. 本報告書掲載の遺物番号は、図面（挿図）、遺物観察表において共通するが、遺物によっては、写真のみとしたものや、図面だけ掲載したものがあため、本文中に図面番号と写真番号をそれぞれ掲載している。
8. 発掘調査時の遺構の検出について、中世以降の遺構面確認作業にあたっては、明確に各生活面を区別することが困難であった。そのため、すべての地点において地山直上で調査を行なった。結果、掘削面が判明しえない遺構があるが、調査区壁面の断面観察から確認できるものに関しては、本文中で掘削層を記した。
9. 遺物実測図の縮尺は1/4を基本としているが、遺物の大きさによって異なるものがある。この場合別途スケールを変えて掲載している。
10. 遺物観察表に記載した法量について、（ ）内の数値は残存値および復元数値を示す。口径など復元可能なものは復元した数値を掲載している。
11. 文中に引用および参照した文献等については巻末にまとめて記載した。

目次

第1章 調査の経緯と遺跡の環境	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	2
第3節 畑間遺跡における既往の調査	5
第4節 調査経過	8
第2章 畑間遺跡の調査	
第1節 1地点の調査	
I 概要と基本層序	10
II 検出遺構	14
III 出土遺物	16
第2節 4地点の調査	
I 概要と基本層序	18
II 検出遺構	18
III 出土遺物	28
第3節 5地点の調査	
I 概要と基本層序	30
II 検出遺構	30
III 出土遺物	40
第4節 6地点の調査	
I 概要と基本層序	44
II 検出遺構	44
III 出土遺物	52

第5節 7地点の調査	
I 概要と基本層序	54
II 検出遺構	62
III 出土遺物	67
第6節 8地点の調査	
I 概要と基本層序	75
II 検出遺構	78
III 出土遺物	82

第3章 自然科学分析	
1. 緒言	84
2. 人骨所見	84
3. まとめ	86
第4章 まとめ	87

遺物観察表	
1地点	90
4地点	90
5地点	91
6地点	92
7地点	93
8地点	95

挿 図

図1 畑間遺跡の位置	1
図2 調査区位置図	3
図3 周辺の遺跡	4
図4 既往の調査地	6
図5 1地点遺構平面図	11
図6 1地点南壁土層断面図	12
図7 1地点東壁土層断面図	13
図8 SD1007 平面図・断面図	14
図9 1地点土坑・溝平面図・断面図	15
図10 1地点出土遺物	17
図11 4地点遺構平面図	19
図12 4地点南壁土層断面図1	20

図13 4地点南壁土層断面図2	21
図14 4地点東壁土層断面図	22
図15 SD4006・SD4007 平面図・断面図	23
図16 SD4028 平面図・断面図	24
図17 SD4035 平面図・断面図	25
図18 SD4053 平面図・断面図	26
図19 SD4042 平面図・断面図	26
図20 SB4052 平面図・断面図	27
図21 4地点出土遺物	29
図22 5地点遺構平面図	31
図23 5-B 地点西壁・北壁土層断面図	33
図24 5-B 地点北壁土層断面図	34

図 25	5-A 地点北壁土層断面図	35	図 48	7 地点西壁土層断面図	58
図 26	SZ5054 平面図・断面図	36	図 49	7 地点南壁土層断面図	59
図 27	SD5004 平面図・断面図	37	図 50	7 地点東・南・西壁土層注記	61
図 28	SD5013 平面図・断面図	38	図 51	SB7057 平面図・断面図	63
図 29	SD5097 平面図・断面図	39	図 52	SB7057 遺物出土状況図	64
図 30	SB5121 平面図・エレベーション図	39	図 53	SB7268 平面・断面・エレベーション図	65
図 31	SX5110 平面図・断面図	40	図 54	SB7269 平面・断面・エレベーション図	66
図 32	SZ5054 出土遺物	41	図 55	SZ7270 平面図・断面図	67
図 33	SD5013 出土遺物	41	図 56	SZ7311 平面図・断面図	68
図 34	SX5110 出土遺物	42	図 57	SD7034・SD7312 平面図・断面図	69
図 35	5 地点出土その他の遺物	43	図 58	SB7057 出土遺物	70
図 36	6 地点遺構平面図	45	図 59	SB7268・SB7269 出土遺物	71
図 37	6 地点西壁・北壁土層断面図	46	図 60	SZ7270・SZ7311 出土遺物	73
図 38	6 地点北壁・東壁土層断面図	47	図 61	7 地点出土その他の遺物	74
図 39	SB6107 平面図・断面図	48	図 62	8 地点遺構平面図	76
図 40	SZ6125 平面図・断面図	49	図 63	8 地点東・南壁土層断面図	77
図 41	SD6043 平面図・断面図	50	図 64	ST8005・8046・8048 平面図・断面図	78
図 42	SD6095 平面図・断面図	51	図 65	ST8006 平面・断面・人骨出土状況図	79
図 43	SK6006・SSK6032 平面図・断面図	51	図 66	SD8001 平面図・断面図	80
図 44	SB6107・SD6043・SD6095 出土遺物	52	図 67	SD8028・SD8039 平面図・断面図	81
図 45	6 地点出土その他の遺物	53	図 68	8 地点出土遺物	83
図 46	7 地点遺構平面図	55	図 69	畑間遺跡出土人骨保存部位	83
図 47	7 地点東壁土層断面図	57			

写真図版

写真 1	1 地点検出遺構
写真 2 ~ 4	4 地点検出遺構
写真 5 ~ 9	5 地点検出遺構
写真 10 ~ 13	6 地点検出遺構
写真 14 ~ 20	7 地点検出遺構
写真 21 ~ 23	8 地点検出遺構
写真 24 ~ 25	1 地点出土遺物
写真 26 ~ 27	4 地点出土遺物
写真 28 ~ 32	5 地点出土遺物
写真 33 ~ 34	6 地点出土遺物
写真 35 ~ 40	7 地点出土遺物
写真 41	8 地点出土遺物

第 1 章 調査の経緯と遺跡の環境

第 1 節 調査にいたる経緯

畑間遺跡は愛知県東海市大田町に位置する(図1)。平成8年度から10年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査^(注1)によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を東海市の玄関口として位置づけ、中心市街地としての整備を進めており、平成4年度から土地区画整理事業、連続立体交差事業及び市街地再開発事業の3つの事業を実施している。こうした事業のうち、土地区画整理事業に伴って、事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するために平成8年度に試掘調査を実施した^(注2)。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することを確認した。この試掘調査の結果に基づき土地区画整理事業担当部局である都市建設部中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会によって、主として道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成27年度末時点での調査済面積は22,295㎡である。

平成27年度の調査は、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成27年4月1日付けにて文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知があり、平成26年6月1日付け26教生第287号にて愛知県教育委員会教育長から発掘調査指示があった。また、畑間遺跡、東畑遺跡範囲内の7地点1,200㎡について、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成27年4月16日付け中第2号にて発掘調査依頼があり、平成27年4月13日付け社第79号にて東海市教育委員会教育長から発掘調査を実施する

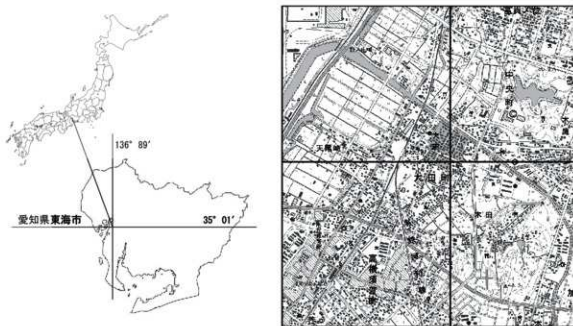


図1 畑間遺跡の位置

旨回答し、現地調査業務及び1次整理作業について、平成27年5月7日に株式会社島田組中部営業所と業務委託契約を締結した。

現地調査は6月8日より着手し、社会教育課職員の監督の下、1地点、7地点、4地点、8地点、5地点、6地点の順に調査を実施した。翌平成28年2月19日に現地調査は終了し、その後現場事務所にて1次整理作業を実施し、平成28年3月23日付けで成果品の納入を受けた。

平成28年度には報告書作成を行った。現地調査を受託した株式会社島田組中部営業所と2次整理作業及び報告書作成業務について、業務委託契約を平成28年5月18日に締結した。その後、社会教育課職員の監督の下、株式会社島田組中部営業所の整理事務所において2次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。

第2節 遺跡の位置と環境

畑間遺跡は知多半島西岸の伊勢湾に面した海岸平地に展開する砂堆上に立地する遺跡である。

知多半島西岸部には、海岸部に向けて開けた海岸平地がいくつか展開するが、畑間遺跡の立地する東海市大田町周辺から、知多市北部の寺本にかけて南北に延びる海岸平地はその中でも最大のものである。この平地を構成する地層は沖積層であり、縄文海進の時期には水面下にあったとみられる。その証左として、畑間、東畑、郷中遺跡の東側に延びる丘陵上に展開する高ノ御前遺跡がある。高ノ御前遺跡からは市内最古の縄文時代前期の土器が出土している。高ノ御前遺跡の現在の海拔高は12m程である。その後、畑間、東畑遺跡周辺が陸地化したのは、海水面が後退する縄文時代中期から後期にかけてとみられ、東畑遺跡からは当該期の縄文土器が少なからず出土する。恐らく縄文時代中期から後期には砂堆と呼ばれる砂の高まりが形成され、現在遺跡の範囲として捉えている海岸平地が陸地化していたと考えられる。

砂堆とは、伊勢湾を河口に持つ木曾川や、知多半島の丘陵部から流れる少河川や、波による陸地の浸食等、様々な作用によって供給された砂が、伊勢湾の沿岸流等によって運ばれて海岸に沿って堆積したものと考えられており、その形成時期の違いによって本遺跡周辺では3条の砂堆列がみられる。最も海岸から奥の砂堆列から順に第1、第2、第3砂堆と呼んでおり、畑間遺跡は第1砂堆に位置する。この第1砂堆は最も東西幅が広く大規模であるが、南北方向は丘陵部に規制され、1km程にとどまる。この丘陵部には北側の丘陵上に真言宗の古刹である弥勒寺が、南側丘陵上に天台宗の古刹である観福寺が所在しており、両者に挟まれた位置に畑間・東畑遺跡の集落が展開することは示唆的である。この他第1砂堆上には、最も北側の弥勒寺が立地する丘陵山裾に王塚古墳(古墳時代・滅失)、新宮前遺跡(古墳～中世)が所在する。王塚古墳は、昭和初期の道路拡幅の際に石室などが出土したと伝えられ、出土遺物の一部(須恵器短頸壺・坏蓋)が東海市立郷土資料館に所蔵されている他は詳らかではない。同じく新宮前遺跡についても遺物散布地として知られているが、発掘調査が実施されておらず、詳細は不明である。なお、王塚古墳、新宮前遺跡の両遺跡のすぐ南を流れる大田川は、江戸時代初期に尾張藩2代藩主徳川光友により、横須賀御殿の建築に際して新たに開削された流路であり、現在では大田川によって断絶されているこれらの遺跡は、近世初頭までは畑間遺跡とつながっていたことから、現在の景観とは異なる一体の遺跡群としてとらえる必要があろう。

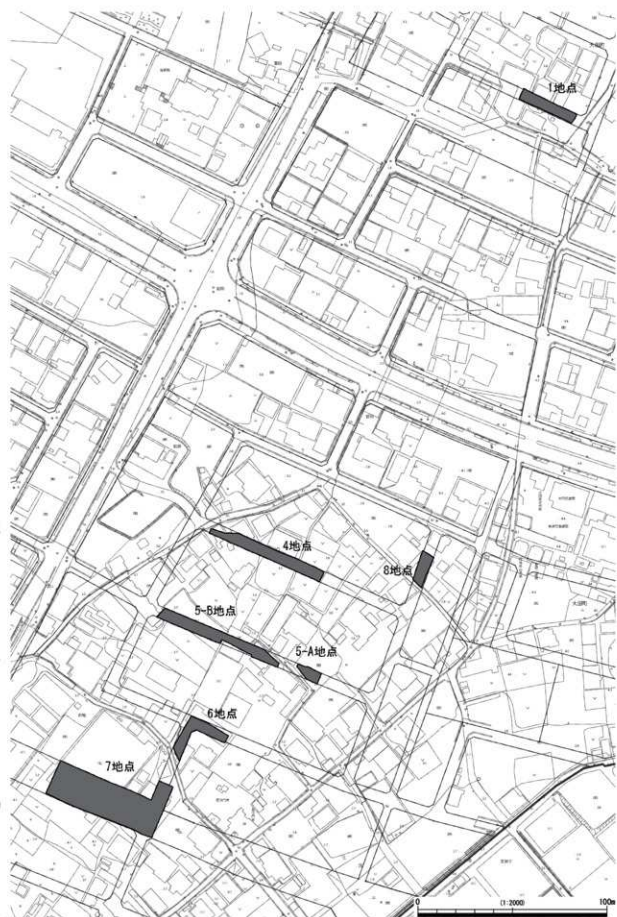
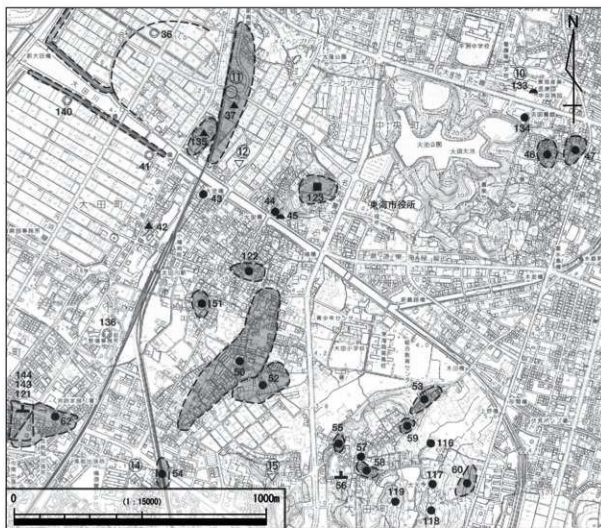


图2 調査区位置图



- | | | | |
|-----------|---------------|------------|------------|
| 36 浜新田堤防 | 51 龍雲院遺跡 | 62 烏帽子遺跡 | 135 上浜田遺跡 |
| 37 松崎貝塚 | 52 東畑遺跡 | 116 上前田遺跡 | 136 御洲浜庭園跡 |
| 41 後浜新田堤防 | 53 高ノ御前遺跡 | 117 西広1号遺跡 | 140 川南新田堤防 |
| 42 下浜田遺跡 | 54 太田川(築路)切貝塚 | 118 西広2号遺跡 | 143 滝川半斎屋敷 |
| 43 後田遺跡 | 55 庄之脇遺跡 | 119 山畑遺跡 | 144 横須賀代官所 |
| 44 神宮前遺跡 | 56 木田城跡 | 121 横須賀御殿跡 | |
| 45 王塚古墳 | 57 木田遺跡 | 122 郷中遺跡 | |
| 46 峰畑貝塚 | 58 下畑遺跡 | 123 弥勒寺遺跡 | |
| 47 北屋敷遺跡 | 59 前畑遺跡 | 133 丸根古墳 | |
| 50 畑間遺跡 | 60 北広遺跡 | 134 大池北貝塚 | |

図3 周辺の遺跡

第2砂堆は第3砂堆と比べて幅が狭く小規模である。名鉄太田川駅の辺りから北側の大宮神社辺りまで広がっている。この砂堆上には後田遺跡(古墳～平安)が位置する。後田遺跡周辺は宅地化が進んでいるが、製塩土器が採集されており、後述する上浜田遺跡、下浜田遺跡と密接に関連した遺跡であると考えられる。この北端に位置する大宮神社は創建時期が不詳であるが、東海市史によると平安時代に大郷(大田町周辺)が熱田神宮の荘園となるに伴って、荘園鎮守神として熱田から勧請されたと推定されている。

第3砂堆は形成時期が最も新しいが、最も規模が大きく、旧海岸線沿いに知多市北部までのびている。知多市域ではこの第3砂堆上に弥生時代以降大規模な集落が形成された。本市域では古墳時代中期以降に著名な製塩遺跡として知られる松崎遺跡（古墳～平安）や上浜田遺跡（古墳～平安）、下浜田遺跡（奈良～平安）が存在する。

概観すると、畑間、東畑、郷中遺跡の所在する大田町周辺では、最も奥側の第1砂堆上に中心的な集落が立地し、第2、第3砂堆が積極的に利用されるのは古墳時代以降ということになる。これは第3砂堆上に弥生集落が展開する知多市などとは様相を異にする。その理由としては、大田町周辺では内陸側に奥まった、いわば谷状地形であったことから、第1砂堆が大きく発達し、居住に適していたことが考えられる。

大田町周辺には上記の遺跡の他、主に弥生時代の集落である烏帽子遺跡（縄文～近世）、尾張藩2代藩主徳川光友の浜御殿である横須賀御殿跡などの遺跡が存在する。また、近世には第3砂堆の先の海岸部が新田開発されて埋め立てられた。川北新田、川南新田、浜新田がそれである。中でも浜新田からは、圃場整備に伴って新田堤防の扒（いり）が出土している。こうした近世の新田開発や大田川の付け替えに加え、現代の埋立てによって弥生時代以来の景観は失われているが、遺跡の分布や僅かに残る砂堆の痕跡などから、かつての環境を復元することができる。

第3節 畑間遺跡における既往の調査

畑間遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、土地区画整理事業実施以前は試掘調査も含めて、発掘調査は実施されていなかった。初めて調査されたのは、前述のとおり平成8年度実施の土地区画整理事業に先立つ試掘調査である。調査では土地区画整理事業の予定区域内に20箇所のトレンチを設定して試掘調査を行った。このうち畑間遺跡、東畑遺跡に関係するトレンチは12箇所に上る。この試掘調査によって範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが遺跡の範囲を特定することができた。各遺跡の時期については、畑間遺跡については中世から近世の時期、東畑遺跡については弥生時代中期から古墳時代前期の時期と、古代から中世の時期であることが推測された。

その後、平成11年度から土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査によって、畑間遺跡、東畑遺跡それぞれの発掘調査が行われることで各遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第3図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗に応じて調査を実施しており、家屋移転の進捗状況が進んでいなかった調査の初期段階には小規模な調査とならざるを得なかった。このため、遺跡全体の様相のみならず、近隣の調査区での遺構との整合を図ることすら調査の初期段階では困難な状況であった。

調査の初期段階は駅前から延びる街路（駅前線）を中心に調査を行ったことから、南北方向に長く延びた畑間遺跡の中央部を東西方向に調査する形となった。その後、周辺の街区道路の調査を順次実施している。これまでの調査では、主に縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺物・遺構を確認している。特筆すべき事項としては、1点目に縄文時代後期以降の縄文土器がまとまって出土したことがある。畑間・東畑遺跡が立地する砂堆の形成時期を示唆する新たな知見である。2点目に弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、それぞれの時期毎の生活域が分かかってきたことも挙

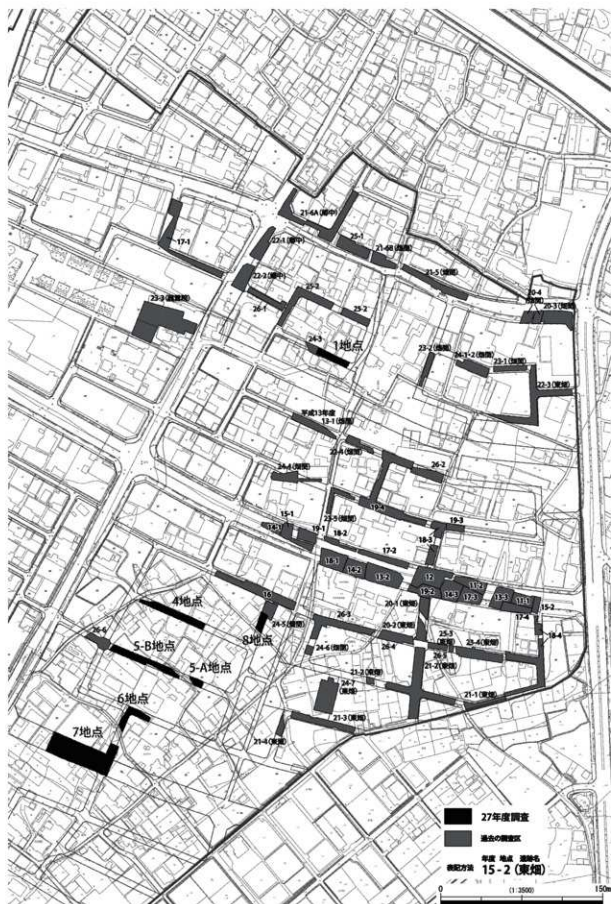


図4 既往の調査地

げられる。近年の調査では、駅前線以外の街区道路部分の調査も進んできており、おぼろげながらではあるが、遺跡内での集落の消長をたどることができるようになってきている。

なお、調査開始時の平成 11 年度から平成 19 年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告^(注3)を行うと共に並行して整理事業を実施し、平成 25 年度に報告書を刊行している^(注4)。平成 20 年度以降は民間調査機関の支援を受けて調査を実施しており、基本的には調査翌年度に報告書を刊行している。既往の調査で刊行した発掘調査報告書は表 1 のとおりである。

注 1：『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』愛知県教育委員会 1999

注 2：『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』東海市教育委員会 1997

注 3：「伊勢湾を望む海辺の遺跡－東畑遺跡等発掘調査概報－」東海市教育委員会（永井伸明・宮澤浩司）

『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会 2007

「伊勢湾を望む海辺の遺跡（2）－平成 19 年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要－」東海市教育委員会（宮澤浩司）『研究報告とうかい』第 2 号 東海市教育委員会 2009

注 4：『愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告－平成 11 ～ 19 年度調査－』東海市教育委員会 2014

調査年次	書名	発行機関	編集機関	発行年
平成 20 年度	愛知県東海市畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際航業株式会社	2009 年（平成 21 年）
平成 21 年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	2012 年（平成 24 年）
平成 22 年度	愛知県東海市平成 22 年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	2012 年（平成 24 年）
平成 23 年度	愛知県東海市畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2013 年（平成 25 年）
平成 24 年度	愛知県東海市平成 24 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	2014 年（平成 26 年）
平成 11 年度 ～ 19 年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告 －平成 11 ～ 19(1999 ～ 2007) 年度調査－	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2014 年（平成 26 年）
平成 25 年度	愛知県東海市平成 25 年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告書	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	2015 年（平成 27 年）
平成 26 年度	愛知県東海市平成 26 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告書	東海市教育委員会	国際文化財株式会社中部支店	2016 年（平成 28 年）

表 1 既刊報告書一覧

第4節 調査経過

畑間遺跡発掘調査業務委託は、平成27年5月7日に契約を締結し、6月8日から現地調査を開始した。

最初に着手した発掘現場は1地点であり、6月8日に重機による機械掘削を開始した。中世遺物包含層の上面まで機械掘削を行い、遺物を取り上げつつ包含層を人力で掘削し、地山直上で遺構検出を行う予定であった。しかし、1地点のほぼ全体が後世の攪乱により地山直上まで削平されており、6月11日に機械掘削を終了し攪乱を掘削した時点で、中世遺物包含層がほとんど残存しない状況であった。また、1地点の西側約3分の1は特に深く削平されており、湧水により常に水没する状況であった。西側の一部を掘削し地山を確認した所、東側の地山露出面より50cm以上の深さまで後世の削平を受けていることが判明したため、遺構検出は東側部分で行った。遺構掘削および記録作業は6月16日にほぼ終了した。6月17日に高所作業車での写真撮影をした後、調査区東端部の補足調査を行い、1地点の調査を終了した。

次に、7地点の調査に着手した。6月22日に調査区西端部から機械掘削を開始し、中世遺物包含層を残して掘削した。この際、幅約7m、長さ約22mの大型の攪乱を検出し、一部確認のため地表から2mの深さまで掘削したが、地山を確認することができず、湧水や法面崩落の危険を避けるため40～50cm程度の掘削に止めることとなった。その後も東へ向けて機械掘削を継続し、6月30日に終了した。包含層掘削は6月23日から機械掘削と並行して行い、機械掘削終了時点で調査区西端から中央までの包含層掘削を終えた。この後の人力作業では調査区内で約15m程度に範囲を区切り、包含層掘削、攪乱掘削、遺構検出を行った。これは、調査区全体が砂質であり、検出面の乾燥が速く、広範囲での検出状況の記録が困難であったためである。調査区全体をブルーシートで養生し、作業毎に必要な部分のみ養生を撤去して作業にあたった。また、作業中は随時散水し、掘削面、検出面の乾燥を防いだ。

7月から9月にかけて台風や雨天が続き、屋外での作業日数は、7月は11日間、8月は12日間、9月は13日間まで減少した。雨天時は事務所内で遺物洗浄等の作業を行った。8月19日から遺構の掘削を開始し、10月14日には竪穴建物と調査区中央の方形周溝墓を検出した状態で残し、他の遺構の掘削を終了した。10月21日に高所作業車での写真撮影を行った後、竪穴建物と方形周溝墓の調査を行い、11月5日に7地点の調査を終了した。

4地点の調査は7地点の後半と並行して行った。10月14日に調査区西端部から東へ向けて機械掘削を開始した。調査区西端から中央までの約半分が後世の攪乱を受けており、湧水があったため、掘削面を上げて湧水しない深度で掘削を継続した。調査区中央以東で地山および遺物包含層が残存しており、包含層上面で掘削を止め、10月20日に機械掘削を終了した。10月22日から23日にかけて包含層掘削および遺構検出を行い、10月26日から遺構掘削を開始した。途中、10月29日から11月5日までの間、7地点の調査に集中するため4地点の掘削作業を中止した。11月6日から作業を再開し、11月13日に遺構掘削を終了した。11月16日に高所作業車での写真撮影をした後、補足調査として調査区東部の土器集中部の記録および取り上げを行い、4地点の調査を終了した。

次に、8地点の調査に着手した。11月18日に機械掘削を開始し、11月20日に終了した。その後、

北端の24年度調査区と重複する部分の遺構およびトレンチを完掘し、北から南へ向け包含層掘削、遺構検出を行い、11月23日に遺構検出状況を撮影した。11月24日から遺構掘削を開始した。調査区中央付近の土坑墓から人骨が出土し、記録・取り上げが終了するまでの間、土坑墓ごと土嚢や板材、ブルーシートで保護して雨水対策とした。12月4日まで遺構掘削および記録作業を行い、8地点の調査を終了した。なお、8地点の完掘状況撮影は、進入路が狭く高所作業車の移設ができなかったため、これの使用を断念し、残土の上と脚立からの撮影を行った。

次に、5地点の調査に着手した。5地点の調査範囲は間に通路を挟むため、2区画に分かれ、東端の小区画を5-A地点、残りの西側を5-B地点とした。また、5-B地点の中央部は南側のビニールハウスが使用中であったため、これを控えたことにより括れた形状となっている。12月7日に5-A地点の機械掘削を行い、全体的に後世の攪乱を受けていたために、地山直上まで掘削した。同日中に遺構検出および検出状況撮影を終了した。12月8日に遺構掘削、記録作業、完掘状況撮影を行い、5-A地点の調査を終了した。

続いて5-B地点の機械掘削を12月9日に開始し、中世遺物包含層を残して掘削した。12月14日に機械掘削を終了し、調査区西端から人力掘削を開始した。調査区の乾燥やひび割れによる崩落を防ぐため、7地点と同様に15m程度の範囲毎に包含層掘削、遺構検出、遺構掘削、記録作業を行った。平成28年1月21日に高所作業車から調査区全景を撮影した後、補足調査としてSZ5054周辺の弥生時代包含層の掘削と、調査区中央付近および東端の下層確認を行い、1月22日に5地点の調査を終了した。

次に、6地点の調査に着手した。機械掘削は1月14日から5地点の調査と並行して行い、1月19日に終了した。人力による攪乱掘削および包含層掘削は1月15日から機械掘削と並行して行い、1月22日に終了した。1月26日・27日に遺構検出を行い、遺構掘削を開始した。途中、1月30日に現地説明会を催した。掘削作業と並行して6地点周辺の清掃や会場の準備を行い、今年度調査の写真と遺物を展示した。当日は70名の参加者があった。現地説明会終了後、遺構掘削を継続し、2月18日に終了した。遺構掘削時、調査区北西部のSZ6125上層からパレススタイル壺の体部片が出土した。機械掘削時に同様のものと思われる破片が付近から出土しており、接合遺物の出土を期待して補足調査時に調査区西壁法面のSZ6125埋土を掘削したが、この補足調査では遺物は出土しなかった。6地点の完掘状況撮影は道幅の関係上、高所作業車の使用を断念し、2月19日、脚立による撮影と7地点残土の上からの撮影を行った。その後、補足調査を行い、6地点の調査を終了した。

2月22日から資材の撤去を行い、全調査区での作業を終えた。その後、現場事務所で遺物注記、写真整理、台帳整理、図面整理作業を進め、3月11日に遺物を東海市に納品した。3月14日から現場事務所の資材・機材等の撤去を開始し、18日に事務所の解体・資材運搬を終えて東海市の現地作業を終了した。

その後、大阪府八尾市の島田組本社で成果品納品に向けての整理作業を開始し、30日に東海市に成果品を納入。平成27年度畑間遺跡発掘調査業務委託はこの日をもって完了した。

平成28年度は本書を刊行するため、5月18日に業務委託契約を締結して、遺物の2次整理および報告書作成を開始し、平成29年3月31日に本書を刊行するに至った。

第2章 畑間遺跡の調査

畑間遺跡の本年度の調査地点は1・4～8地点の計6地点である。各調査地間には一定の距離があるため、本報告書では地点ごとに分けて報告をおこなう。

第1節 1地点の調査

I 概要と基本層序

1地点は、畑間遺跡の北西端部に位置し、隣接する郷中遺跡との境に所在する。現地は、明応2年(1493)創建と伝えられる常蓮寺(西山浄土宗)の西側に近接しており、中世～近世にかけての集落の中心部であったと考えられる。また、24年度調査の3地点の東側延長上に位置する。

1地点は、調査区のほぼ全体が後世の開削を受けており、調査区の西側の約3分の1が地山以下まで深く削平されていた。そのため、遺構が確認できたのは調査区中央～東端に限定された。遺構は、土坑やピットを主体としており、その他に溝や柱穴等もわずかではあるが確認しており、耕地化する以前は宅地であった可能性も考えられる。調査区全体で主に中世以後の遺物が多く出土しており、検出した遺構も当該期に比定できるものと考えられる。これらはすべて地山直上で検出しているが、先に述べた通り、調査区内のほとんどが地山直上まで後世の削平を受けおり、検出した遺構の多くが5～10cm程度の浅いものであった。

以下の基本層序は調査区中央～東側で比較的堆積が安定した部分で確認したものである。

- 1: 表土(黒褐色砂質土・黄灰色砂質土)
- 2: 耕土または堆積層(黄灰色砂質土) 近世以後の遺物包含層
- 3: 耕土または堆積層(黒褐色砂質土) 中世以後の遺物包含層
- 4: 地山(にぶい黄色砂～粗砂)

1は宅地化した際の盛土と考えられる。部分的に、破碎した貝殻片を含む層がみられる。

2は後世の造成等により削平を受け、部分的にのみ確認できた層で、宅地化する以前の耕土の可能性もある。近世以後の遺物を包含する。

3は山茶碗や常滑焼などの中世の遺物を包含する層で、1と同様に後世の削平の影響を受けており、部分的に確認できた層である。

4は砂堆を形成する地山層である。基本的に砂～粗砂の堆積で、海岸部の様相を色濃く残している。また、調査地内の狭い範囲の中であるが、東から西へ向けて地山がわずかに下降していく状況がみられる。なお、本調査の遺構検出は、この地山の上面で行っている。

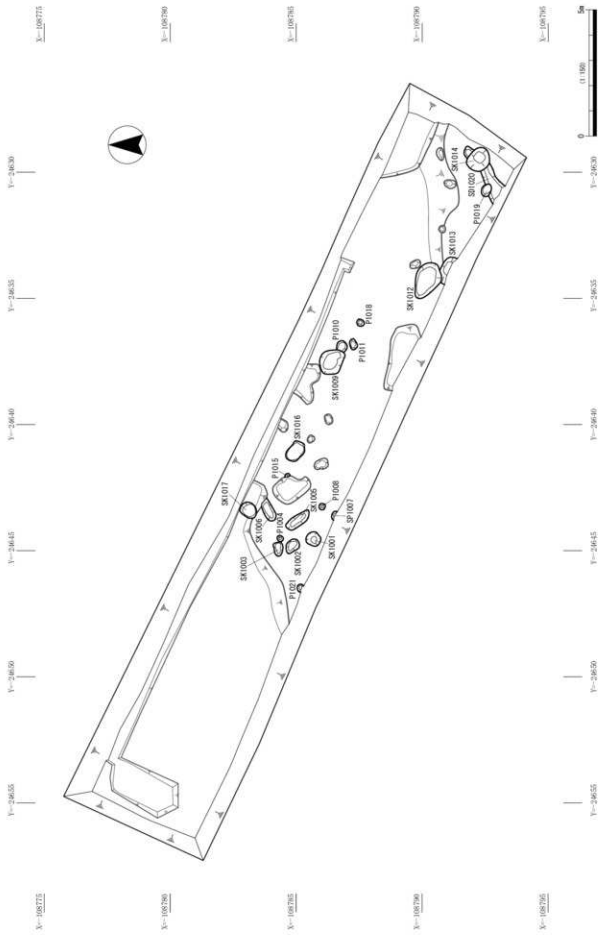


图 5 1 地点遺構平面図

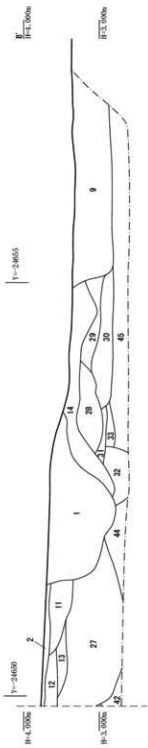
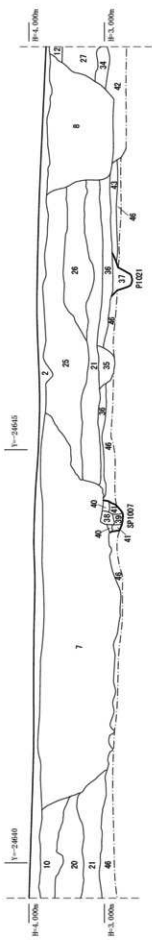
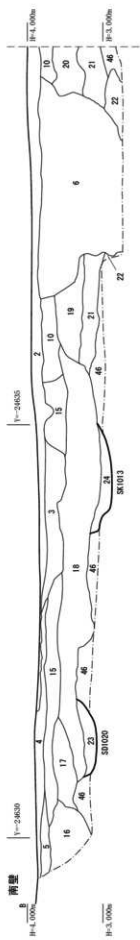


图 6 1 地点南壘土層断面图

II 検出遺構

1地点では主に柱穴、土坑、溝などを検出している。地山を削平するほどの深さの攪乱が多く、西半部はほぼ削平されていたため、すべての遺構を東半部で検出した。主に中世～近世の遺構が主体であり、それ以前の遺構とみさせるものはない。以下、これらについて主要な遺構を中心に報告する。

SP1007 (図8・写真1-1) 調査区中央南壁際で検出した長軸0.37m、深さ0.27mの柱穴である。採取痕跡から、直径0.15m程度の柱が推定される。調査区内に他の柱穴は確認できず、これが建物等の構造物を構成するものであれば、南側調査区外へ展開する可能性がある。遺物は出土していない。

SK1009 (図9・写真1-2) 調査区中央付近で検出した長軸1.13m、短軸0.96m、深さ0.16mの土坑である。土器類38点が出土しており、山茶碗、土師質土器を主体とする。これらの内の多くが小片であり、特に土師質土器の年代比定は困難であるが、山茶碗は藤澤編年7～8型式に該当し、13世紀中葉～14世紀前葉に比定できる。

SK1012 (図9) 調査区西側で検出した長軸1.55m、短軸1.01m、深さ0.10mの土坑である。土器類14点が出土しており、山茶碗、土師質土器を主体とする。これらは13～14世紀に比定できる。

SK1016 (図9・写真1-3) 調査区中央で検出した長軸0.89m、短軸0.60m、深さ0.22mの土坑である。土器類24点が出土しており、その内訳は山茶碗16点を主体とし、弥生土器1点、灰軸陶器1点、土師質土器4点、瀬戸美濃産陶器1点、常滑焼1点である。山茶碗は概ね13世紀中葉～14世紀中葉に比定できるが、常滑焼は近世以降に比定できるものであり、出土遺物の年代幅が広く、帰属時期の推定は困難である。

SD1020 (図9・写真1-4) 調査区南東端部で検出した幅0.78m、深さ0.23mの溝であり、北東から南西に向けてわずかな傾斜が認められる。出土遺物は土器類5点と少量だが、その内訳は弥生土器2点、土師器2点、須恵器1点と他の遺構に対し古相を示す。いずれも小片で年代比定は困難であったが、この内、須恵器坏蓋は折戸10号窯式期に属するものであり、当該期以後に埋没した溝であると考えられる。

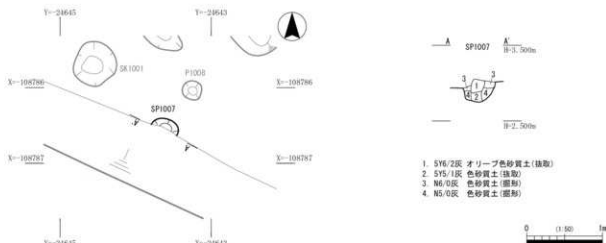


図8 SD1007 平面図・断面図

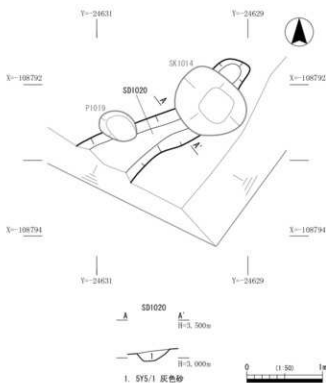
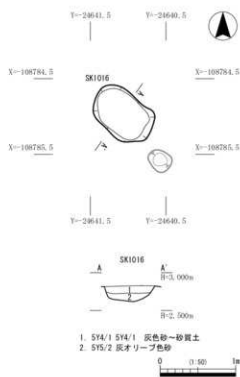
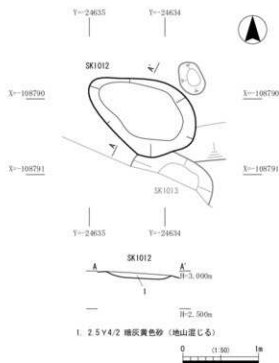
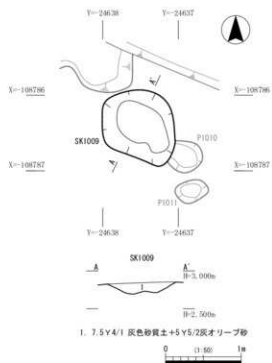


図9 1地点土坑・溝平面図・断面図

III 出土遺物

1地点では土器類、土製品などが破片総数で528点出土した。この内、遺構から出土した遺物は110点と少量である。これら遺構出土の遺物は小片であり、図化に耐えうる遺物は極少量であった。そのためここでは、調査区全体でまとめて報告する。

須恵器 (図 10-1 ~ 2・写真 24) 須恵器が少量ながら出土している。ほぼ小破片であり、その中で図化できたものは2点である。1は坏身である。底部をほぼ水平に整形し、内外面ともに丁寧な回転ナデにより調整される。高台は高さ1.1cmとやや高く、断面形状は方形で外端部が接地する。底部のみ残存しており、体部の形状は不明だが、7世紀後葉~8世紀後葉に比定できる。2は鉢である。口縁部があまり開かない器形であり、円盤状の底部を持つ。7世紀後葉~8世紀中葉の製品に類似を見る。

灰釉陶器 (図 10-3 ~ 4・写真 24) 灰釉陶器が2点出土しており、いずれも小片である。3は碗の底部で、内外面及び高台に至るまで丁寧な回転ナデにより調整される。高台はやや扁平で、外端部が接地する。4は碗の口縁部~体部の破片で、器壁が薄く、端部が外反する。

山茶碗 (図 10-5 ~ 11・写真 24 ~ 25) 5~9は山茶碗の碗である。1地点では山茶碗が多量出土しているが、全て破片であり口縁部から底部までを復元できる資料は無かった。5は北部系山茶碗である。胎土が尾張型に対し緻密で器壁が薄い。藤澤良祐氏の分類上9~10型式に比定できる。6~9は尾張型山茶碗である。体部がわずかに湾曲するもので、いずれも4~5型式に比定できる。10~11は山茶碗の皿である。碗と同様に多量出土している。10は北部系山茶碗の皿である。器壁が非常に薄く、器高は1.2cmと浅い。11は尾張型山茶碗の皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は方形を呈する。いずれも7~8型式に比定できる。掲載したもの他、4~11型式の山茶碗が確認できる。詳細に型式分類ができない破片資料が多く、また小破片であり、精密な数量調査はできないが、確認できるものの中では7~9型式のものが最も多かった。

土師質土器 (図 10-12 ~ 15・写真 25) 破片総数で、171点の土師質土器が出土している。その大半は鍋や釜など薄手の土器の破砕片であるため、器種認識の困難なものが多い。この中で、土師皿が少量ながら出土している。12はロクロ成形土師皿である。底部に回転糸切り痕がみられる。口縁部に煤が付着しており、燈明皿として使用されていたものと考えられる。13は非ロクロ成形土師皿である。体部と底部の境界が不明瞭で、底部から口縁部にかけて緩やかに湾曲する。底部に幅0.5mm~1mm程の墨書に似た痕跡があるが、詳細は不明である。14は鍋である。口縁部~体部までの破片だが、同調査区内で特徴の近似する内耳鍋片が出土しており、これと同様のものと思われる。復元口径22.6cmを測り、体部から口縁部にかけて内彎する。外面は弱いナデ調整で仕上げるが、指頭圧痕が明瞭に残る。内面は板状工具で調整される。鈴木正貴氏の分類上、内耳鍋B2類相当し、16世紀中葉に比定される。15は釜である。口縁部~体部上方のみ残存しており、鏝の有無は不明。口縁部内外面は丁寧なナデ調整。体部外面弱いナデ調整で仕上げるが、指頭圧痕がわずかに残る。羽付釜A2・A3類、または羽無釜B1類に相当し、16世紀中葉~後葉に比定される。

製塩土器 (図 10-16・写真 25) 製塩土器が1点出土している。脚部のみ残存し、杯部の形状は不明。脚部は下方に向けて細くなる棒状を呈し、手で握り込んで成形した痕がみられる。知多式製塩土器

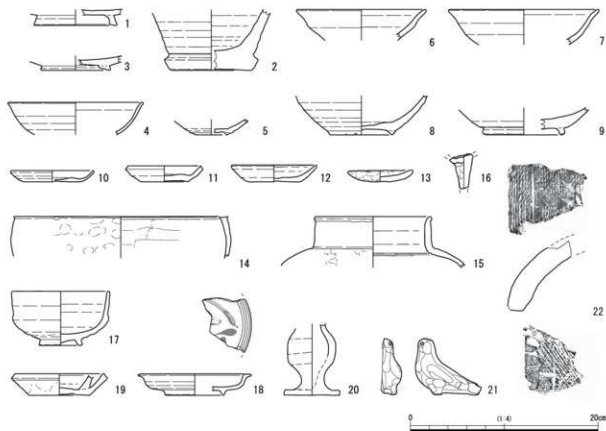


図10 1地点出土遺物

3類に比定できる。

瀬戸美濃産陶器 (図10-17～20・写真25) 瀬戸美濃産陶器は破片点数で53点出土している。中世～近世までのものが出土し、その多くを登窯製品が占めるが、その中でも古相を示す古瀬戸、大窯製品で実測可能なものを掲載した。17は丸碗である。削り出し高台を有し、体部下方は丸みを帯びる。体部中ほどから口縁部にかけて下方に対し器壁が薄くなり、ほぼ直立する。高台周辺を除き鉄軸が施される。16世紀後葉に帰属するものと思われる。18は折縁皿である。器高は低く、2.3cmを測る。断面三角形の付台を有し、体部下方に強い丸みを持つ。口縁部は大きく外反し、口縁上面に2条の沈線が巡る。底部外面を除き灰軸が施され、底部内面に鉄絵が描かれる。大窯4後半～末のものに近似するため、16世紀末～17世紀初頭の産であろう。19は2重の体部を持つ皿である。その形状から、灯明皿の受皿と考えられる。底部削り込み高台で、体部は底部外縁から口縁にかけて直線的に開く。口縁部と内面に灰軸が施される。20は花瓶である。底部に回転糸切り痕がみられる。底部周辺を除き外面に鉄軸が施される。体部上方より上が欠損しており全体形は不明だが、概ね14世紀中葉～15世紀の時期に帰属するものと思われる。

その他の遺物 土器類として縄文土器、弥生土器、土師器が少量出土しているが、いずれも小片であるため、器種すら不明である。縄文土器に関しては、周辺の調査で縄文時代晩期の土器が出土しているため、この時期に帰属する蓋然性が高い。また、常滑焼の甕、鉢が多数出土しており、時期の比定できるもので13世紀～17世紀までのものを確認している。この他、鳥形の人形 (図10-21・写真25) や丸瓦 (図10-22・写真25) が出土している。

第2節 4地点の調査

I 概要と基本層序

4地点は畑間遺跡の西端に所在し、5地点の北側および8地点の西側に位置する東西道路部分の調査地である。本調査地では主に弥生時代の溝や中世の掘立柱建物、区画溝等を検出した。弥生時代の溝に関して、方形周溝墓の周溝である可能性を示すものを掲載している。これらについて調査範囲が狭く、平面形状が不明瞭であるため、遺構種別は調査時に付した「SD」をそのまま使用した。

本調査地は西半部が近年の攪乱により地山以下まで削平されていた。そのため、基本層序については東半部での記述とする。

- 1: 耕土 (黄灰色土)
- 2: 耕土または堆積土 (灰褐色砂質土)
- 3: 中世遺物包含層 (暗褐色砂質土)
- 4: 弥生時代前期遺物包含層 (黄褐色砂質土)
- 5: 地山 (淡黄色砂)

1は現地表面であり、近年耕作を行った際の耕土であると考えられる。

2は耕土または堆積土と考えられる層位である。調査区全域で概ね一致する。

3は中世の土器を含む包含層である。人力掘削はこの層の上面から開始し、包含層としてグリッドごとに一括し、遺物の取り上げを行った。

4弥生時代前期の包含層である。調査区東端で部分的に確認した堆積で、弥生時代前期に比定できる土器がまとまって出土した。

5は遺物を含まないいわゆる地山である。砂堆の堆積層であり、色調が場所により異なるが、概ね調査区全体で一致する。

II 検出遺構

4地点では、弥生時代および中世に比定できるピット、土坑、溝、杭列などが確認された。これらは全て調査区中央～東端で検出した遺構である。このうち、主要な遺構について以下に記述する。

SD4006(図15・写真3-8～9) 調査区中央部で検出した幅3.39m、深さ0.37mの溝である。幅が広く、断面形は底部が平らな皿状を呈する。埋土に弥生土器、土師質釜、常滑焼甕片を含むが小片のため詳細な時期は不明である。検出当初、SD4007との埋土の差が明瞭でなかったため、SD4007の遺物と混在している可能性がある。

SD4007(図15・写真3-8～9) 調査区中央部で検出した幅1.77m、深さ0.48mの溝である。南北方向に延びるも平面形はわずかに蛇行する。弥生土器片10点が出土したが、SD4006を削平することから中世以降に帰属する。

SD4028(図16・写真3-10～11) 調査区東部で検出した幅1.17m、深さ0.25mの溝である。溝の

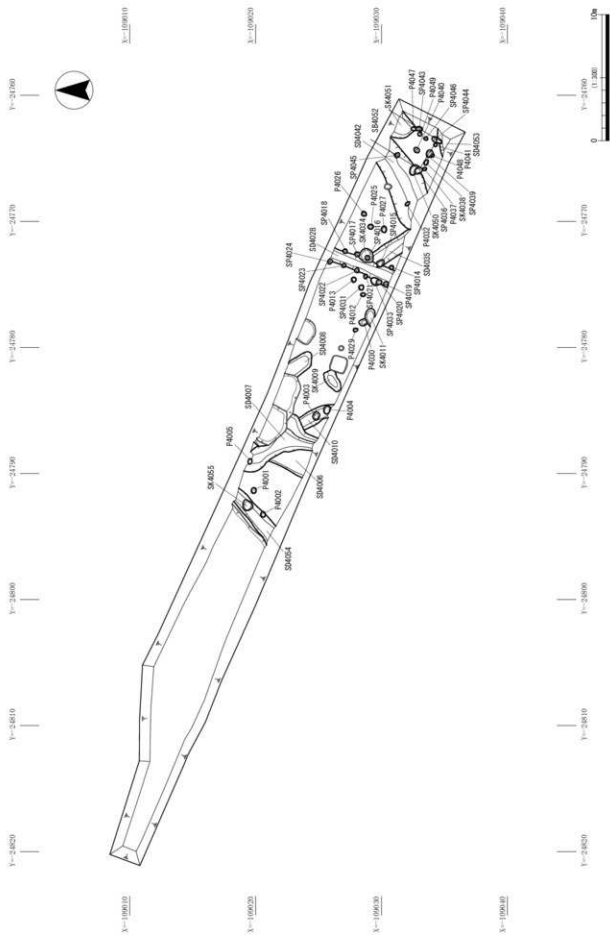


图 11 4 地点通構平面图

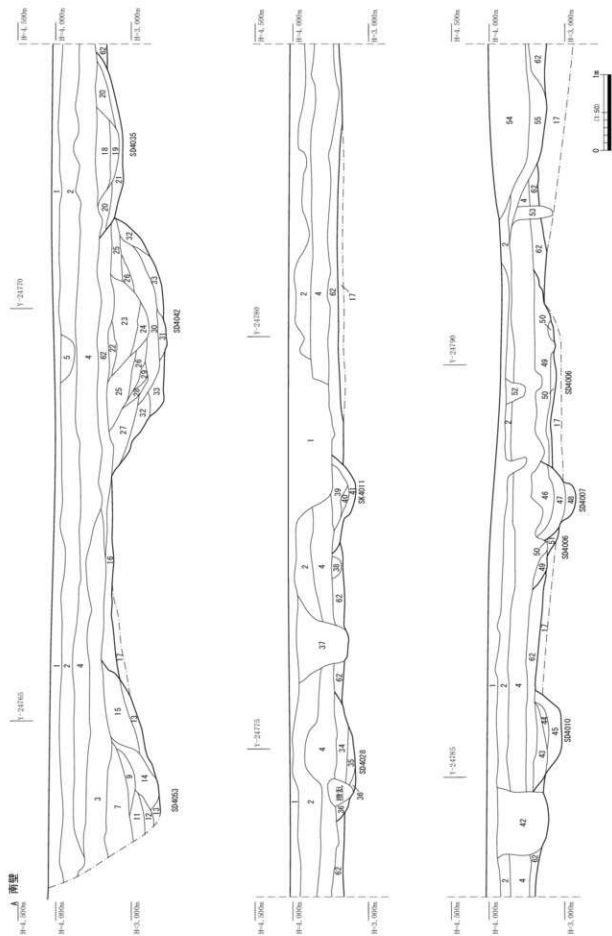


图 12 4 地点南墙土层断面图 1

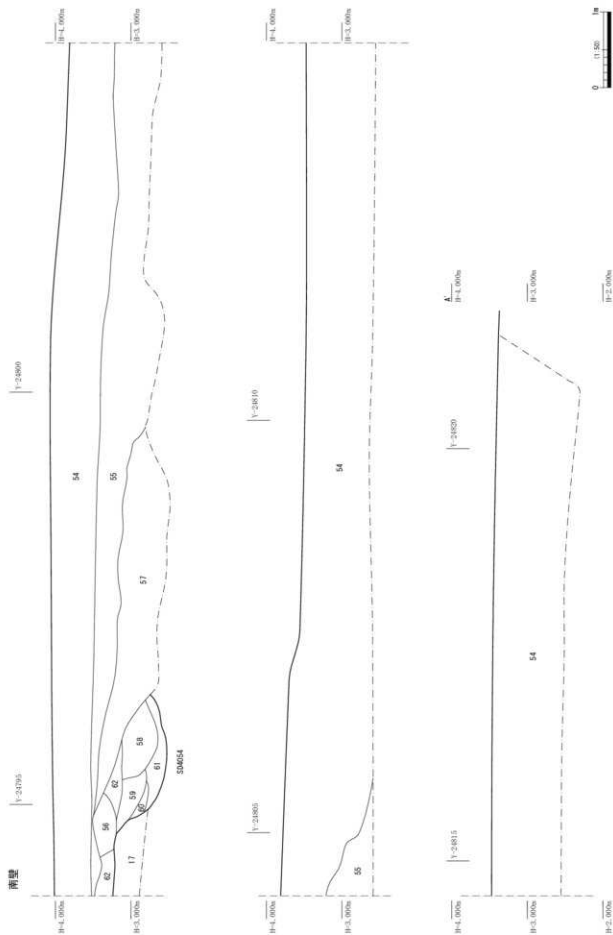
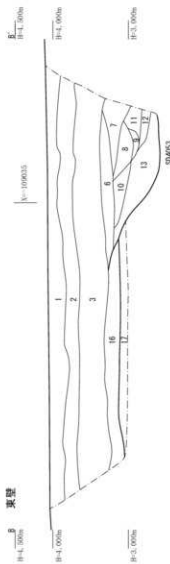


图 13 4 地点南壁土層断面图 2



4地点層ノ要説

1. 2.5V4/1 黄灰色土 (粘土)
2. 2.5V4/2 灰褐色砂質土 (粘砂土)
3. 2.5V4/3 粘砂質土
4. 10V8/1 粘砂質土
5. 2.5V5/1 灰色砂質土
6. 7.5V5/2 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
7. 10V8/1 褐色砂質土 (SP-4053層土)
8. 2.5V5/1 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
9. 2.5V6/2 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
10. 10V8/2 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
11. 10V8/2 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
12. 2.5V4/2 暗灰色砂質土 (SP-4053層土)
13. 2.5V5/1 暗褐色砂質土 (SP-4053層土)
14. 2.5V5/1 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
15. 2.5V4/1 黄灰色砂質土 (SP-4053層土)
16. 2.5V5/3 黄褐色砂質土 (特殊時代粘砂層包帯層)
17. 2.5V5/3 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
18. 2.5V5/1 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
19. 2.5V6/1 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
20. 2.5V6/2 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
21. 2.5V7/3 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
22. 2.5V5/2 暗灰色砂質土 (SP-4042層土)
23. 2.5V5/2 暗褐色砂質土 (SP-4042層土)
24. 2.5V5/2 黄褐色砂質土 (SP-4042層土)
25. 2.5V5/3 砂才ノ一層砂質土 (SP-4042層土)
26. 5V4/2 暗灰色砂質土 (SP-4042層土)
27. 2.5V5/2 暗灰色砂質土 (SP-4042層土)
28. 2.5V4/1 灰色砂質土 (SP-4055層土)
29. 2.5V7/2 灰褐色砂質土 (SP-4042層土)
30. 2.5V5/1 黄灰色砂質土 (SP-4042層土)
31. 10V8/2 灰褐色砂質土 (SP-4042層土)



32. 2.5V7/3 黄褐色砂質土 (SP-4042層土)
33. 2.5V6/1 灰色砂質土 (SP-4042層土)
34. 2.5V5/3 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
35. 2.5V6/3 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
36. 2.5V6/3 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
37. 5V4/1 灰色土-砂質土
38. 10V8/1 灰色砂質土 (SP-4053層土)
39. 2.5V5/1 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
40. 2.5V5/1 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
41. 2.5V6/3 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
42. 5V4/1 灰色土
43. 2.5V5/2 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
44. 2.5V5/2 暗灰色砂質土 (SP-4053層土)
45. 2.5V6/2 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
46. 2.5V5/3 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
47. 2.5V5/4 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
48. 5V6/3 灰褐色砂質土 (SP-4053層土)
49. 2.5V5/2 暗褐色砂質土 (SP-4053層土)
50. 2.5V7/4 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
51. 2.5V7/4 黄褐色砂質土 (SP-4053層土)
52. 5V4/1 灰色土
53. 5V4/1 灰色土
54. 5V4/2 灰褐色砂質土 (粘土)
55. 10V8/2 灰褐色砂質土 (粘土)
56. 2.5V4/3 砂才ノ一層砂質土
57. 5V4/2 砂才ノ一層砂質土 (粘砂多量混合心、底部の透物層多ク出土)
58. 2.5V4/1 灰色砂質土 (SP-4055層土)
59. 2.5V4/1 灰色砂質土 (SP-4055層土)
60. 2.5V5/2 暗褐色砂質土 (SP-4054層土)
61. 2.5V6/4 灰褐色砂質土 (SP-4054層土)
62. 10V8/3 黄褐色砂質土



図 14 4 地点南壁土層断面図 2

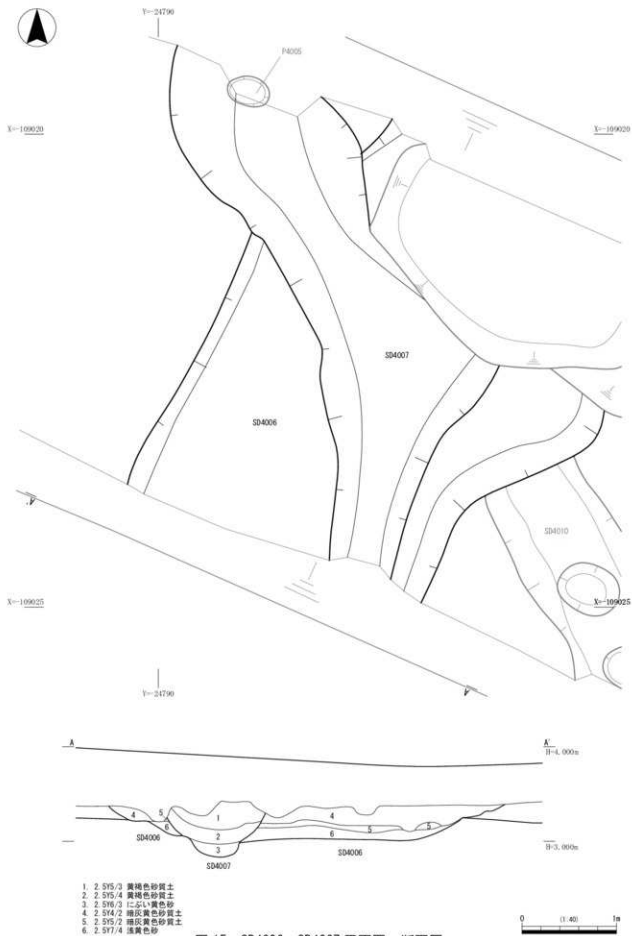
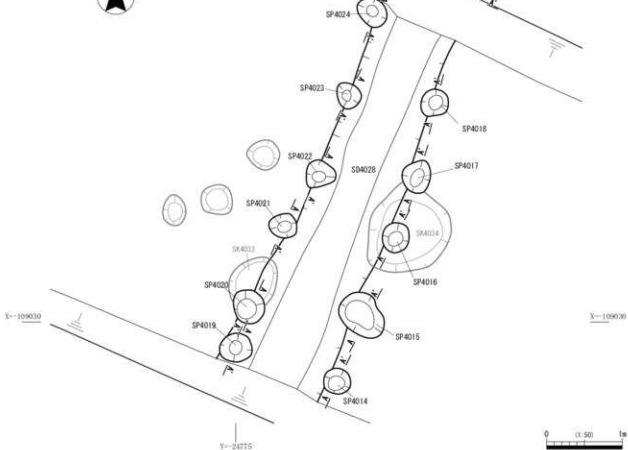


图 15 SD4006·SD4007 平面图·断面图

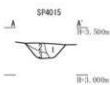
X=109025

Y=24275

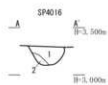
X=109025



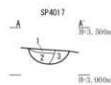
1. 2.5Y7/3 浅黄色砂
2. 2.5Y7/2 灰黄色砂



1. 2.5Y6/2 灰黄色砂 (採取)
2. 2.5Y7/3 浅黄色砂 (観察)
3. 2.5Y7/2 灰黄色砂 (観察)



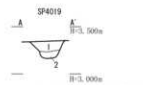
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂 (採取)
2. 2.5Y7/3 浅黄色砂 (観察)



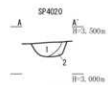
1. 2.5Y7/2 灰黄色砂 (採取)
2. 2.5Y7/1 灰白色砂 (採取)
3. 2.5Y7/3 浅黄色砂 (観察)



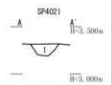
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂 (採取)
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂



1. 2.5Y7/2 灰黄色砂 (灰化物微量含む)
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂



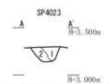
1. 2.5Y7/3 浅黄色砂
2. 2.5Y7/2 灰黄色砂



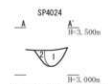
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂



1. 2.5Y6/2 灰黄色砂 (採取)
2. 2.5Y7/3 浅黄色砂 (観察)



1. 2.5Y6/2 灰黄色砂 (採取)
2. 2.5Y7/3 浅黄色砂 (観察)



1. 2.5Y6/2 灰黄色砂 (採取)
2. 2.5Y7/3 浅黄色砂 (観察)



1. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
2. 2.5Y5/4 黄褐色砂質土
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂
4. 2.5Y7/4 浅黄色砂

図 16 SD4028 平面図・断面図

両肩部に柱痕跡がみられる小穴列が確認でき、護岸していた可能性がある。小穴列は整然としていないため塀や柵のような構造物ではなく、溝肩を維持するための護岸杭のような機能が想定される。これは7地点で検出したSD7145と同様の構造であり、中軸方向が概ね揃うため、同時期に機能していた溝と考えられる。

SD4035 (図17・写真3-12～13) 調査区東部で検出した幅1.31m、深さ0.27mの溝である。遺物は弥生土器片が2点出土しているが、1～2cm程の小破片のため時期比定は難しい。南東端をSD4042に削平されているため、弥生時代中期以前に埋没した溝であろう。

SD4042 (図18・写真3-14～4-16) 調査区東端部で検出した幅2.84m、深さ0.69mの溝である。堆積状況から上層と下層に分け掘削、遺物の取り上げを行ったが、上層部から弥生時代中期後葉に比定できる甕が出土した。この甕は部分的に焼成後穿孔がみられ、祭祀、儀礼に使用されたものである可能性がある。溝の規模や出土遺物の状況から、この溝は方形周溝墓の周溝である可能性が指摘できる。

SD4053 (図19・写真4-17～18) 調査区南東端で検出した幅0.66m、深さ0.63mの溝である。弥生時代中期の土器片が19点出土しており、検出した規模に対して出土量が多い。調査区端のため確認できたのは狭小な範囲だが、溝の深さや埋土の状況が上述したSD4042と似ており、こちらも方形周溝墓の周溝の可能性が考えられる。

SB4052 (図20・写真2-7) 梁間2間、桁行2間以上の掘立柱建物である。SP4036、4039、4044、4043が柱穴と考えられ、間口が南西にあったと想定すれば、SP4045もこの建物の柱穴であった可能性がある。柱間は約4尺と短い、平成22年度調査の4地点で検出した掘立柱建物に類似しており、この建物同様に江戸時代の所産である可能性がある。

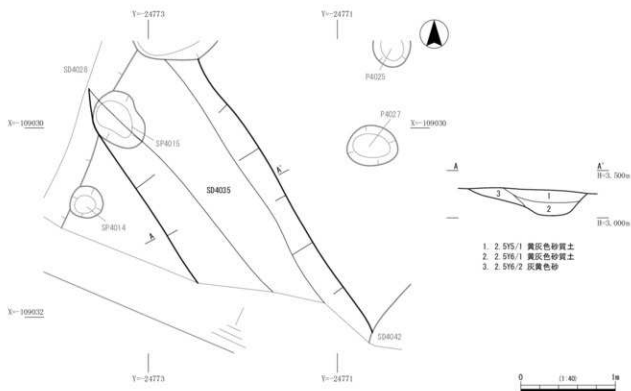


図17 SD4035平面図・断面図

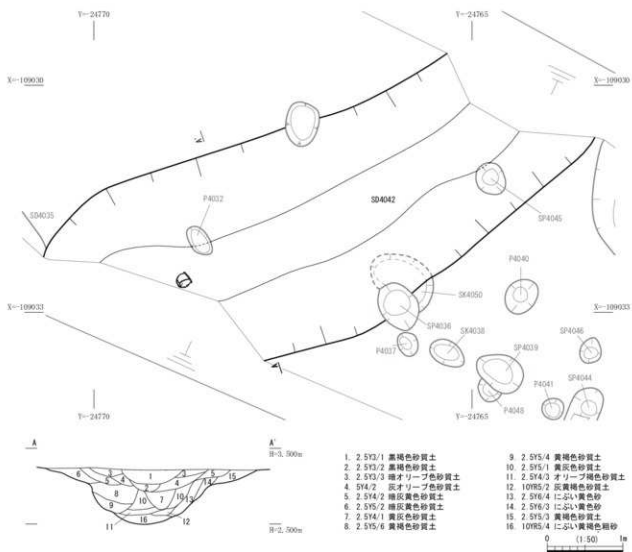


図 18 SD4042 平面図・断面図

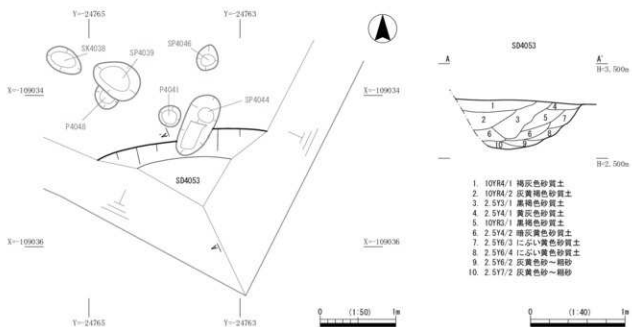


図 19 SD4053 平面図・断面図

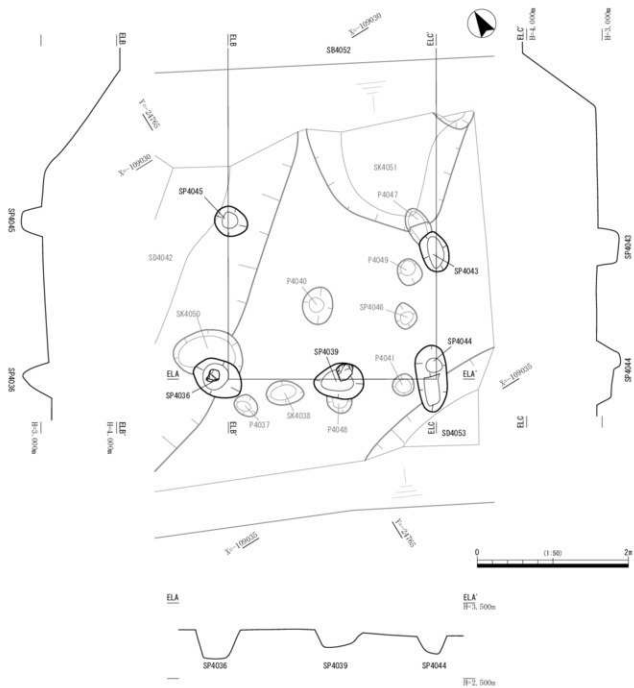


图 20 SB4052 平面图·断面图

III 出土遺物

4地点では破片総数で364点の遺物が出土した。この内の287点が弥生土器であり、弥生時代前期～中期に比定できる条痕文系土器の出土が目立つ。この他、山茶碗、土師質土器等13～16世紀代の遺物が出土しているが、弥生土器に対し中世遺物の出土量は少ない。それらの大半が小破片であり、図化しえるものがなかったため、個々の記述は省略する。

ここでは、弥生中期後葉の方形周溝墓の可能性のあるSD4042、SD4053から出土した遺物を遺構別に記述し、それ以外の遺構や包含層などから出土したものは別途報告する。

i SD4042 出土遺物

弥生土器 (図 21-23～25・写真 26) 23～25は弥生土器である。23・24は底部から体部にかけて大きく開くことから、壺の底部であると思われる。25は台付甕である。脚部は欠損する。内外面ともにナデ調整で、口縁端部に刻み目を施文する。体部上方に焼成後穿孔がみられ、供献土器として使用された可能性がある。古井式期に比定できる。

土偶 (図 21-26・写真 26) 26はSD4042の上層で出土した土偶である。下部が二股に分かれているため、人型の下半部と考えられる。手捏ねにより整形される。

ii SD4053 出土遺物

弥生土器 (図 21-27～29・写真 26) 27～29は条痕文系の弥生土器である。27はその傾きから厚口壺の口縁部付近と考えられる。28・29は鉢である。28がゆるやかに外反するのに対し、29は直線的な体部を持ち、口縁部でわずかに内傾する。

iii 4地点出土その他の遺物

弥生土器 (図 21-30～38・写真 27) 30～38は弥生土器である。このうち、30～32は調査区東部の弥生前期包含層から出土した土器である。30はいわゆる金剛坂式の甕で、口縁部は肥厚し、端部に刻み目を施文する。口縁部直下に半截竹管による平行沈線が廻る。33の外面にこれと同様の沈線が認められ、胎土や焼成も近似するため、同様のものと思われる。31は条痕文系の深鉢である。口縁端部に刺突文を施文する。32は岩滑式期終末に比定できる壺である。沈線区画内に貝殻腹縁による擬縄文を施文する。34は遠賀川系土器の壺である。外面ミガキ後、ヘラ状工具による沈線を廻らせる。31・35～38は条痕文系土器の深鉢である。緩やかに外反する口縁を持つ。弥生時代前期～中期前葉に比定できる。

須恵器 (図 21-39～41・写真 27) 須恵器が5点出土している。これらはすべて遺構外から出土した。39～41は坏身または盤である。どれも底部のみ残る破片で、時期は不明である。内外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリで調整される。

陶磁器類 (図 21-42～44・写真 27) 陶磁器類は27点出土している。42は丸碗である。体部下方の丸みは強く、方形の高台を持つ。瀬戸美濃登窯編年の第7～8小期に比定できる。43は陶胎染付の筒形湯呑である。瀬戸美濃登窯編年の第9小期に比定できる。44は常滑焼の蚊遣りあるいは炬燵の蓋である。19世紀代に比定できる。

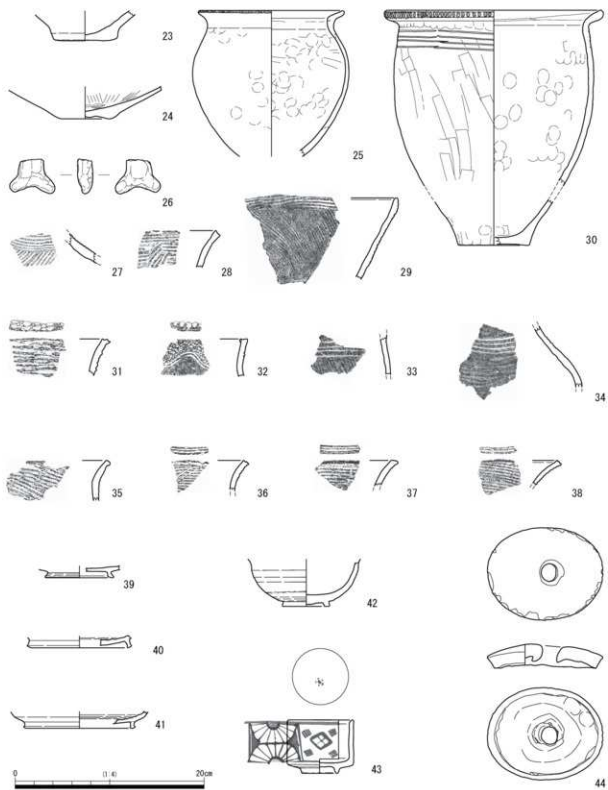


图 21 4 地点出土遗物

第3節 5地点の調査

I 概要と基本層序

5地点は4地点の約50m南西に並行する東西道路部分の調査地である。着手当時、東端から西へ約13m～23mの間を通路として残す必要があったため、調査区を2つに分け、先に着手した東端部約13mを5-A地点、通路を挟んだ西側約68m部分を5-B地点として調査を行った。ただし、遺構番号と出土遺物番号は両地点の通し番号で管理した。5地点では主に方形周溝墓、掘立柱建物、区画溝等を検出した。

5-A地点は調査区全体が現代の攪乱等により削平されており、層序の検討が困難であるため、以下の基本層序は5-B地点の比較的堆積が安定した部分で確認したものである。

- 1: 表土 (褐灰色砂質土)
- 2: 耕土または堆積土 (灰オリーブ色砂質土)
- 3: 耕土または堆積土 (褐灰色砂質土)
- 4: 中世以後の遺構ベース土 (にぶい黄色砂質土)
- 5: 弥生時代以後の堆積土 (にぶい黄褐色砂質土)
- 6: 地山 (明黄褐色砂)

1は現地表面であり、宅地や駐車場、道路、耕作地などの盛土や耕土であると考えられる。

2は耕土または堆積土と考えられる層位である。調査区全域で概ね一致する。

3も2と同様に耕土または堆積土と考えられる。場所により若干の違いはあるが、調査区全域で概ね一致する。近世以降の遺物を包含する。

4は中世以後の遺構のベース土である。人力掘削はこの上面から開始し、包含層としてグリッドごと一括し、遺物の取り上げを行った。色調が場所により異なるが、調査区全域で概ね一致する。

5は調査区中央付近で部分的に確認した層である。この層の上面でSZ5054を検出した。

6は遺物を包含しないいわゆる地山である。砂堆の堆積層であり、色調が場所により異なるが、概ね調査区全体で一致する。本調査区の遺構はSZ5054を除き、基本的にこの層位の上面で行った。

II 検出遺構

5地点では方形周溝墓、掘立柱建物、柱穴、土坑、溝などを検出している。中世の遺構検出時、遺構面と遺構埋土との差が不明瞭であり、平面で捉えることが難しかった。そのため、これらの遺構は地山直上で検出した。ただし、SZ5054に関しては地山上位の包含層中で埋土の一部を確認できたため、本記述内の深さ及び断面図は確認面から記録したものである。以下、主要な遺構について報告する。

SZ5054 (図26・写真5-22～6-25) 5-B地点中央付近で検出した溝延長12.40m以上、幅1.36m、深さ0.65mの方形周溝墓の周溝である。平面形状は隅丸方形を呈する。本調査区では周溝の北半のみ確認でき、主体部は攪乱により削平されていたため、周溝のみ残存する。墳丘の推定幅は7.1m

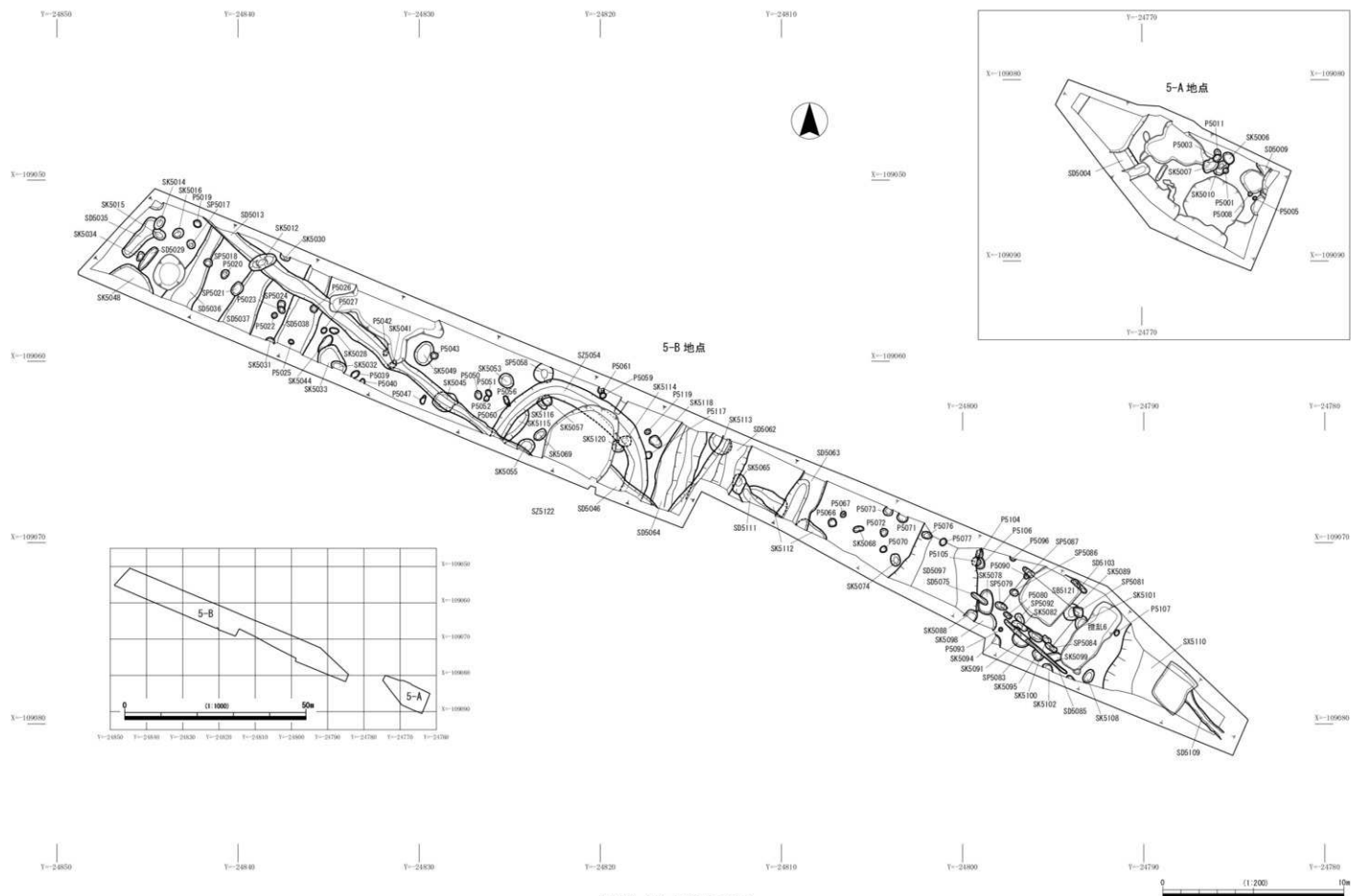


図 22 5地点遺構平面図

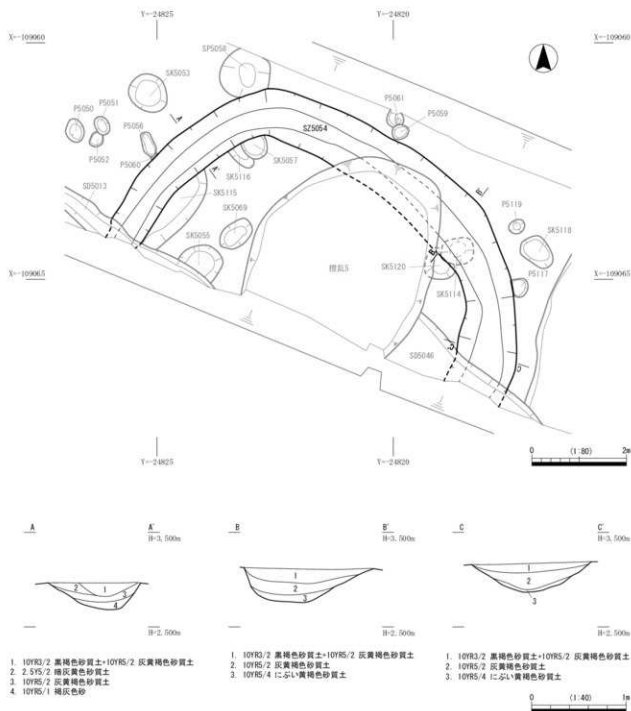


図 26 SZ5054 平面図・断面図

である。出土した遺物は溝の規模に対し 16 点と少なく、ほぼ 3～5cm の小破片である。この内 15 点は弥生時代前期～中期の様相を呈するが、これらは調査区全域で散見されるものであり、埋没時に周辺から混入したものであると思われる。この他、弥生時代後期以降の高坏が出土しており、遺構の埋没時期は当該期以降と考えられる。

SD5004 (図 27・写真 6-28～29) 5-A 地点南西端で検出した幅 1.00m 以上、深さ 0.28m の溝である。溝両端が撓乱に削平されているため、狭い範囲での確認となったが、埋土の状況から周溝の可能性はある。遺物は出土していない。

SD5013 (図28・写真6-26～27) 5-B地点西部で検出した幅0.99m、深さ0.26mの溝である。20.12mに渡り北西～南東方向に調査区を跨ぐ溝で、当初、SK5012と重複して検出したが、出土遺物の多くが相互に接合することと、土層断面の状況から、SK5012はSD5013の埋土の一部と推定できる。遺物は土器類97点が出土した。これらは13世紀中葉に比定できる山茶碗、常滑焼を主体とする。

SD5097 (図29・写真8-33～34) 5-B地点東端で検出した幅4.04m、深さ0.86mの溝である。調査区を南北に横断する溝で、南に向けて傾斜する。埋土上層に灰白色砂、下層に黒褐色砂が堆積することが特徴的である。規模の大きい溝であるが、遺物は一切出土しておらず、帰属時期は不明である。

SB5121 (図30・写真9-35) 5-B地点東部で検出した柱列で、その並びから梁間2間、桁行3間の掘立柱建物であると考えられる。SP5076、SP5081、SP5083、SP5084、SP5086、SP5087、SP5092で構成される。SP5083、SP5084、SP5087、SP5092からは、常滑焼、瀬戸美濃産陶器の小破片が出土しており、築造年代は中世以降と思われる。

SX5110 (図30・写真6-30～7-32) 5-B地点東端で検出した長軸6.82m以上、深さ0.72mの遺構で、本調査区内で確認できたのは西肩部のみであり、大型の土坑もしくは溝と推定する。調査区南・北壁の下方で東側の立ち上がりが確認できる。下層から山茶碗、常滑焼など中世の土器片が出土していることから、この遺構は中世以降に埋没したものと考えられる。SX5110を挟む東西で地山の堆積に相違があり、東側に関してはSX5110の埋土の一部もしくは別遺構の埋土である可能性が残る。また、弥生土器が西肩斜面から出土しており、SX5110に削平された当該期の遺構が存在した可能性がある。

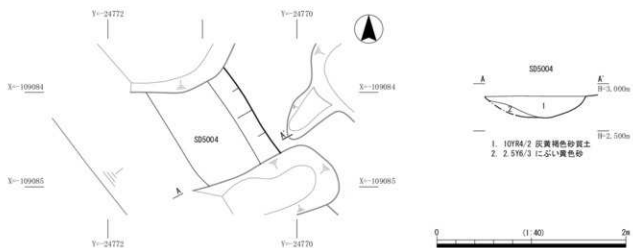


図27 SD5004平面図・断面図

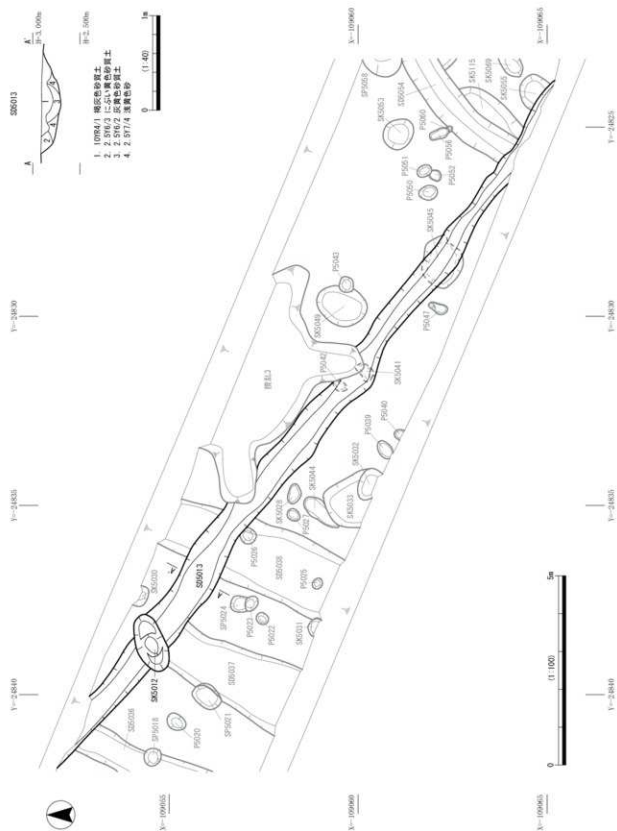
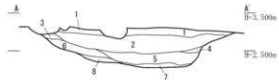
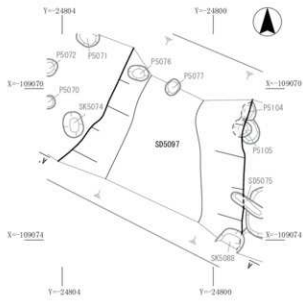


图 28 SD5013 平面图・断面图



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質土 | 5. 5Y4/1 灰色砂質土 |
| 2. 5Y6/1 灰白色砂 | 6. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 |
| 3. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂 | 7. 7. 5YR6/1 褐色砂 |
| 4. 2. 5Y6/3 にぶい黄色砂 | 8. 7. 5YR6/2 灰褐色砂 |



図 29 SD5097 平面図・断面図

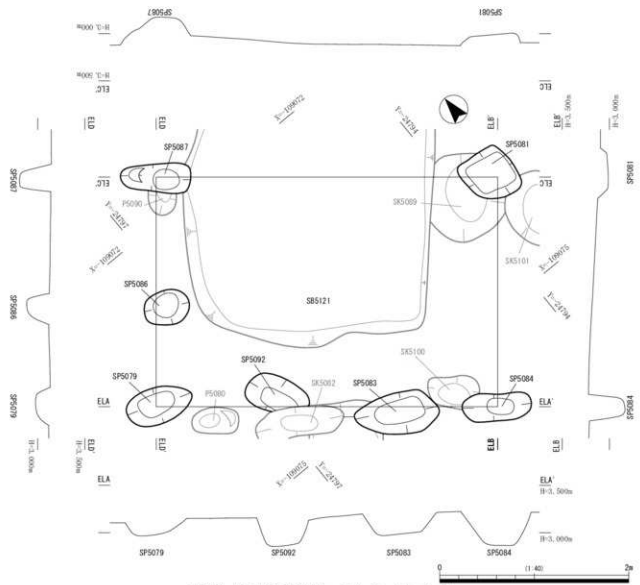


図 30 SB5121 平面図・エレベーション図

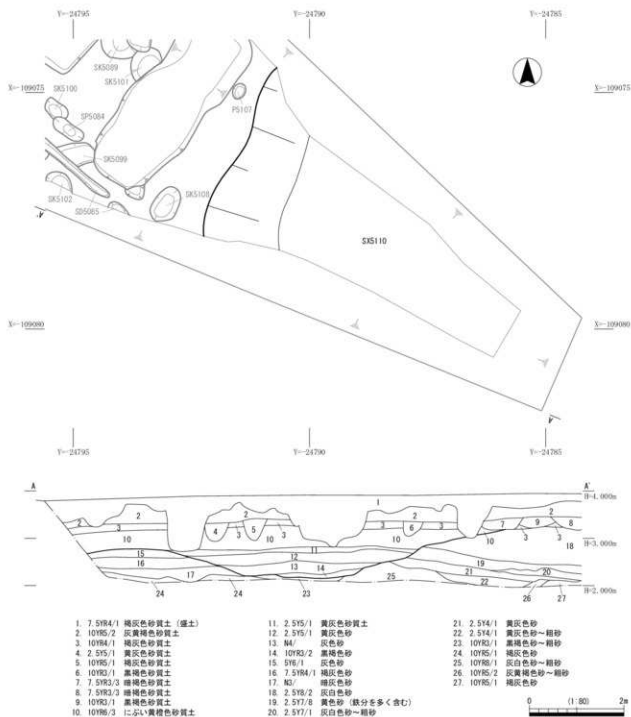


図 31 SX5110 平面図・断面図

III 出土遺物

5地点では土器類、土製品などが破片総数で971点出土した。この内、遺構から出土した遺物は307点である。ここでは主要遺構として取り上げた遺構の内、出土量の多いSZ5054、SD5013、SX5110を遺構出土の遺物としてまとめ、それ以外の遺構は包含層など一括して以下に記述する。

i SZ5054 出土遺物

弥生土器(図32-45～48・写真28) 弥生土器が16点出土している。いずれも小片であり、風化により調整の不明瞭なものもあり、器種の特定し得ないものが多い。45～47は器種不明の体部片

である。45は外面の調整に縄目とミガキを用い、これらを沈線で区画したものである。弥生時代中期の櫛描文系壺と推定する。46・47は外面の調整に条痕文を用いたもので、条痕文系土器の体部である。弥生時代前期～中期と推定する。48は坏底部を平らに整形した高坏である。弥生時代後期～終末期のものであろう。

ii SD5013 出土遺物

山茶碗 (図 33-49～57・写真 28～29) 山茶碗はSD5013から出土した遺物の中で最も破片点数が多く、46点が出土した。底部から口縁部まで復元できるものは少数だが、確認できるものは藤澤編年の6～7型式に属する。49～52は山茶碗の碗である。いずれも尾張型山茶碗で、体部は底部との境界から直線的に立ち上がり、底部に貼付高台を持つ。53～55は尾張型山茶碗の皿である。56・57は山茶碗の鉢である。出土した鉢の中で注口部の確認できるものは無く、片口鉢であるかは特定できない。体部は碗と同様に直線的に立ち上がる。

常滑焼 (図 33-58・写真 29) 常滑焼は山茶碗に次いで出土点数が多く、甕の破片を主体とし41点を数える。58は甕の口縁部である。端部を折り曲げて帯状に整形している。口縁部の形状から、中野編年 6a 型式に比定できる。



図 32 SZ5054 出土遺物

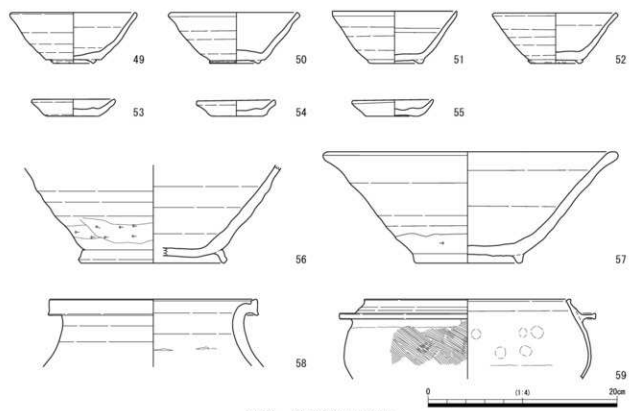


図 33 SD5013 出土遺物

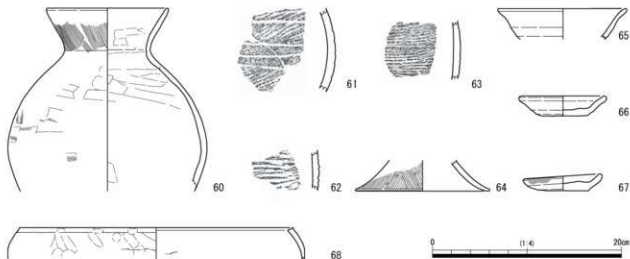


図 34 SX5110 出土遺物

土師質土器（図 33-59・写真 29） 土師質土器が 5 点出土している。60 は羽釜である。体部から口縁部にかけて内湾し、水平方向に突出する鋳を持つ。体部外面をハケ調整、鋳部へ口縁部をナデ調整で仕上げる。13 世紀末～14 世紀前葉に比定できる。

iii SX5110 出土遺物

弥生土器（図 34-60～63・写真 30） 弥生土器が破片点数で 58 点出土している。ただし、この内 52 点は一ヶ所にまとめて出土し、1 個体に接合できたため、個体数は 7 点である。60 は壺である。球形の胴部を持ち、頸部へ口縁部は直線的に開く。外面はハケ調整、内面は板状工具によるナデ調整で仕上げる。弥生時代終末～古墳時代前期に属すると思われる。61～63 は条痕文系土器の体部片である。破片のため詳細は不明だが、61 は条痕施文後に沈線の装飾がみられることと湾曲する形状から壺の体部と推定する。

土師器（図 34-64・写真 30） 土師器は高坏脚部の破片が 1 点出土している。脚部下方のみ残存しており、端部は緩やかに外反し、外面をヘラミガキ調整により仕上げる。古墳時代初頭～前葉に比定する。

山茶碗（図 34-65～67・写真 30～31） 山茶碗が 16 点出土している。その多くが小破片で、図化しえたものは 3 点のみであった。確認できるもので概ね 7 型式に比定する。65 は碗、66・67 は皿で、いずれも尾張型山茶碗である。

土師質土器（図 34-68・写真 30） 土師質土器は 1 点のみ出土している。残存部は口縁の一部のみだが、内傾し、端面を持つ形状から 16 世紀の内耳鍋と推定する。

iv 5 地点出土その他の遺物

弥生土器（図 35-69・写真 31） 69 は高坏の脚部である。坏部と脚部下方が欠損している。外面が風化しているが、一部に板状工具によるナデ調整の痕跡を認める。

須恵器（図 35-70・写真 31） 須恵器は 5 点出土しており、この内図化できたものは 1 点のみである。70 は坏身の底部である。底部中央がやや窪み、断面方形の高台を持つ。内外面ともに丁寧な回転ナデにより調整される。7 世紀後半に比定する。

山茶碗（図 35-71～73・写真 31） 山茶碗は本調査地内で最も多く出土しており、総破片数で 278 点を数える。これらは概ね 6～7 型式に属する。71・72 は碗、73 は皿である。

土師質土器 (図 35-74 ~ 76・写真 32) 土師質土器は総破片数で 196 点出土している。鍋、釜等の小破片を主体とし、その中に少量の土師皿が混じる。74 は土師皿、75 は内耳鍋、76 は釜である。75 は尾張内耳鍋 B2 類に比定できる。76 は鏝の有無は不明だが、同様の時期に属すると思われる。

常滑焼 (図 35-77 ~ 79・写真 32) 常滑焼は総破片数で 239 点出土しており、甕の破片が大半を占める。時期を比定できる資料も 13 世紀中葉 ~ 17 世紀と幅広く出土している。77 は甕、78・79 は赤物の「くど」である。

陶錘 (図 35-80 ~ 81・写真 32) 陶錘が 2 点のみ出土している。80 は無軸、81 は全体に鉄軸が施される。どちらも中程で器壁が肥厚する。

砥石 (図 35-82・写真 32) 砥石が 1 点のみ出土している。上面に幅 8mm の 2 条の溝があり、釘等の棒状製品の研磨に使用されていたと考えられる。

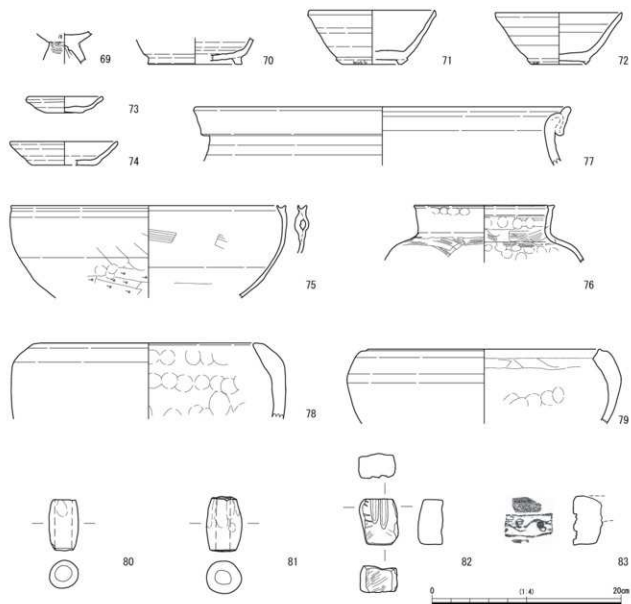


図 35 5 地点出土その他の遺物

第4節 6地点の調査

I 概要と基本層序

6地点は畑間遺跡の南西部に所在する。5地点の南西側、7地点の北東側に位置し、7地点とは旧道を挟んで近接する。区画整理により新設される道路の丁字路部分にあたり、調査区形状はL字を呈する。遺構は主に弥生時代中期の堅穴建物や弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓、中世期の土坑墓と考えられる遺構を検出した。

調査区の基本層序は、東部と西部で表土直下の層が異なるが、表土、中世以後の遺構ベース土、地山は調査区全域で概ね一定している。

- 1: 表土 (褐灰色砂質土)
- 2: 耕土または堆積土 (暗褐色砂質土)
- 3: 耕土または堆積土 (灰黄褐色砂質土)
- 4: 中世以後の遺構のベース土 (にぶい黄色砂質土)
- 5: 地山 (明黄褐色砂～粗砂)

1は現地表面であり、宅地や耕作地などに起因する盛土と考えられる。

2は耕土または堆積土と考えられる層位である。調査区東部にのみ認められる。近世以降の遺物を包含する。

3も2と同様に耕土または堆積土と考えられる。調査区西部にのみ認められる。近世以降の遺物を包含する。

4は中世以後の遺構のベース土である。場所により若干異なるが、調査区全域で概ね一致する。人力掘削はこの上面から開始し、包含層としてグリッドごと一括し、遺物の取り上げを行った。山茶碗等中世の土器小片が出土しており、中世期に堆積したものと考えられる。また、条痕文系土器等の弥生時代前期～中期に属すると思われる土器小片がこの層から出土している。

5は遺物を包含しないいわゆる地山である。砂堆の堆積層であり、色調が場所により若干異なるが、概ね調査区全体で一致する。本調査区の遺構は例外もあるが、基本的にこの層位の上面で行った。

II 検出遺構

6地点では堅穴建物、方形周溝墓、溝、土坑、柱穴などを検出している。遺構検出時、5地点と同様に中世の遺構面と遺構埋土との差を捉えることが難しく、これらの遺構は地山直上で検出した。また、調査区西部は中軸部分が近世以降の溝に広く削平されており、S26125は平面積の約3分の2がこの影響を受け、上層部分が削平されていた。以下、主要な遺構について報告する。

SB6107 (図39・写真10-37～40) 調査区南西端で検出した長軸3.24m以上、短軸1.29m、深さ0.26mの堅穴建物である。大部分が調査区の外に出るが、平面形状は北東～南西方向の隅丸方形を呈すると思われる。北端をSD6095に削平される。底面でSP6123を検出しており、支柱穴と考えられる。この他の支柱穴は掘乱れによって削平されているか、調査区の外に位置するため、配置を確認できず

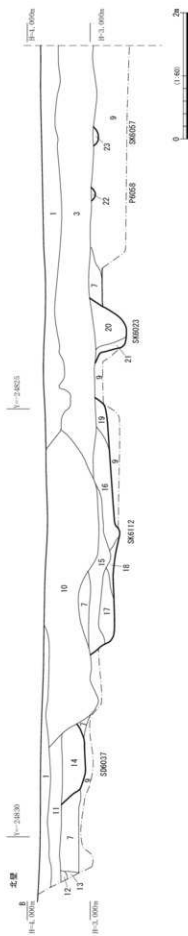
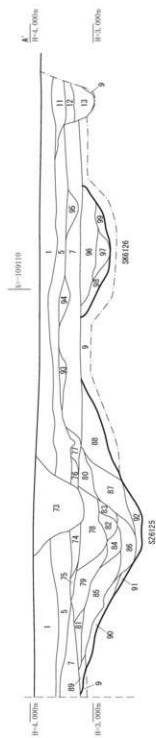
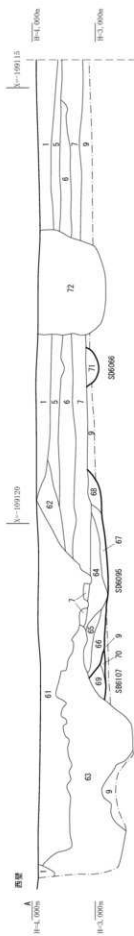


图 37 6地点西壁·北壁土层断面图

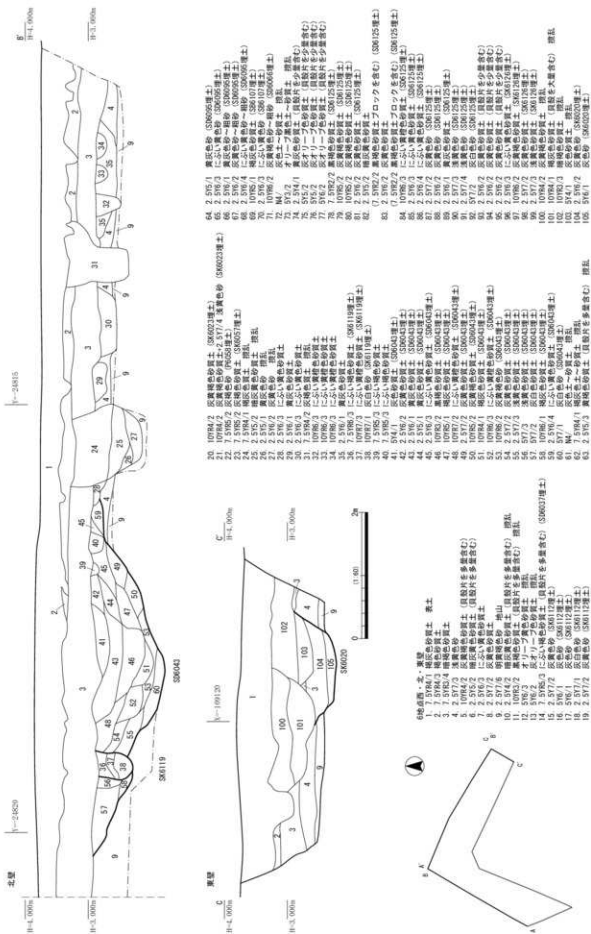


図 38 6 地点北壁・東壁土層断面図

推定の域を出ない。埋土から、弥生時代中期中葉の細頸壺が出土している。7地点において同時期の竪穴建物が確認されており、同じ集落に属する竪穴建物であると考えられる。

SZ6125 (図40・写真10-41～11-43) 調査区北西部で検出した中軸延長5.75m以上、幅3.42m、深さ0.82mの方形周溝墓の周溝である。平面形状は調査区西壁から東へ延び、北へ向いて弧を描く。半ばから北端にかけて上部を後世の溝や土坑に削平されており、北端から先の有無は不明である。調査区西壁付近の上層埋土から、赤彩の施されたパレススタイル壺の破片(巻頭写真3上2列)が出土している。この溝の埋没時期は弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる。

SD6043 (図41・写真11-44～46) 調査区東部で検出した幅4.71m、深さ0.85mの溝である。北東-南西方向の溝で、両端は調査区外に延びる。土層観察と遺物の出土傾向から、弥生時代中期に一旦埋没し、後に掘り直しを行ったと思われる。上層出土の遺物から、最終埋没時期は古墳時代初頭に降と推定する。

SD6095 (図42・写真11-47～12-50) 調査区南西部で検出した幅0.28m以上、深さ0.17m以上の溝である。調査区端に位置するため、確認できた部分のごくわずかだが、弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定できる壺破片が出土しており、周辺の方形周溝墓と同時期に属するため、SD6095は周溝の一部である可能性がある。

SK6006 (図43・写真12-51～53) 調査区東部で検出した長軸0.96m、短軸0.91m、深さ0.46mの土坑である。平面形状は楕円形を呈する。土坑の底面付近から磨製石斧が1点出土した。土器類は出土していない。

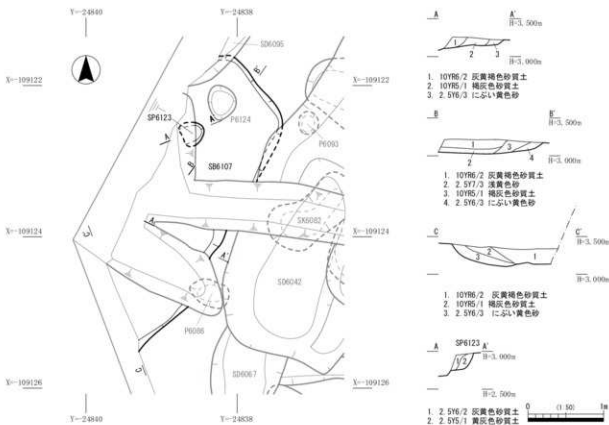
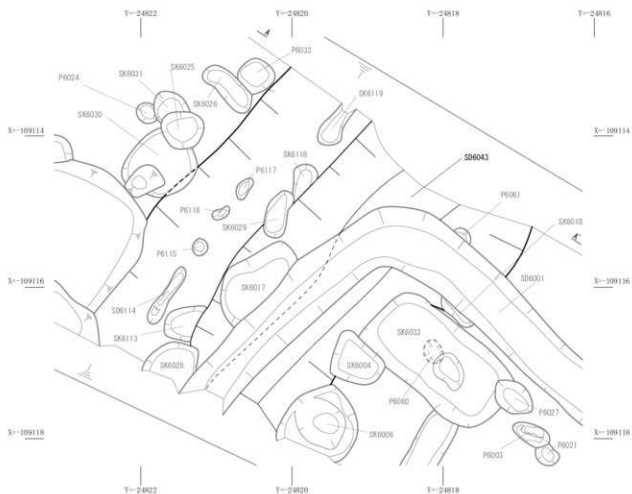


図39 SB6107平面図・断面図



1. 7.5YR6/3 にふい褐色砂質土 (SK6119埋土)
2. 10YR7/3 にふい黄褐色砂質土 (SK6119埋土)
3. 10YR7/1 灰白色砂 (SK6119埋土)
4. 7.5YR5/3 にふい褐色砂質土
5. 7.5YR5/3 にふい褐色砂質土
6. 2.5YR6/3 にふい黄色砂質土
7. 5Y4/1 灰赤砂質土
8. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
9. 2.5Y6/1 黄灰色砂質土
10. 2.5Y5/1 黄灰色砂質土
11. 2.5Y6/3 にふい黄色砂質土
12. 10YR3/2 黒褐色砂質土
13. 10YR5/1 褐色砂質土
14. 10YR7/2 にふい黄褐色砂質土
15. 2.5Y7/2 灰黄色砂質土
16. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
17. 10YR4/1 褐色砂質土
18. 10YR5/3 にふい黄褐色砂質土
19. 10YR6/2 灰黄褐色砂質土
20. 2.5Y7/2 灰黄色砂質土
21. 2.5Y7/3 黄灰色砂質土
22. 5Y7/3 黄灰色砂質土
23. 5Y7/2 灰白色砂質土
24. 10YR6/1 褐色砂質土
25. 2.5Y6/4 にふい黄色砂質土
26. 5Y7/1 灰白色砂

図 41 SD6043 平面図・断面図

SK6032 (図 43・写真 12-54～57) 調査区東部で検出した長軸 2.02m、短軸 1.02m、深さ 0.42m の土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈し、底部中央がわずかに窪む。その形状から土坑墓の可能性を疑うも、副葬品と考えられる遺物は出土しておらず、確認に乏しい。出土した遺物は山茶碗、土師質鍋等を主体に 12 点出土しており、全て小破片ではあるが概ね 13 世紀中葉～14 世紀前葉の様相を呈する。

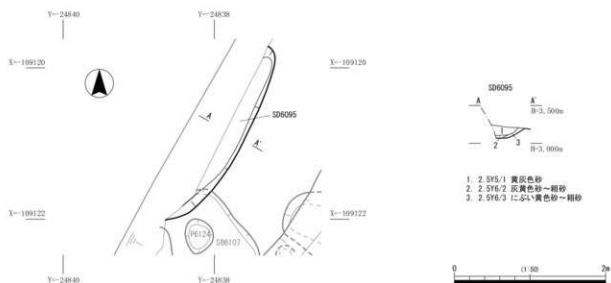


图 42 SD6095 平面图・断面图

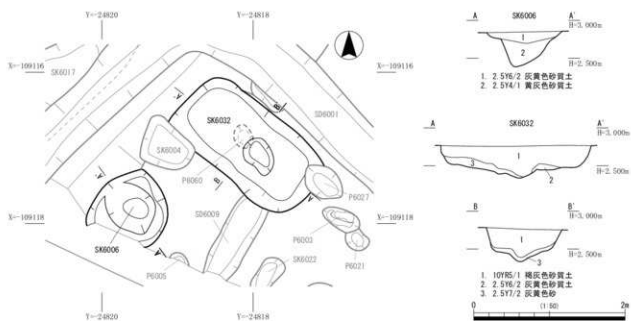


图 43 SK6006・SK6032 平面图・断面图

III 出土遺物

6地点では土器類、石器、古銭などが破片総数で664点出土した。そのなかでも弥生土器の出土量が最も多く、破片総数で326点を数え、全体のおよそ半数を占める。ただし、その多くが小破片であり、多地点に比べ、図化しえるものは少ない。

ここでは主要遺構として取り上げたSB6107、SZ6125、SD6043、SD6095の出土遺物を個別にまとめ、それ以外の遺構は包含層などと一括して以下に記述する。

i SB6107 出土遺物

弥生土器（図44-84～85・写真33） 弥生土器が破片数で16点出土している。その多くが小破片で、風化により調整が不明瞭なものもあり、器種を特定し得ないものが多い。84・85は細頸壺である。84は頸部の破片で、最細部に6条の沈線を廻らす。85は口縁部で、端部は受口状をなし、外面に櫛描波状文を廻らせた後、端部付近に竹管文を飾る。貝田町式期に比定できる。

ii SZ6125 出土遺物

弥生土器（巻頭写真2） 弥生土器が破片数で17点出土している。特筆すべき点として、赤彩の施されたパレススタイル壺の出土が挙げられる。体部の一部分のみではあるが、外面に波線文と列点文が廻り、列点文を境に下方を赤彩で染め上げ、また、波線文をなぞるように赤彩を施す技法が確認できる。方形周溝墓に伴う供献土器であると思われる。

iii SD6043 出土遺物

弥生土器（図44-87～89・写真33） 弥生土器が破片数で58点出土している。SD6043は上層、下層に分けて掘削しており、それぞれ時期差が認められる。87・88は下層から出土した。87は細頸壺である。先の84に近似しており、最細部に5条の沈線を廻らす。88は条痕文系深鉢である。外面に条痕文、端部内面に刻み目を飾る。弥生時代中期前葉～中葉に属すると思われる。89は小型の壺である。球状の体部を持ち、頸部はくの字に折れて口縁部は外反する。体部外面は丁寧なヘラミガキにより調整される。廻間I式期に比定できる。

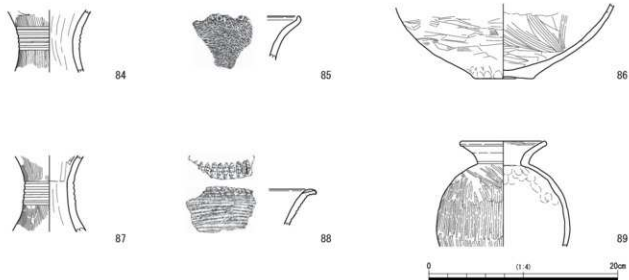


図44 SB6107・SD6043・SD6095 出土遺物

iv SD6095 出土遺物

弥生土器 (図 44-86・写真 33) 弥生土器が破片点数で 17 点出土している。これらは 1 か所に集積して出土した土器であり、この内 14 点が 1 個体に接合したものが 86 である。壺の下方部で、底部と体部の境界から外側に大きく開き、体部は球形をなすと想定される。弥生時代終末期～古墳時代初頭に属すると思われる。

v 6 地点出土その他の遺物

弥生土器 (図 45-90～93・写真 34) 90～92 は甕である。内外面の調整にハケを用い、口縁端部に刻み目を飾る。全て口縁部付近の破片であり下方の形状は不明だが、胴部最大径が口縁部径を上回ることではないものと推定する。93 は甕もしくは深鉢である。体部は垂直に下り、外反する口縁部を持つ。内外面にハケで調整し、口縁端部に押圧文が廻る。弥生時代中期中葉～後葉に属すると思われる。

山茶碗 (図 45-94～96・写真 33) 山茶碗は 6 地点全体で破片点数 91 点出土しており、他の調査区に比べ 4 地点に次いで出土量が少ない傾向を示す。時期を比定できるもので 6～8 型式のものを認める。94・95 は尾張型山茶碗の碗、96 は北部系山茶碗の皿である。

石斧 (図 45-97・写真 34) 97 は SK6006 出土の磨製石斧である。ハイアロクラストイト製で、敲打により基部を作出する。刃部は欠損している。

古銭 (図 45-98～100・写真 34) 古銭が 3 点出土している。98 は洪武通寶 (明・1368 年初鑄)、99 は景德元寶 (北宋・1004 年初鑄)、100 は開元通寶 (南唐・960 年初鑄) である。

上記の他、常滑焼、土師質土器等が出土している。これらは小破片であるため、掲載は省略するが、時期を特定できる資料は 13 世紀～17 世紀に属する。

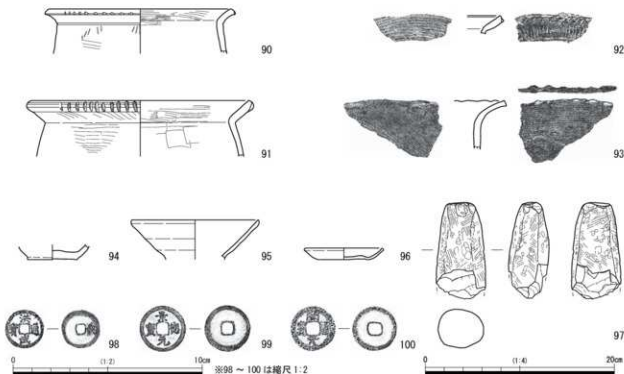


図 45 6 地点出土その他の遺物

HM 15 6
6 地点

第5節 7地点の調査

I 概要と基本層序

7地点は畑間遺跡の南西端に所在し、過去の調査を含め最も南西に位置する。区画整理により新設される道路の交差点部分にあたり、調査区形状はL字を呈する。調査面積は1,229㎡あり、今年度の調査区の中で最も広い調査地である。本調査地から東へ約200m地点の過去の調査（平成21年度東畑遺跡3・4地点）では、弥生時代中期～古墳時代前期の堅穴建物や中世の井戸等が確認されており、本調査地においても当該期の居住域やその関連遺構等の発見が期待されると共に、それらの範囲確認という点においても重要な場所の調査であった。

今回の調査では主に弥生時代中期の堅穴建物、古墳時代初頭の方形周溝墓、中世の区画溝等の遺構を検出した。当該期の居住域や墓域が少なくとも本調査地までおよび、さらに南、西へ広がる可能性を示す。

調査区の基本層序は、近世以後の削平により調査区全域で一定しない部分もあるが、概ね以下の5層に大別できる。

- 1：表土（灰色土）
- 2：耕土または堆積土（灰黄色砂質土）
- 3：耕土または堆積土（暗褐色砂質土）
- 4：中世以後の遺構ベース土（灰黄褐色砂）
- 5：地山（明黄褐色砂）

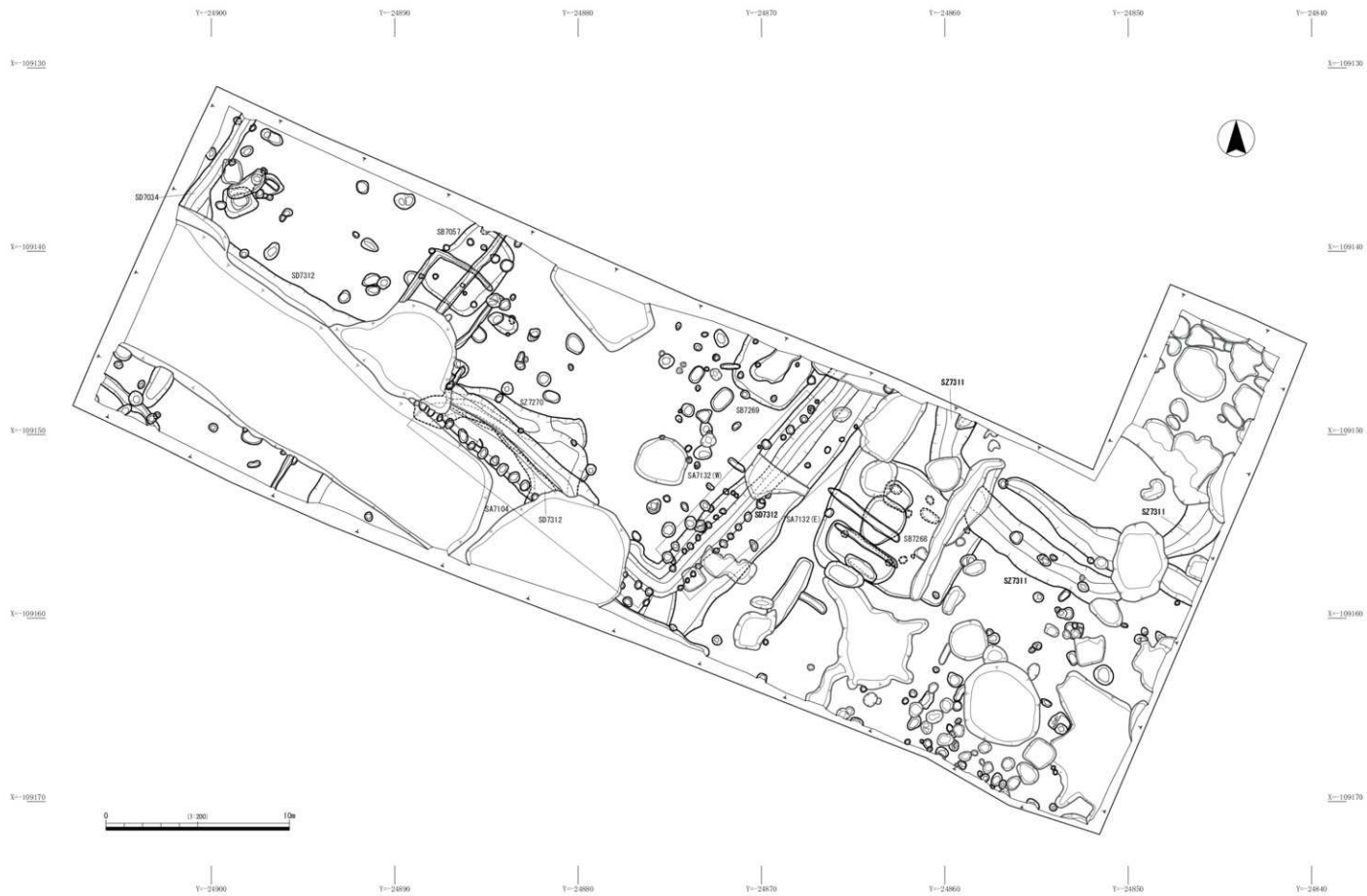
1は現地表面であり、宅地や耕作地などに起因する盛土と考えられる。

2は耕土または堆積土と考えられる層位である。調査区西部にのみ認められる。近世以降の遺物を包含する。

3も2と同様に耕土または堆積土と考えられる。場所により若干の違いはあるが、調査区全域で概ね一致する。近世以降の遺物を包含する。

4は中世以後の遺構のベース土である。人力掘削はこの上面から開始し、包含層としてグリッドごと一括し、遺物の取り上げを行った。調査区南西端では確認できなかったが、この一部を除き、調査区全域で概ね一致する。山茶碗を主体とする中世の土器小片が出土しており、中世中期に堆積したものと考えられる。また、条痕文系土器等の弥生時代前期～中期に属すると思われる土器小片がこの層から出土している。

5は遺物を包含しないいわゆる地山である。砂堆の堆積層であり、色調が場所により異なるが、概ね調査区全体で一致する。本調査区の遺構は例外もあるが、基本的にこの層位の上面で行った。



7地点
 (目録
 7)

图 46 7地点遺構平面図

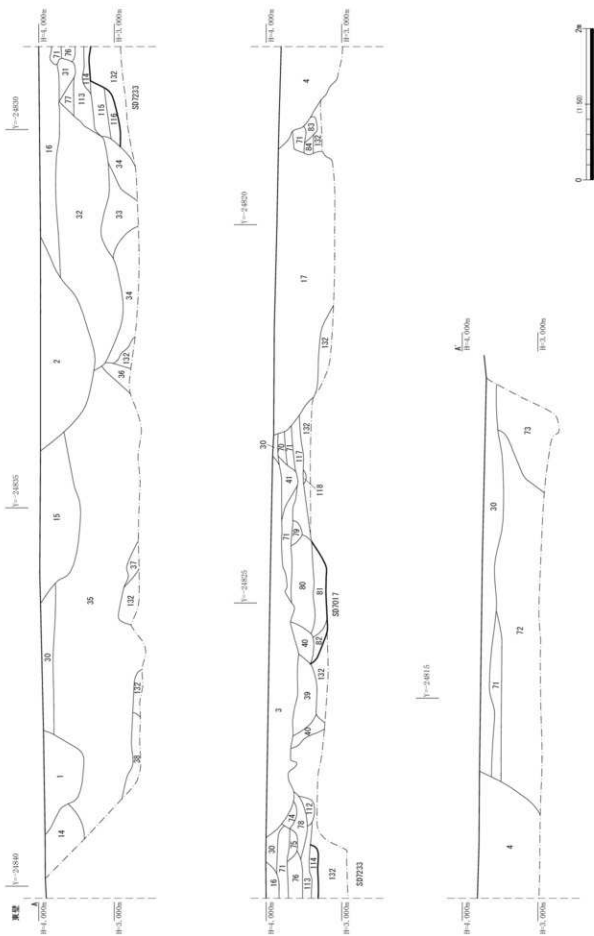


图 47 地点 A 土壤断面图

HM
15·7
7 地点

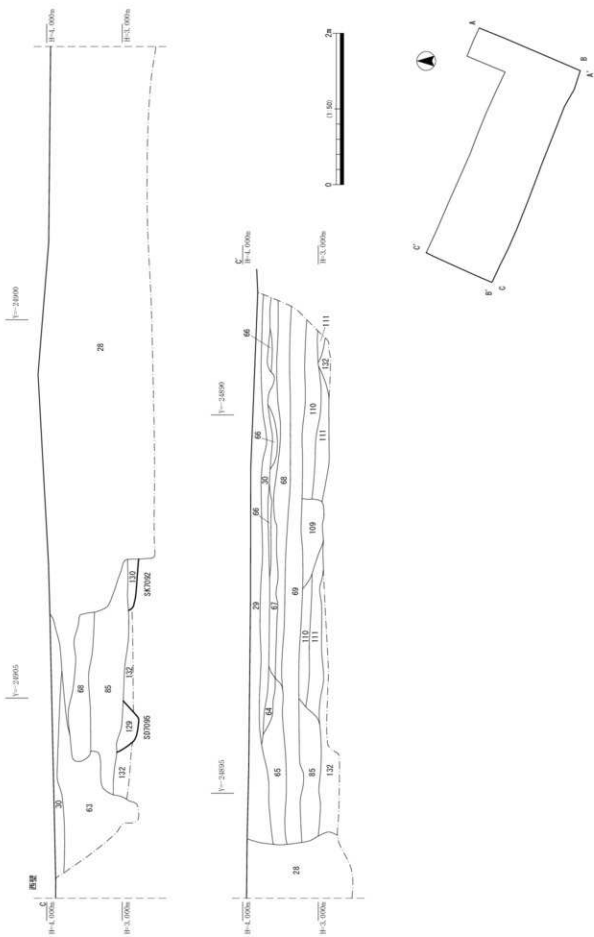


图 48 7 地点西壁土層断面图

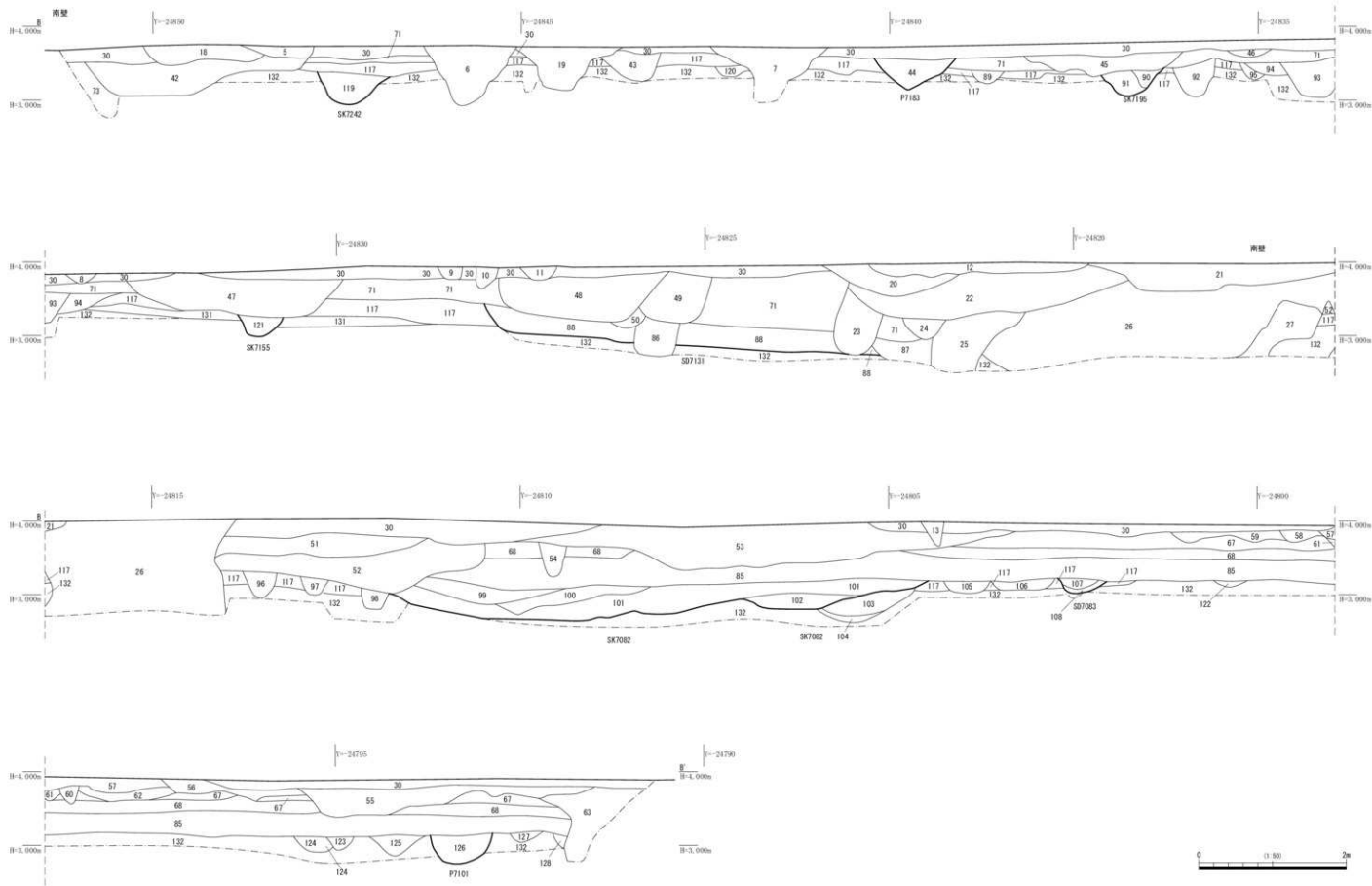


图 49 7 地点南壁土层断面图

1. 535/2 オートリープ色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 2. 536/3 オートリープ色砂質土、33/2 オートリープ黒色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 3. 535/3 オートリープ色砂質土
 4. 535/1 オートリープ色砂質土、32/53/2 黒炭黒色砂質土、プロックを含む) 埋込
 5. 532/1 オートリープ黒色砂質土 (2.535/2 黒炭黒色砂質土、プロックを含む) 埋込
 6. 532/1 オートリープ黒色砂質土 (2.535/2 黒炭黒色砂質土、プロックを含む) 埋込
 7. 534/1 灰砂質土 埋込
 8. 535/2 オートリープ色砂質土 (頁数を含む) 埋込
 9. 535/2 オートリープ色砂質土 (頁数を含む) 埋込
 10. 535/2 オートリープ色砂質土 (埋込を含む) 埋込
 11. 535/1 灰砂質土 埋込
 12. 535/1 灰砂質土 埋込
 13. 532/3 灰砂質土 埋込
 14. 532/3 灰砂質土 埋込
 15. 534/2 オートリープ色砂質土 (頁数を含む) 埋込
 16. 536/2 オートリープ色砂質土 埋込
 17. 535/2 オートリープ色砂質土、2.94/1 黄炭色砂質土 埋込
 18. 532/2 オートリープ色砂質土、32/53/2 黒炭黒色砂質土、プロックを含む) 埋込
 20. 535/2 オートリープ色砂質土 埋込
 21. 535/1 灰砂質土 埋込
 22. 2.536/3 に近い黒色砂質土 埋込
 23. 2.536/4 に近い黒色砂質土 埋込
 24. 2.536/4 に近い黒色砂質土 埋込
 25. 34/1 黒炭色砂質土 埋込
 26. 34/1 黒炭色砂質土、57/3 濃褐色土、プロックを含む) 埋込
 27. 10764/1 灰質褐色砂 34/1 褐色土、プロックを含む) 埋込
 28. 535/3 オートリープ黒色砂質土 埋込
 29. 535/3 オートリープ黒色砂質土 埋込
 30. 534/1 灰色土 埋込
 31. 2.534/1 黄炭色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 32. 2.534/1 黄炭色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 33. 2.534/1 黄炭色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 34. 2.532/2 黄炭色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 35. 2.534/1 黄炭色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 36. 2.535/3 黄炭色砂質土 埋込
 37. 2.535/3 黄炭色砂質土 (頁数を含む) 埋込
 38. 532/1 オートリープ黒色砂質土 埋込
 40. 2.534/3 オートリープ黒色砂質土
 41. 535/1 灰砂質土 埋込
 42. 535/1 灰砂質土 埋込
 43. 535/1 灰砂質土 埋込
 44. 2.535/1 黄炭色砂質土 (2.535/2 黒炭黒色砂質土、プロックを含む) 埋込
 45. 2.535/1 黄炭色砂質土
 46. 2.535/1 黄炭色砂質土
 47. 10765/2 黄炭色砂質土 埋込
 48. 2.536/3 に近い黄炭色砂質土 埋込
 49. 2.536/3 に近い黄炭色砂質土 埋込
 50. 10766/2 灰質褐色砂
 51. 2.536/1 黄炭色砂質土
 52. 536/2 オートリープ色砂 (2-3mmの石を含む) 埋込
 53. 536/2 オートリープ色砂質土 埋込
 54. 536/1 灰砂質土 埋込
 55. 535/1 灰砂質土 埋込
 56. 535/1 灰砂質土 埋込
 57. 2.535/3 黄炭色砂質土 埋込
 58. 34/1 灰砂質土 埋込
 59. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 61. 54/2 灰砂質土 埋込
 62. 54/2 オートリープ色砂質土 埋込
 63. 532/2 オートリープ色砂質土 (2-3mmの石を含む) 埋込
 65. 535/3 灰砂質土 埋込
 66. 534/3 黄オートリープ色砂質土 埋込
 67. 2.536/2 灰炭色砂質土 埋込
 68. 10764/1 黄炭色砂質土 埋込
 69. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 70. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 71. 10763/3 黄炭色砂質土 埋込
 72. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 73. 534/1 灰砂質土 埋込
 74. 535/2 黄炭色砂質土 埋込
 75. 10764/1 黄炭色砂質土 埋込
 76. 34/1 灰砂質土 埋込
 77. 10764/3 に近い黄炭色砂質土 埋込
 78. 10764/3 に近い黄炭色砂質土 埋込
 79. 535/3 灰砂質土 埋込
 80. 10764/1 黄炭色砂質土、50701/1埋込
 81. 2.535/2 黄炭色砂質土、50701/1埋込
 82. 2.537/4 濃褐色土、プロックを含む) 埋込
 83. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 84. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 85. 10762/3 黄炭色砂質土 埋込
 86. 10762/1 黄炭色砂質土 埋込
 87. 10762/1 黄炭色砂質土 埋込
 88. 30/64/2 灰砂質土、50711埋込
 89. 30/64/2 灰砂質土、50711埋込
 90. 2.536/2 灰炭色砂質土、58716埋込
 91. 10764/1 地炭色砂質土、58716埋込
 92. 10762/2 黒色砂質土 (頁数を多量含む) 埋込
 93. 2.534/1 黄炭色砂質土 埋込
 94. 2.534/1 黄炭色砂質土 埋込
 95. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 96. 10764/3 に近い黄炭色砂質土 埋込
 97. 10764/3 に近い黄炭色砂質土 埋込
 98. 10764/3 に近い黄炭色砂質土、58702埋込
 99. 10764/3 に近い黄炭色砂質土、58702埋込
 100. 10764/2 灰炭色砂質土、58702埋込
 101. 10764/1 地炭色砂質土、58702埋込
 102. 2.536/2 灰炭色砂質土、58702埋込
 103. 10765/3 に近い黄炭色砂質土 埋込
 104. 2.535/3 黄炭色砂質土 埋込
 105. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 106. 2.535/2 黄炭色砂質土 埋込
 107. 2.535/2 黄炭色砂質土、50706埋込
 108. 10764/2 灰炭色砂質土 埋込
 109. 10764/2 灰炭色砂質土 埋込
 110. 10765/2 灰炭色砂質土 埋込
 111. 10764/2 灰炭色砂質土 埋込
 112. 10764/1 地炭色砂質土 埋込
 113. 2.535/3 黄炭色砂質土 埋込
 114. 2.536/3 に近い黄炭色砂質土、50723埋込
 115. 2.536/1 灰炭色砂質土、50723埋込
 116. 10764/2 灰炭色砂質土、50723埋込
 117. 10764/2 灰炭色砂質土 埋込
 118. 10765/1 地炭色砂質土 埋込
 119. 10765/1 地炭色砂質土、58722埋込
 120. 2.536/2 灰炭色砂質土、58715埋込
 121. 2.536/2 灰炭色砂質土、58715埋込
 122. 2.536/2 灰炭色砂質土、58715埋込
 123. 2.534/1 黄炭色砂質土 埋込
 124. 2.534/2 黄炭色砂質土 埋込
 125. 2.534/2 黄炭色砂質土 埋込
 126. 2.534/1 黄炭色砂質土 埋込
 127. 2.534/1 黄炭色砂質土 埋込
 128. 2.536/2 灰炭色砂質土、50706埋込
 129. 2.536/2 灰炭色砂質土、50706埋込
 130. 2.537/3 黄炭色砂質土 埋込
 131. 2.537/3 黄炭色砂質土 埋込
 132. 2.537/6 明黄炭色砂質土 埋込

図 50 7 地点東・南・西壁土層注記

II 検出遺構

7地点では堅穴建物、方形周溝墓、溝、土坑、柱穴などを検出している。これらの遺構は他の地点と同様、ほぼ地山直上で検出した。ここでは主要な遺構として堅穴建物、方形周溝墓、区画溝について、以下に報告する。

i 堅穴建物

SB7057 (図 51・写真 14-60～15-65) 調査区西部北壁沿いで検出した長軸 4.69m、短軸 3.35m、深さ 0.40m の堅穴建物である。平面形状は北東—南西方向の隅丸長方形を呈する。底面は中央に向けてわずかに窪む皿状で、貼床および壁周溝を伴わないことが特徴である。底面で SP7302、SP7303、SP7306、SP7308 を検出しており、これらは SB7057 に伴う主柱穴と考えられる。出土遺物点数が本調査区内で最も多く、弥生時代中期中葉の土器を主体とする 1,428 点の遺物が出土した。ただし、破片の多くは原位置を保たず散乱して出土しており、底面直上に据え置かれたものは確認できなかった。

SB7268 (図 53・写真 15-66～16-72) 調査区東部で検出した長軸 8.18m、短軸 6.74m、深さ 0.13m の堅穴建物である。平面形状は北西—南東方向の隅丸長方形を呈し、SB7057 と同様に貼床および壁周溝を伴わない。主柱穴として SP7285、SP7287、SP7296、SP7299、SP7300 の 5 つが整然と並ぶが、北端部の主柱穴は後世の攪乱により消失しており、確認できなかった。周辺の堅穴建物と比べて規模が大きいため、建て替え等により 2 棟分の痕跡が長軸方向に重複している可能性も考えられる。また、SB7268 を削平する SK7277 と SK7286 の埋土は、SB7057 の上層や SB7269 中央部に堆積する黒褐色砂質土と近似しており、SB7268 の堆積の一部であると考えられる。遺物は弥生時代中期中葉の土器を主体とし、石鏃等も出土している。

SB7269 (図 54・写真 16-73～17-77) 調査区中央部北壁沿いで検出した長軸 4.03m、短軸 3.08m 以上、深さ 0.36m の堅穴建物である。北東辺が調査区外にあるが、平面形状は北西—南東方向の隅丸長方形を呈すると思われる。上述した SB7057、SB7268 と同様に貼床および壁周溝を伴わない。主柱穴に SP7289、SP7290、SP7291、SP7292 を持つ。掘削当初、SB7269 中央に位置する黒褐色砂質土を SK7279 として掘削したが、SB7057 の上層や、上述した SB7268 中央部の遺構埋土と近似しており、SB7269 の堆積の一部であると考えられる。また、出土遺物の多くは黒褐色砂質土内から出土したものである。これらは弥生時代中期の土器を主体とする。

ii 方形周溝墓

SZ7270 (図 55・写真 17-78～18-80) 調査区西部で検出した幅 2.02m、深さ 0.86m の溝で、方形周溝墓の周溝であると思われる。検出できたのは周溝の北西部のみであり、主体部及び周溝の南西側延長部分は後世の攪乱等に削平され消失している。残存部分も、南西側の上層を後述する中世の区画溝に削平される。平面精査及び土層観察から、周溝上層の中軸付近に黒褐色の埋土を持つことが確認できた。これは本年度調査の他の周溝と共通する特徴である。埋土上層から廻間Ⅱ式期初頭に比定できる壺が出土しており、周溝の埋没時期は古墳時代初頭以降と考えられる。

SZ7311 (図 56・写真 18-81～19-85) 調査区東部で検出した幅 2.18m、深さ 0.60m の溝で、方形周溝墓の周溝であると思われる。検出できたのは周溝の南西部のみであり、主体部及び周溝の北東側延長部分は、北側が調査区の外に当たり、東側が後世の攪乱に削平され消失しているため、全容

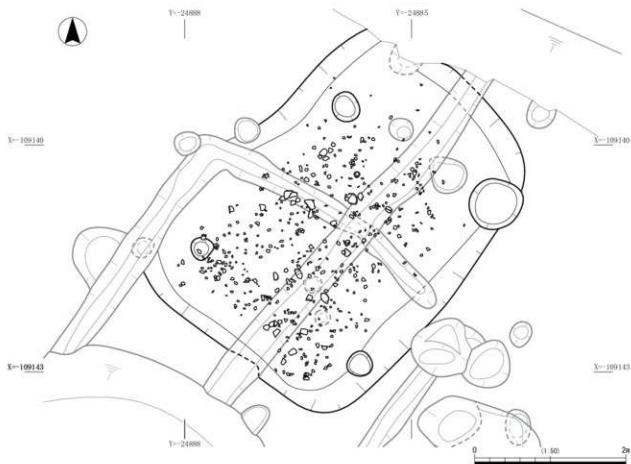


図 52 SB7057 遺物出土状況図

は把握できない。検出部分の平面形状は、概ね方形に廻る様相を呈する。墳丘の推定幅は約 11.8 m である。SZ7270 と同様に、周溝上層の中軸付近に黒褐色の埋土を持つ。埋土上層部より廻間Ⅱ式期初頭に比定できる壺や高坏が出土しており、特に壺の出土が目立つ。壺には口縁部や胴部の打ち欠きを確認できるものがあり、祭祀、儀礼に使用された供献土器である可能性が指摘できる。周溝の埋没時期は古墳時代初頭以降と考えられ、SZ7270 と同時期に機能していたものと推定する。

iii 区画溝

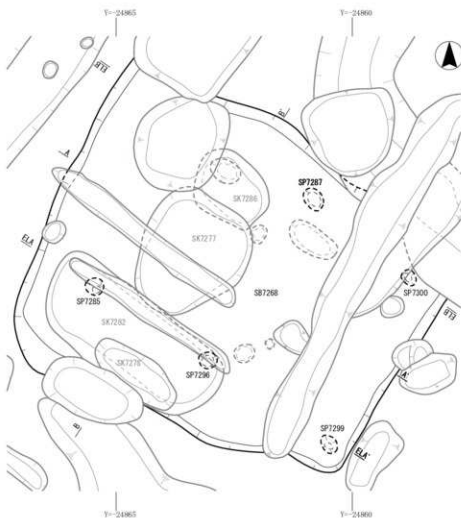
SD7034 (図 57・写真 19-86 ~ 87) 調査区西端～中央部で検出した幅 0.88m、深さ 0.31m の溝である。SD7312 の北西—南東方向に直行していることから、これに接すると思われる。出土遺物は 13 世紀代に比定できる山茶碗を主体とする。

SD7312 (図 57・写真 19-88 ~ 20-93) 調査区西端～中央部で検出した幅 4.71m、深さ 0.85m の溝である。平面形は L 字状を呈し、南を角にして北西、北東の調査区外へ延びる。溝の内側に小穴列が並ぶのが特徴で、幅広の溝の内側に重複し同軸方向の細い溝があり、その溝の肩部に小穴列が並ぶ。小穴列には北西—南東方向に SA7103、北東—南西方向に SA7123 を付した。SA7103 は内側の溝南肩部沿いに 1 列、SA7123 は内側の溝両肩部沿いに 2 列並ぶが、小穴ごとの間隔は一定でなく、整然としない。堆積状況から、当初幅広だった溝を掘り直し細い溝へと改変されたと推定できるが、小穴列は、溝肩を維持するための護岸杭のような機能が想定できる。出土遺物から 13 世紀以降に廃絶したものと考えられるが、掘り直し前後での明確な時期差は認められなかったため、短期間のうちに掘削と埋没を繰り返した可能性がある。

X=109150

X=109155

X=109160



X=109150

X=109155

X=109160

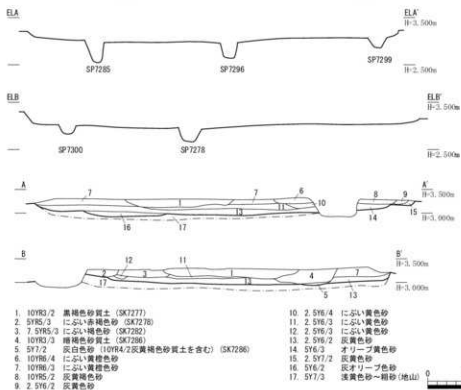
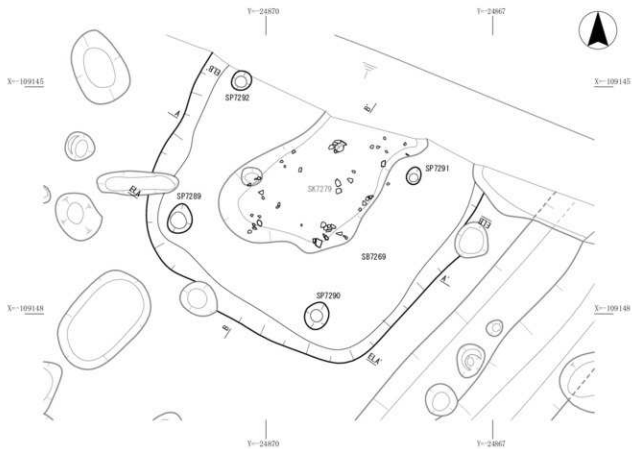
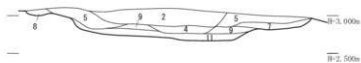


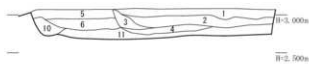
図 53 SB7268 平面図・断面図・エレベーション図



A A' B-3, 500m



B B' B-3, 500m



ELA ELA' B-3, 000m



ELB ELB' B-3, 000m



1. 109R3/1 黒褐色砂質土 (SK7279)
2. 109R3/2 黒褐色砂質土 (SK7279)
3. 109R4/1 暗灰色砂質土 (SK7279)
4. S17/2 灰白色砂質土
(109R2/2 黄褐色砂質土を意味) (SK7279)
5. 2. S16/3 灰白色砂質土 (SB7269)
6. 2. S16/2 灰黄色砂質土 (SB7269)
7. 2. S16/2 灰黄色砂質土 (SB7269)
8. 2. S17/2 灰黄色砂 (SB7269)
9. 2. S17/2 灰黄色砂質土 (SB7269)
10. 2. S17/3 透黄色砂質土 (SB7269)
11. S17/3 透黄色砂 (SB7269)



図 54 SB7269 平面図・断面図・エレベーション図

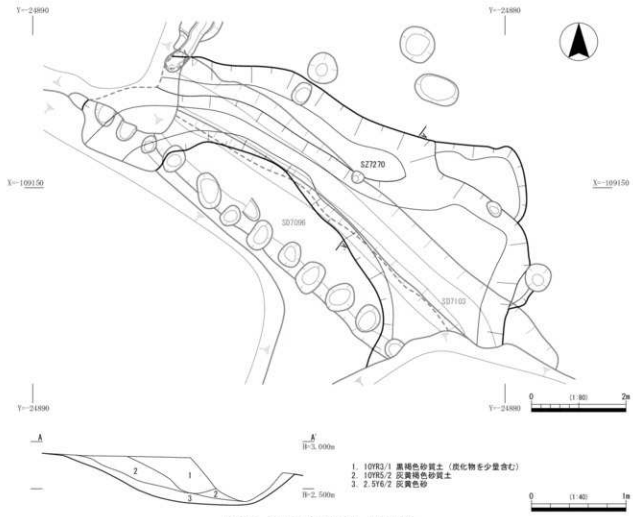


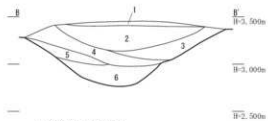
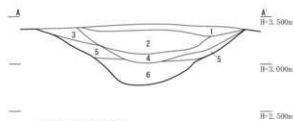
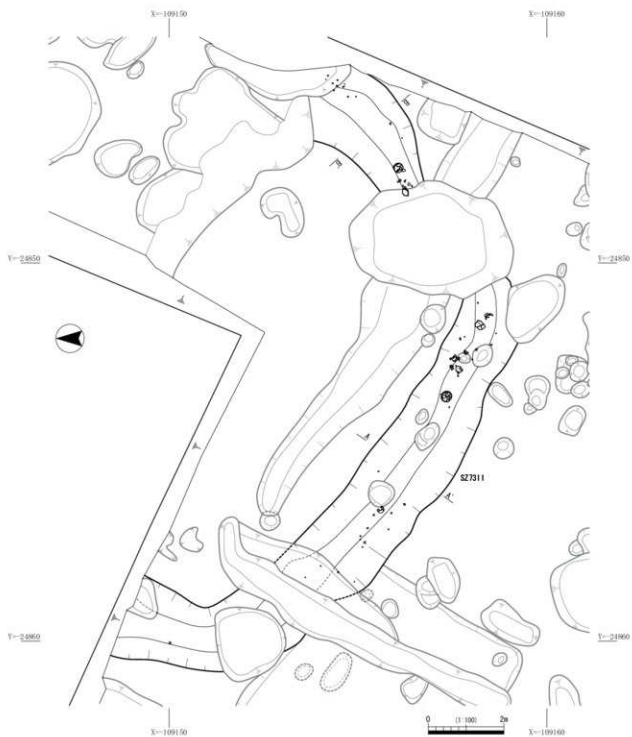
図 55 SZ7270 平面図・断面図

III 出土遺物

7 地点では破片総数で 8,546 点の遺物が出土した。ここでは主要遺構として取り上げた SB7057、SB7268、SB7269、SZ7270、SZ7311 の出土遺物を個別にまとめ、それ以外の遺構出土遺物は包含層出土遺物と一括して報告する。

i SB7057 出土遺物

弥生土器 (図 58-101 ~ 123・写真 35) SB7057 から破片数で 1,420 点の弥生土器が出土している。ただし、1 個体がまとまって出土したものはまれで、多くの破片が分散して出土した。弥生時代中期中葉に属するものが主であり、尾張及び三河の系統のものが混在する。101 ~ 106 は櫛描文系の壺である。101 ~ 103 は口縁部が受口状を呈し、外面に櫛描文を持つ細頸壺である。104 は突帯を持ち、上方に磨消線が廻る破片で、細頸壺の体部と思われる。貝田町式に類例を見る。106 は口縁内面に櫛描波状文、刺突文を付し、突起を持つ太頸壺である。107 ~ 112 は瓜郡式系の壺である。いずれも太頸壺の口縁部で、107 は受口状口縁、108 ~ 112 は単純口縁のものである。113 ~ 119 はハケ調整甕である。113 は口縁部に指による圧痕を持ち、114 ~ 117・119 は板状工具による刻み目を持つ。120・121 は条痕文系の深鉢である。外面を斜位の条痕で調整し、口縁部に二枚貝による刺突文を施す。122・123 は同種破片の出土が少数であり、周辺から混入したものである。122 は条痕文系壺の口縁部である。口縁外面に押圧突帯を持ち、口縁下方は横位の条痕により調整する。弥生時



1. 10YR3/1 黑褐色砂質土
2. 10YR2/2 黑褐色砂質土
3. 2.5Y5/2 暗灰黃色砂質土
4. 2.5Y4/2 暗灰黃色砂質土
5. 2.5Y6/2 灰黃色砂
6. 2.5Y5/1 黃灰色砂

1. 10YR3/1 黑褐色砂質土
2. 10YR2/2 黑褐色砂質土
3. 2.5Y5/2 暗灰黃色砂質土
4. 2.5Y4/2 暗灰黃色砂質土
5. 2.5Y6/2 灰黃色砂
6. 2.5Y5/1 黃灰色砂



图 56 SZ7311 平面图·断面图

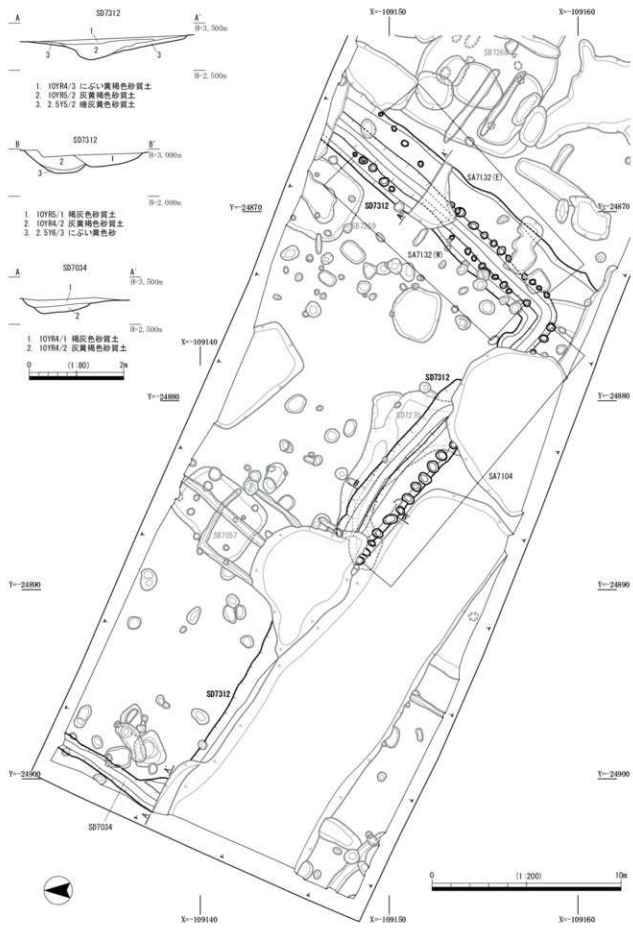


图 57 SD7034・SD7312 平面图・断面图

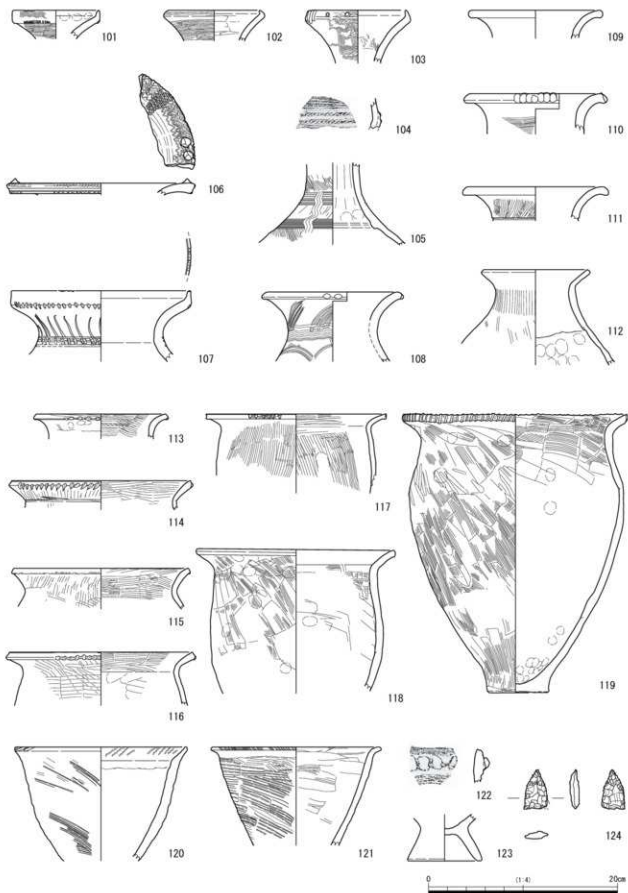


图 58 SB7057 出土遺物

代前期に属すると推定される。123 は台付甕の脚部である。弥生時代後期以降に属するとみられる。
石器 (図 58-124・写真 36) 124 は下呂石製の無茎石鏃である。SB7057 からはこの石鏃の他、チャート製の剥片が出土している。

ii SB7268 出土遺物

弥生土器 (図 59-125 ~ 131・写真 36 ~ 37) SB7268 からは破片数で 302 点の弥生土器が出土している。弥生時代中期中葉のものが主であり、尾張及び三河の系統のものが混在する。125 ~ 127 は楡描文系の壺である。125 は口縁内面に楡描波状文、端部に細かな圧痕を施文する太頸壺の口縁部である。126 は磨消線と横位のミガキを二重突帯で上下に区分する破片で、細頸壺の体部と思われる

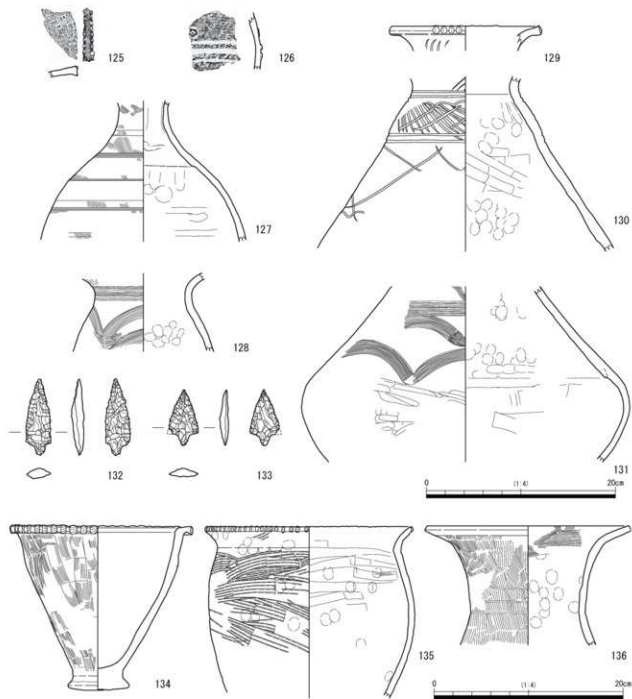


図 59 SB7268・SB7269 出土遺物

HM
15
7
地点

る。貝田町式に類例を見る。127は細頸壺の頸部～体部片である。斜位のハケ調整後、6条以上の直線文帯を飾る。128～131は瓜部式系の壺である。いずれも太頸壺で、128・131は外面にササラ状工具による波状文や直線文を、129・130は沈線による波状文や斜格子文、直線文を飾る。

石器 (図 59-132 ～ 133・写真 37) 132・133はチャート製の有茎石鏃である。SB7268からは2点出土した。

iii SB7269 出土遺物

弥生土器 (図 59-134 ～ 136・写真 38) SB7268からは破片数で199点の弥生土器が出土している。弥生時代中期中葉のものが主であり、尾張及び三河の系統のものが混在する。134はハケ調整の鉢である。口縁部は水平に屈曲し、端部に指による圧痕を飾る。135は外面を条痕により調整された甕である。口縁部は頸部から緩やかに開き、端部に指による圧痕を飾る。136はハケ調整の太頸壺である。口縁端部に面を持ち、頸部に3条の沈線が廻る。

iv SZ7270 出土遺物

弥生土器 (図 60-137 ～ 138・写真 39) 弥生土器が少量出土している。137・138は櫛描文系の太頸壺である。137は頸部に櫛描直線文が廻る。138は口縁内外面に櫛状工具により調整し、口縁端部に二枚貝による刺突文を付し、内面に突起を持つ。弥生時代中期に属するであろう。

土師器 (図 145 ～ 138・写真 39) 土師器の壺が1個体分まとまって出土した。胴部は概ね球状を呈し、口縁部は頸部から断面くの字に開く。内外面共に風化が著しく、調整が不明瞭であったが、縦または斜位のハケ目の痕跡が散見される。廻間Ⅱ式期初頭に比定できる。また、口縁部に剝離痕跡があり、意図的に打ち欠いたものと思われ、供献土器として使用された可能性が指摘できる。

v SZ7311 出土遺物

土師器 (図 139 ～ 144・写真 38 ～ 39) SZ7311からは比較的残りの良い状態で土師器が出土しており、これらは廻間Ⅱ式期初頭に比定できる。139は高坏の坏部である。椀形の坏部形状で口縁端部まで緩やかに立ち上がる。内外面共に丁寧なヘラミガキで仕上げる。140～144は壺である。外面をハケまたは板状工具で調整する。141～143はハケまたは板状工具での調整の他、不定方向のヘラミガキの痕跡が散見される。144は体部下方を丁寧な横位ヘラミガキで調整する。体部下方に内側から外へ叩いて打ち欠いた痕跡を残す窓を持つ。また、142・144は口縁部に145と同様の剝離痕跡があり、意図的に打ち欠いたものと考えられ、これらの土器が祭祀、儀礼等に使用された可能性が指摘できる。この他特記すべきこととして、144の外側へ打ち欠いた窓部の破片が壺内部で発見されており、珍しい事例であると言える。

vi 7地点出土土器以外の遺物

弥生土器 (図 61-146 ～ 151・写真 39) 調査区全体から弥生時代中期に属する土器が出土している。146は深鉢の口縁部である。内外面ハケ調整後、口縁内面に棒状工具による刺突文、端部に二枚貝による刺突文を施文する。147は櫛描文系の細頸壺である。口縁部は受口状を呈し、頸部に櫛描文が廻る。148・149は瓜部式系の壺である。頸部に櫛描直線文、口縁端部に板状工具による刻み目を飾る。150・151は底部穿孔の壺もしくはは甕と思われる。

土師器 (図 61-152・写真 40) 土師器は弥生土器に比べ、出土量が少ない。152はその中で唯一完形で出土した瓢形壺である。球形の体部を持ち、口縁は内彎し、端部がわずかに外反する。底部外面に窪みを持つ。内外面共に丁寧な縦位のヘラミガキで仕上げる。廻間Ⅱ式期初頭に比定できる。

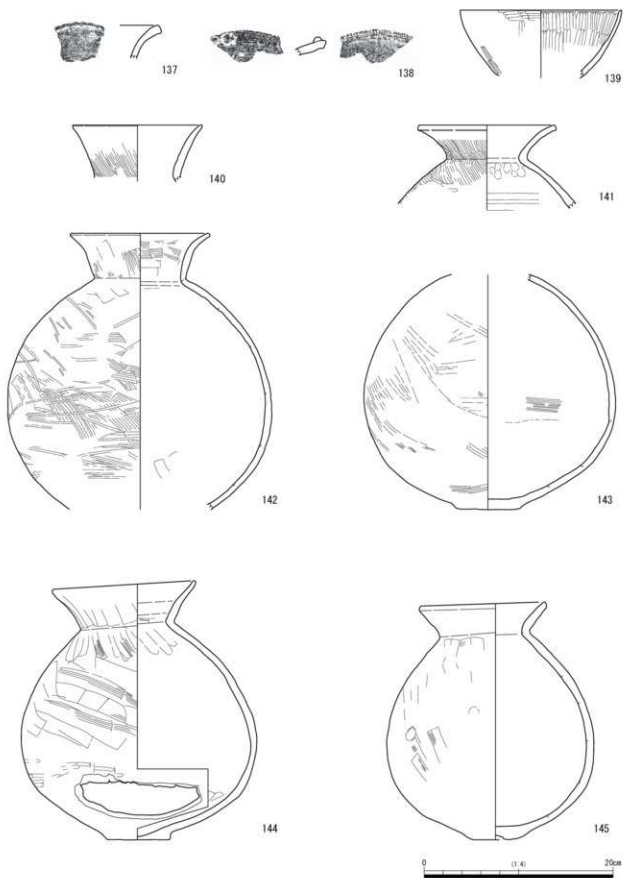


图 60 SZ7270 · SZ7311 出土遗物

HM
16
7
地点

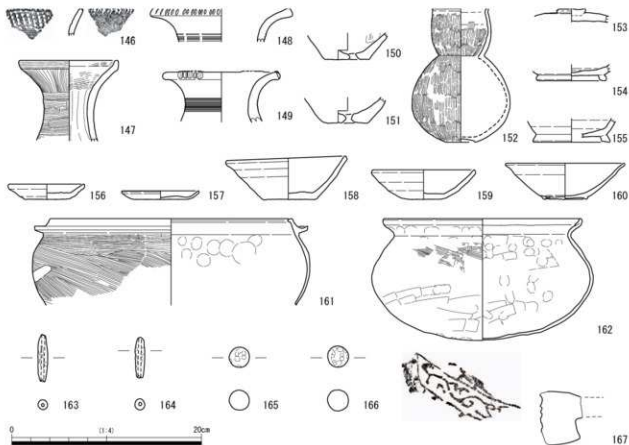


図 61 7地点出土その他の遺物

SZ7311 北側の攪乱から出土したもので、SZ7311 に伴う供献土器の可能性がある。

須恵器 (図 61-153 ~ 155・写真 40) 須恵器が少量出土している。多くが小破片であり、年代比定の根拠に乏しい。153 は坏蓋である。扁平なつまみを持つ。154・155 は坏身の底部である。

山茶碗 (図 61-156 ~ 160・写真 40) 山茶碗については多く出土している。その大半が尾張型山茶碗の小破片であったが、確認しえるもので概ね 6 ~ 10 型式と幅広い年代幅であった。また、少量だが、北部系山茶碗も出土している。156 は尾張型、157 は北部系の皿である。158・159 は尾張型、160 は北部系の碗である。156・158 は 8 型式、157・159・160 は 9 ~ 10 型式であろう。

土師質土器 (図 61-161 ~ 162・写真 40) 土師質土器が山茶碗について多量出土している。鍋、釜を主体とするため、器壁の薄い破砕片が大半を占める。その中で図化したものが次の 2 点である。161 は羽釜である。体部は内彎し、口縁端部が内側にわずかに屈曲する。銚部は少し上向きに付く。14 世紀代に属するとみられる。162 は伊勢型鍋である。扁平な体部を持ち、口縁部は外反した後やや上方に傾き、端部を内側に短く折り返され肥厚する。14 世紀前葉 ~ 中葉に比定する。

土錘・陶丸 (図 61-163 ~ 166・写真 40) 土錘、陶丸が少量出土している。163・164 は土錘である。どちらも上下端がすぼまる筒状で土師質の焼成である。165・166 は陶丸である。いずれも直径 2.0 cm 強の球形で、手捏ねにより整形されている。

瓦 (図 61-167・写真 40) 瓦が少量出土している。近世のものが大半を占めるが、167 はそれらとは特徴が異なる。167 は外区珠文帯をもつ均整唐草文軒平瓦で、尾張国分寺跡から出土した H II-A 型式の軒平瓦と同様の範范が認められるため、これと同范である。ただし、機械掘削時に出土しており、後世 (近・現代) に持ち込まれたものとみられる。

第6節 8地点の調査

I 概要と基本層序

8地点は畑間遺跡の中央付近に所在し、4地点の東側に位置する。本調査地周辺は、近隣の過去の調査状況から、弥生時代中期以降の墓域や古墳時代前期までの集落、その関連遺構などの存在が見込まれる地域である。また、先に調査を行った4地点でも弥生時代中期の方形周溝墓と考えられる溝を確認している。こうした状況から、本調査地でも当該期の集落や墓域などの発見が期待されたが、今回の調査で検出された遺構は大半が中世のものである。

本調査地は平成24年度調査の5地点に隣接するため、北部約1mを重複して掘削した。平成24年度調査では主に中世の遺構が検出されており、周辺部に中世の集落ないし居住域の展開が想定された。本調査地では居住域に直接関わる遺構は検出していないが、居住域と併存する可能性のある墓域として土坑墓群を検出している。

調査区の基本層序は、調査区全域で概ね一致している。基本層序は上から順に以下の4層からなる。

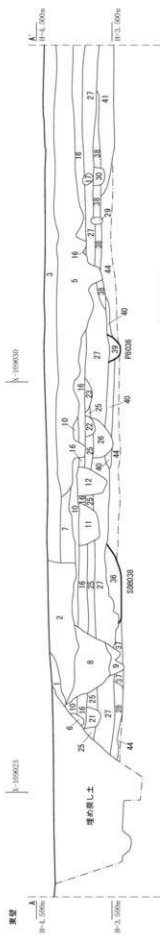
- 1: 表土 (灰オリーブ色土～砂質土)
- 2: 耕土または堆積土 (にぶい黄褐色砂質土)
- 3: 中世以後の遺構ベース土 (褐色砂) 中世以後の遺物包含層
- 4: 地山 (明黄褐色砂～粗砂)

1は現地表面であり、現代の耕作土及び耕地化以前の整地土である。表層は調査直前までの耕作土であり、これの直下の層は掘削機械の爪痕を残す。近世以降の遺物を包含する。

2は耕土または堆積土と考えられる層位である。部分的な違いはあるが概ね調査区全域で一致する。近世以降の層位と推定する。

3は中世以後の遺構のベース土である。人力掘削はこの上面から開始し、包含層として一括して遺物の取り上げを行った。調査区北側及び中央から南側でこの下層が落ち込んでおり、人為的に削られた可能性がある。山茶碗を主体とする中世の土器小片が出土しており、中世期に堆積したものと考えられる。また、少量ではあるが、条痕文系土器等の弥生時代前期～中期に属すると思われる土器小片がこの層から出土している。

4は色調が場所により異なるが、概ね調査区全体で一致する。砂堆の堆積層であり、遺物を包含しないいわゆる地山である。本調査区の遺構検出は、この層位の上面で行った。



- 埋戻し土・新填
- 515/3 灰オーリーブ色砂質土 埋戻
 - 514/1 灰色砂質土 埋戻
 - 514/2 灰オーリーブ色土 裏土
 - 514/1 灰色砂 埋戻
 - 10784/6 褐色砂質土 埋戻
 - 514/2 灰オーリーブ色砂質土
 - 2/54/2 緑灰黄褐色砂質土 埋戻
 - 2/54/1 灰褐色砂質土 埋戻
 - 10784/3 緑灰色砂質土 埋戻
 - 10784/3 に近い黄褐色砂質土
 - 10785/2 正黄褐色砂質土 埋戻
 - 10785/1 黄褐色砂質土 埋戻
 - 10784/2 灰黄褐色砂質土 埋戻
 - 10785/3 黄褐色砂質土 埋戻
 - 10785/4 に近い黄褐色砂質土
 - 10785/1 黄褐色砂質土
 - 2/57/2 緑灰黄褐色砂質土 埋戻
 - 2/57/1 黄褐色砂質土 埋戻
 - 2/57/3 黄褐色砂質土 埋戻
 - 2/57/3 に近い黄褐色砂質土 (埋戻土を含む)
 - 10785/3 地味褐色砂質土
 - 2/54/2 緑灰黄褐色砂質土
 - 2/54/2 緑灰黄褐色砂質土
 - 10784/4 褐色砂質土
 - 10785/3 地味褐色砂質土
 - 10784/6 褐色砂
 - 2/54/3 灰オーリーブ褐色砂
 - 2/57/1 黄褐色砂質土
 - 2/57/1 黄褐色砂質土
 - 10785/2 正黄褐色砂質土 S30023埋土
 - 2/57/3 正黄褐色砂質土 S30023埋土
 - 2/57/3 黄褐色砂質土 S30023埋土
 - 2/57/1 黄褐色砂質土 S30023埋土
 - 2/57/4 に近い黄褐色砂質土 S30023埋土
 - 2/57/3 正黄褐色砂質土 S30023埋土
 - 2/57/3 正黄褐色砂質土 S30023埋土
 - 2/57/4 正黄褐色砂質土 S30024埋土
 - 2/57/6 黄褐色砂質土 埋戻

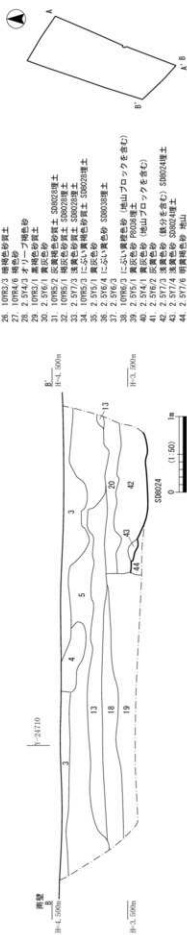
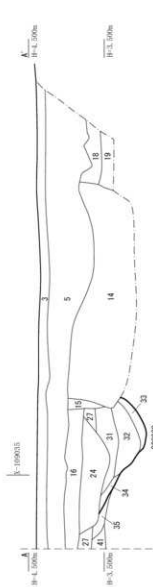


図 63 8 地点東・南壁土層断面図

II 検出遺構

8地点では主に溝、土坑、土坑墓、柱穴、ピットなどを検出している。中世以降の遺構を主体とし、それ以前の遺構とみなせるものはない。調査区中央で検出した土坑墓 ST8006 から人骨が出土しており、本稿ではその周囲で検出した規模、主軸方向の概ね揃う ST8005、ST8046、ST8048 を同様の土坑墓として報告する。これらを含め、主要なものについて下記に述べる。

ST8005(図64・写真21-96) 調査区中央で検出した長軸1.23m、短軸0.89深さ0.48mの土坑墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、ST8006の北西方向に並んで検出された。土器類10点が出土しており、山茶碗を主体とする。いずれも小片で詳細な年代比定は難しいが、概ね藤澤編年の5～7型式の時期に収まるであろう。

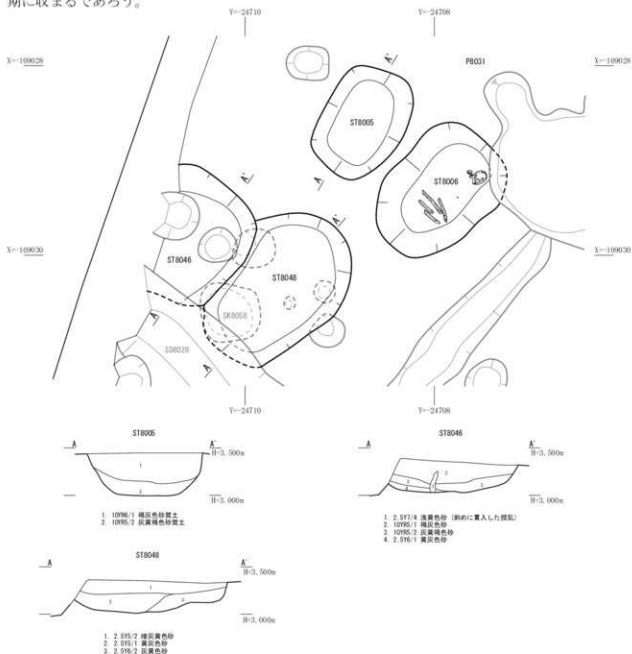


図64 ST8005・ST8046・ST8048 平面図・断面図

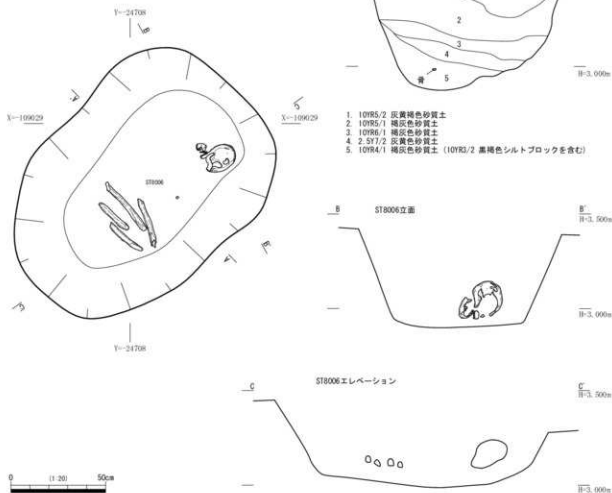


図 65 ST8006 平面図・断面図・人骨出土状況図

ST8006 (図 65・写真 21-97～99) ST8005 の南東に隣り合う長軸 1.51m、短軸 1.19 深さ 0.56m の土坑墓である。人骨の頭部および脚部が出土した。埋葬状態は南東向きの屈葬で、胴部および腕、頸部は消失していた。鑑定の結果、30～40 代の女性と推定される。副葬品はないが、埋土上層から山茶碗の小片が 6 点出土しており、これらは藤澤編年の 5～6 型式に比定できる。

ST8046 (図 64・写真 22-100～102) 調査区中央西壁際で検出した残存長軸 1.34m、短軸 0.86 深さ 0.39m の土坑墓である。遺物は出土していない。その規模と形状から ST8006 と同様のものと思われるが、後述の ST8048 を削平して存在するため、他の土坑墓に対し時期は下と考えられる。

ST8048 (図 64・写真 22-103～105) ST8006 の南西で検出した長軸 1.78m、短軸 1.02 深さ 0.25m の土坑墓である。ST8046 に北東部を削平される。遺物は山茶碗が 2 点出土している。いずれも小片であり、時期の比定は困難だが、概ね 5～7 型式に属すると思われる。

SD8001 (図 66・写真 22-106～107) 調査区北部で検出した幅 0.89 深さ 0.48m の溝である。24 年度調査で検出した SD5023 の延長部であり、その終端は確認できていない。過去の調査同様に出土した遺物は中世のものが多く、集落内の構成に関わる区画溝と考えられる。

SD8028 (図 67・写真 23-108～109) ST8006 をはじめとする 4 つの土坑墓の南に位置する幅 1.12

HM 15 (8) 8 地点

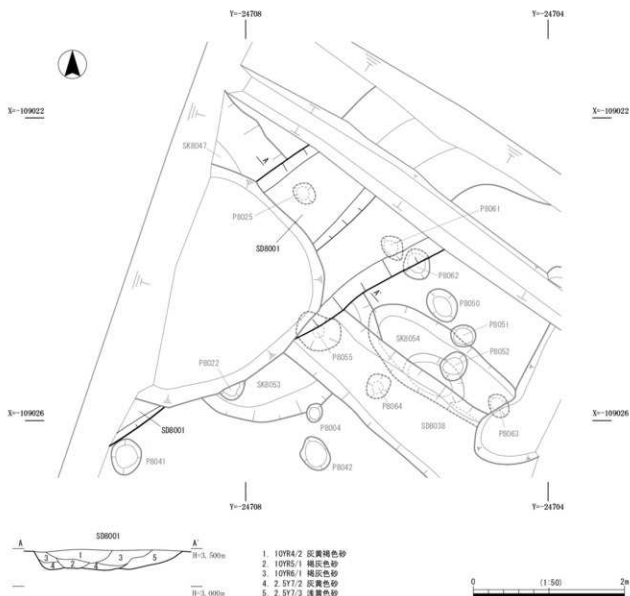
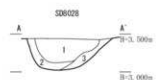
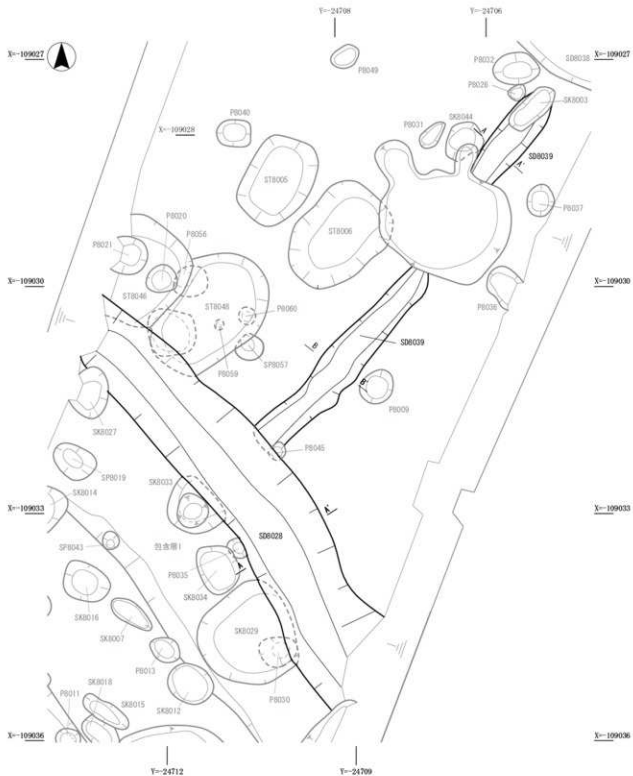


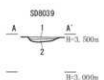
図 66 SD8001 平面図・断面図

深さ 0.48m の溝である。この溝の主軸は土坑墓の主軸と概ね直交する方位であり、墓域の南限を区画する溝である可能性がある。遺物は山茶碗を中心とした小片が 9 点が出土している。

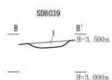
SD8039 (図 67・写真 23-110～111) SD8028 同様に墓域の東限を区画すると考えられる幅 0.51 深さ 0.11m の溝である。溝の南西端は SD8028 に削平されており、主軸は ST8006 と概ね一致する。遺物は出土していない。



1. 10YR5/2 灰黄棕色砂質土
2. 10YR5/1 褐色砂質土
3. 2.5Y7/3 淡黄色砂質土



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂
2. 2.5Y7/2 灰黄色砂



1. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂



図 67 SD8028・SD8039 平面図・断面図

III 出土遺物

8地点では土器類、土製品などが破片総数で340点出土した。この内、遺構から出土した遺物は70点と少量である。1地点と同様に遺構出土の遺物の多くは小片であり、図化しえた遺物は極少量であった。そのためここでは、遺構出土遺物も含め、調査区全体でまとめて報告する。

弥生土器(図68-168～169・写真41) 167・168は弥生土器の台付甕の脚部である。167は残存部が脚部の接合部付近3.3cmのみであり、全体の形状は不明である。内外面ともに強いナデ調整により粗雑に整形される。168は体部～口縁部が欠損しており、上部の形状は不明である。脚部外形は接合部～端部にかけて直線的に開く。内外面ともにハケにより調整される。8地点全体で弥生土器は62点出土しているが、ほぼ2～3cm程の小片で、そのほとんどが器種すら特定できなかった。掲載した2点は弥生時代中期後葉～終末期に属すると思われるが、他の小破片の中には弥生時代前期～中期と思われるものも含まれる。

製塩土器(図68-170・写真41) 製塩土器が少量出土している。169は脚部のみ残存し、脚部は下方に向けて細くなる棒状を呈し、手で握り込んで成形した痕跡が残る。知多式製塩土器3類に比定できる。

山茶碗(図68-171～179、183～184・写真41) 山茶碗は破片総数で146点出土しており、その多くは表土及び包含層掘削時のものである。大半が小片であり、口縁部～底部まで図上復元可能なものは皿を除き1点のみであった。170～175は山茶碗の碗である。170・171は体部が下方がやや丸みを帯びて立ち上がる形状を持つもので、尾張型山茶碗第5～6型式に比定できる。172～174は体部が底部の境界から口縁部にかけて直線的に立ち上がる形状のもので、7～9型式に比定できる。175は北部系山茶碗で、尾張型と比べ胎土が緻密で器壁が非常に薄い。体部は浅く開き、口縁部がわずかに外反する。9型式に比定できる。北部系山茶碗は他の調査区と同様、尾張型に比べ出土量が極めて少ない。176～178は皿である。いずれも尾張型山茶碗で、176は器高が1.3cmと浅く、体部が大きく開くもので、9型式に比定できる。177・178は器高が176に対しやや高く、体部は直線的に立ち上がる。いずれも8型式に比定できる。182・183は鉢である。どちらも直線的な体部を持ち、回転ナデによる外面の凹凸が目立つ。年代比定は難しいが、碗型の6～7型式に比定する。

瀬戸美濃産陶器(図68-180・写真41) 少量であるが瀬戸美濃産陶器が出土している。大半が碗類の小片であり、図化できるものは179のみである。体部～口縁部が欠損しているため、器種は特定できない。内外面ともに回転ナデ調整で、底部に切痕を残す。高台断面形は方形でわずかに外に開き、体部外面～底部に薄い褐釉を施す。高台径8.2cmと碗としては広い高台を持つため、皿もしくは鉢であると考えられるが、確証に乏しい。

陶丸(図68-181～182・写真41) 180・181は陶丸である。いずれも手捏ねにより整形され、指圧痕が明瞭に残る。須恵質の焼成で山茶碗の焼成に近い。

常滑焼(図68-185～186・写真41) 常滑焼は山茶碗に次いで多く出土しており、大甕の破片を主体とし65点を数える。山茶碗と同様に表土や包含層、攪乱からの出土が主で、遺構からの出土は7点のみである。これらは甕の体部片のため、年代比定は難しかった。184・185は大甕の口縁部で、端部をN字状に折り曲げて帯状にしたものである。口縁部の形状から、184は中野編年6～7型式、185は9型式に比定できる。

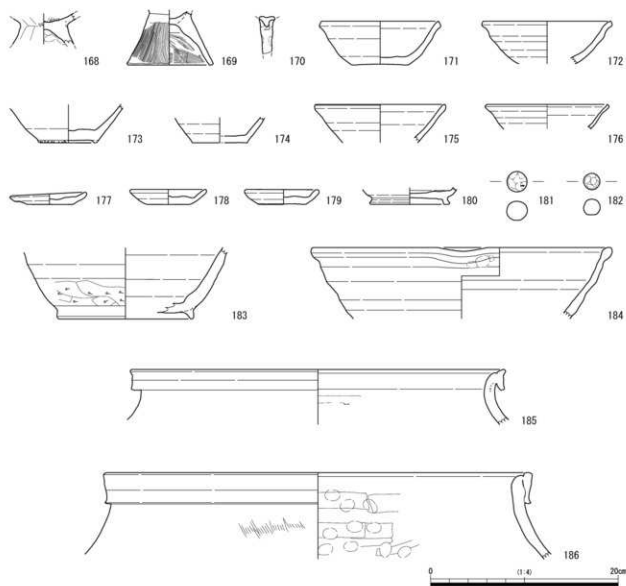


图 68 8 地点出土遺物

第3章 自然科学分析

梶ヶ山真里 (国立科学博物館)
中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

1. 緒言

本報告書は愛知県東海市畑間遺跡から出土した人骨に関する報告書である。本遺跡は東海市教育委員会のもと株式会社島田組により発掘調査が行われ、砂層内の土坑墓から1体の人骨が検出され、その年代は13世紀のものと思われる。土坑の規模は、長辺150cm×短辺120cm程度であり、人骨はやや仰向けに近く、膝は折り曲げた仰臥屈葬である。頭蓋骨と下肢骨が確認でき、上肢骨は検出されていない。人骨のクリーニングと補強は(株)パレオ・ラボによっておこなわれた。

頭蓋骨と四肢骨の写真撮影はキャノンEOS5DMark IIを用い、0.8メートルの距離から100mmマクロレンズで撮影した。

計測できるものは少なく、下肢骨の計測は馬場(1991)のマルチン法に従って実施した。比較集団として、四肢骨計測値は、遠藤ら(1967)を用いた。

通常、各個体の性別は、骨盤の形態を主、頭蓋の形態を従として判断する。骨盤からの性別判定は、大坐骨切痕の形態と腹側弓(ventral arc)および耳状面前溝の有無から判定した(Buikstra and Ubelaker, 1994)。頭骨による性別判定は、眉弓の有無および乳様突起の形態から判断する。当該人骨は、保存状態が良好ではないので四肢骨などから総合的に判断した。

また、通常、死亡時年齢については、恥骨結合面形態を用いたSuchey-Brooks法(Suchey and Katz, 1998; Sakaue, 2006)、耳状面形態を用いたBuckberry and Chamberlainの方法(Buckberry and Chamberlain, 2002)、大腿骨頭窩形態を用いた方法、そして頭蓋の縫合を用いたMeindl and Lovejoyの方法などから総合的に判断するが、当該人骨の場合は、歯の咬耗と萌出状態、頭蓋骨の縫合のみを用いた。

身長は通常、藤井(1960)とPeasonの方法を用い平均値を推定身長とするが、大腿骨も脛骨も不完全であるので、参考のために、おおよその最大長を求め、そこから推定した。

2. 人骨所見

頭蓋骨の保存状態はあまり良好ではない(保存部位図1)。骨表面は風化による傷みが強い。後頭骨そして下顎骨が保存されている。外後頭隆起はほとんど発達していない。左右側頭骨は岩様部と乳様突起周辺、そして錐体が残っている。左右の乳様突起の先端の形態は不明。左右錐体はそれほど小さくなく、どちらかというやや小ぶりである。顎関節窩は狭く浅い。前方への関節面の延長が見られる。頬骨弓は破損している。

縫合はラムダ縫合の一部と、矢状縫合の一部が確認できる。矢状縫合は開離している。外板では癒合は見られないが、内板では増殖がみられ癒合が進行している状態が確認できる。ラムダ縫合は

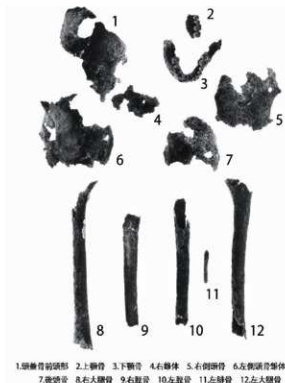
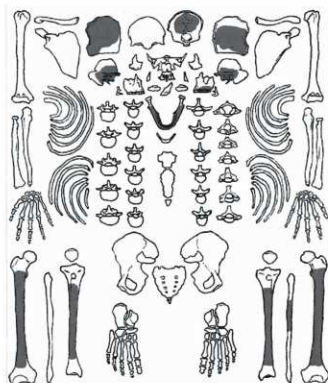


図 69 畑間遺跡出土人骨保存部位

内板および外板でも開いている。側頭部内板の一部には、加齢傾向の特徴である静脈溝の圧痕が見られる。下顎頭は、左右とも破損している。また、左右の下顎頭角の一部も破損し、全体的な形態はわからない。しかし、下顎体は全体的に高く、下顎枝から類推する角は概ね頑丈であると思われる、華奢な下顎角は推測できない。オトガイ部分はあまり隆起しておらず、オトガイ三角は形成されていない。歯列弓は狭い放物線を呈している。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

						3	4	5	6	7			
○	6	5	○	○	○	○	2	3	4	5	6	7	/

○は 死後脱落、歯槽開放
/は 歯槽崩壊

保存されている歯の咬耗は、エナメル質がわずかに磨り減っているだけである。象牙質は切歯と犬歯が露出している程度である。年齢は熟年や老年というものではない。下顎犬歯の歯頸部には数本の薄い溝が見られる。いわゆるストレスマーカーである。幼児期に栄養失調や疾病等の成長において強いストレスがあったことが伺える。

大腿骨最大長は両端が破損しているので計測できない。右骨体中央部は30cmと、左骨体中央部31cmが保存されている。推測される大腿骨最大長は、江戸時代男性平均(413.8mm)よりも小さく、江戸時代女性平均(377mm)に近いと思われる。大腿骨中央周は右76mmで江戸時代男性平均(87.2mm)よりも江戸時代女性平均(73.9mm)に一致する。大腿骨の後面は粗線はあまり隆起していないが、骨体断面形は三角形に近くなっている。骨体中央断面示数は、102.5(25/24.5)と、江戸時代男性平均(103.9)よりも小さい。骨体上断面示数は、左68.9(20/29)と江戸時代男性平

均 (91.2) よりもはるかに小さく、「扁平大腿骨」に分類されるほどである。大腿骨骨頭は保存されていないので、骨頭窩の形状は不明。

脛骨最大長は遠位端が破損しており計測不可能である。保存されている長さは左右とも 20 cm ほどである。栄養孔位周は右 73.0mm と、江戸時代男性平均 (89.3mm) よりも小さく、江戸時代女性平均 (77.7mm) に近い。脛骨の前縁はやや鋭く、その軌道は直線的である。脛骨後面のヒラメ筋線は骨表面の傷みが強く、不明瞭。後面は平坦である。(中央横径 18.8/ 中央最大矢状径 24) 脛示数 78 は、江戸時代女性平均 (77.9) に匹敵する。腓骨最大長は計測不可能である。骨体は細く (20mm) 華奢である。

3. まとめ

当土坑から検出された人骨は保存状態が悪く、骨表面の傷みが強く、筋付着部などの細かい部位の観察が非常に困難な状態である。しかしながら、大腿骨と脛骨の骨体の太さは細く華奢で、後頭骨の形態や下顎骨のオトガイ部が発達していないことを総合的に判断して、性別は女性の可能性が高いと思われる。また、歯の咬耗は特に進んでおらず、象牙質は切歯と犬歯しか露出が確認できない。また、頭蓋縫合は完全に癒合はしておらず、推定される年齢は中年と思われる。30 才～40 才と推定される。

保存されている人骨には、疾病痕や事故などによる損傷痕、さらには長年の生活習慣による痕跡は確認できない。

また、推定される身長は、大腿骨最大長が完全ではないため算定できない。しかし、保存部位の最大長 38cm 前後と判断されることから、当該個体の推定身長はだまかではあるが、150cm 前後と思われる。

参考文献

馬場悠男 (1991) 人骨計測法。人類学講座 別巻 1 人体計測法, 雄山閣。

馬場悠男・坂上和弘 (2011) 寛永寺徳川将軍親族遺体の形態学的研究。東叡山寛永寺徳川家御裏方垂廟第三分冊, 吉川弘文館, 223-394。

Buckberry J. L. and Chamberlain A. T. (2002) Age estimation from the auricular surface of the ilium: a revised method. *American Journal of Physical Anthropology*, 119 (3), 231-239.

Buikstra J. E. and Ubelaker D. H. (editors) (1994) Standards for data collection from human skeletal remains. *Arkansas Archeological Survey Research Series No. 44*.

遠藤萬里・北條暉幸・木村賢 (1967) VII 四肢骨。増上寺 徳川将軍墓とその遺品・遺体, 東京大学出版会。

藤井明 (1960) 四肢長骨の長さとの関係に就いて。順天堂大学体育学部紀要, 3, 49-61。

Hasegawa I., Uenishi K., Fukunaga T., Kimura R., and Osawa M. (2009) Stature estimation formulae from radiographically determined limb bone length in a modern Japanese Population. *Legal medicine*, 11, 260-266.

平本嘉助 (1972) 縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化。日本人類学雑誌, 80, 221-236。

Sakaue, K. (2006) Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese skeletal material. *Anthropological Science*, 114, 59-64.

第4章 まとめ

畑間遺跡の本年度の調査は1・4～8地点の計6地点に分かれて行った。全地点に共通することとして包含層等、遺構に伴わない箇所から縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物がわずかではあるが出土している点があげられる。以下、各地点ごとにまとめ、考察を記述する。

第1節 1地点

1地点では主に中世の遺構を検出している。調査区のほぼ全体に後世の削平が及んでおり、削平された地山面で検出したためか、確認できたものはわずかであった。そのため、それらの遺構はいずれも浅く、底部がかろうじて残っている状況であった。こうした状況は、後世に1地点周辺に大幅な改変が行われた傍証であると考えられ、調査区壁面の断面観察からも推測される。遺構の多くは土坑やピットであり、規模や配置に規則性はなく、性格は不明である。唯一柱穴として認識できたSP1007も現代の攪乱に上方を削平されており、壁際で検出したものの、帰属する層位を特定しえない。調査区内から出土した遺物の年代から、今回検出した遺構の多くは中世～近世初頭のものと推定される。また、調査地点から道を隔てた東側には常蓮寺が所在しており、関連遺構の発見が期待されたが、寺院関係の遺構や遺物は確認されなかった。

第2節 4地点

4地点の調査では、西半部が後世の削平を受けており、遺構を確認することが出来なかったが、東半部でわずかに検出できた状況であった。その中で、方形周溝墓の周溝である可能性を示すSD4042を検出できた点は評価できる。当地点の北西部で過去に調査を行っているが、この周辺部では方形周溝墓は検出されていない上、出土した土器が供献土器として評価できるのであれば、弥生時代中期後葉の方形周溝墓に比定でき、この周辺部に当該期の墓域が展開した可能性が指摘できる。また、両岸に小穴列が並ぶSD4028と共通する特徴の区画溝が、今年度調査の7地点で検出されており、7地点同様の中世期に比定できる遺構が当地点に及んでいる可能性がある。

第3節 5地点

5地点では主に弥生時代後期～中世の遺構を検出している。とりわけ方形周溝墓の周溝と考えられるS25054を検出できたことは大きな成果といえる。ただし、遺物の出土量が少なく、弥生時代後期以降というおおまかな時期を捉えるにとどまることは残念である。その他、第2章で取り上げたSD5004をはじめ、方形周溝墓の周溝である可能性のある遺構を同地点内で検出しているが、他の地点のように供献土器として捉えることのできる遺物が出土する等の根拠を示しうる証拠が乏しい。また、中世の溝であるSD5013は本年度調査の7地点で検出された区画溝であるSD7312の北西-南東方向部分と並行しており、これの北東-南西方向部分と4地点で検出されたSD4028とを結んだ位置に接続する溝である可能性が指摘できる。なお、SD4028とSD7312の間にあたる溝は5地点内で検出されていないため、SD5013がSD7312のようにL字状に屈折した延長部分であり、この内側を区画していた可能性も考えられる。

第4節 6地点

6地点からは主に弥生時代中期～中世の遺構を検出している。中世の遺物を含む土坑、柱穴、ピット等を検出しているが、土坑、ピットに関しては規模や配置に規則性はない。柱穴に関しても、調査区の東側と西側にそれぞれ少数がまとまるが、建物を構成するような配置はみられなかった。SB6107は出土遺物から弥生時代中期中葉に属する堅穴建物であり、7地点で検出した堅穴建物と時期が共通することから、6・7地点周辺における弥生時代中期集落の展開をうかがい知ることができる。

また、北西部で検出した方形周溝墓SZ6125は、弥生時代後期～古墳時代前期に属し、他の地点で検出した方形周溝墓を含め該当時期の墓域の広がりを推定する一助となりうるものである。また、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて機能していたと思われる大溝SD6043は、検出当初、本地点の北側に位置する5地点で検出されたSD5097と規模・軸方向が近似するため同一のものと疑ったが、SD5097は無遺物であり、埋土が共通しないことから、両遺構の関連性は不明である。

第5節 7地点

7地点からは主に弥生時代中期～中世の遺構を検出している。本地点はこれまでの畑間遺跡の調査の中で最も南西に位置しており、今回の調査で畑間遺跡南西端に弥生時代中期の集落、古墳時代初頭の方形周溝墓の墓域、中世の区画溝によって区画される施設の存在を想定できる成果を得ることができた。SB7057、SB7268、SB7269は弥生時代中期中葉の遺物が埋土から出土する堅穴建物で、上述したSB6107を含め、当該期の集落を形成すると考えられる。本地点の南側に流れていたと推定される旧大田川流域から北へ向けて弥生時代中期の集落が展開していたものと思われる。また、古墳時代初頭に属する方形周溝墓SZ7270、SZ7311が検出されている。6地点のSZ6125を含めこの周辺の墓域を形成するものであろう。それぞれ調査区の南端、東端で検出しており、同一砂堆内でさらに南および東側への展開が想定される。また、これらの周溝からは打ち欠きの痕跡が認められる壺が出土しており、供献土器として評価できるものである。

第6節 8地点

8地点は4地点の東に位置するが、4～7地点のような弥生時代中期～古墳時代初頭に属する遺構は確認できず、13世紀～14世紀に属する中世の遺構を主とする。北側が平成24年度調査の5地点に近接しており、中世の区画溝およびそれに区画された大型土坑や、柱穴などを検出している。また、伊勢型鍋が比較的大量に出土したことから周辺部に中世の集落ないし居住域が展開したことが想定されている。特に調査区南東部から掘立柱建物と考えられる柱穴を確認したため、南側に居住域があるものと報告されている。今回の8地点の調査では、居住域に直接関わる遺構は検出していないが、以前の調査で想定した居住域と併存する可能性のある墓域を検出した。墓域は東側と南側を区画する溝を検出しており、周辺に集落や居住域が想定できる結果となった。また、北側の調査に比べ、伊勢型鍋などの煮炊具の出土量が少ないことも当地が墓域であった傍証として捉えることができる。

参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2002 『愛知県史資料編1 考古1 旧石器・縄文』
- 愛知県史編さん委員会 2003 『愛知県史資料編2 考古2 弥生』
- 愛知県史編さん委員会 2005 『愛知県史資料編3 考古3 古墳』
- 愛知県史編さん委員会 2010 『愛知県史資料編4 考古4 飛鳥～平安』
- 石川松衛 1928 『横須賀町誌』愛知県史編纂会・知多郡横須賀町役場
- 東海市教育委員会 1997 『愛知県東海市 東畑遺跡等試掘調査報告』
- 東海市教育委員会 1998 『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 1999 『愛知県東海市 上浜田遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2004 『愛知県東海市 畑間遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2009 『愛知県東海市 畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2012 『愛知県東海市 畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2013 『愛知県東海市 畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2014 『愛知県東海市 畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告 一平成11～19(1999～2007)年度調査一』
- 東海市教育委員会 2015 『愛知県東海市 畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2016 『愛知県東海市 畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 永井宏幸・村木誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年—東海編一』木耳社
- 永井宏幸 2015 「中部」『考古調査ハンドブック12 弥生土器—ニューサイエンス社』
- 岡本直久 2005 「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集(第2版)』同シンポジウム実行委員会。
- 柴垣勇夫ほか 2004 『東海地方山茶碗研究の現在と課題』(中世土器・陶器編年研究会記録)「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班
- 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会編 1996 「尾張の『伊勢型鍋』鍋と甕 そのデザイン」(第4回東海考古学フォーラム資料集)
- 藤澤良祐ほか 2005 『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』同シンポジウム実行委員会
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『研究紀要』第10輯
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 2003 『鳥帽子遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第117集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『名古屋三の丸遺跡(III)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第37集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 2002 『清洲城下町遺跡(VI)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第99集
- 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの—生産と流通—』記念講演会・シンポジウム資料集

静岡県道建設概況表 (国15-1)

路線番号	起点	終点	種別	道路幅員 (m)	建設費 (億円)		延長 (km)	竣工年	色調	外装	内装	備考
					計画	実績						
1	1	26.942	普通	—	11.21	—	0.83	—	206/100色	同様ナリ	同様ナリ	内装:車体外装・道路の外装に準拠
2	1	—	普通	—	16.53	06.41	06.41	—	207/100色	同様ナリ	同様ナリ	内装:車体外装・道路の外装に準拠
3	1	—	普通	—	11.53	17.33	17.33	—	207/200黄色	同様ナリ, 同様赤色	同様ナリ	内装:車体外装・道路の外装に準拠
4	1	26.649	普通	14.23	—	06.26	—	—	207/100白色	同様ナリ	同様ナリ	内装:車体外装・道路の外装に準拠
5	1	—	普通	—	11.73	—	—	—	207/100白色	同様ナリ	同様ナリ	内装:車体外装・道路の外装に準拠
6	1	—	普通	13.40	13.30	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
7	1	—	普通	115.0	115.0	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
8	1	—	普通	—	12.93	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
9	1	—	普通	—	15.71	1.2	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
10	1	—	普通	—	19.83	1.7	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
11	1	—	普通	—	6.7	1.9	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
12	1	—	普通	—	12.03	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
13	1	—	普通	—	12.03	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
14	1	—	普通	—	12.03	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
15	1	—	普通	—	12.03	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
16	1	—	普通	—	11.01	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
17	1	—	普通	—	11.01	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
18	1	—	普通	—	11.01	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
19	1	—	普通	—	11.01	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
20	1	—	普通	—	11.01	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
21	1	—	普通	—	11.01	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠
22	1	—	普通	—	11.01	—	—	—	06.41	同様ナリ	同様ナリ	車体外装・道路の外装に準拠

表 (1) 内の数字は概算・計画の数値を示す

静岡県道建設概況表 (国15-4)

路線番号	起点	終点	種別	道路幅員 (m)	建設費 (億円)		延長 (km)	竣工年	色調	外装	内装	備考
					計画	実績						
23	4	00205	普通	—	13.23	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
24	4	00206	普通	—	13.43	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
25	4	00205	普通	—	15.4	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
26	4	00205	普通	—	15.4	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
27	4	00206	普通	—	13.13	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
28	4	00206	普通	—	13.13	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
29	4	00206	普通	—	13.13	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
30	4	00206	普通	—	13.13	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
31	4	00204	普通	—	12.63	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
32	4	00205	普通	—	13.93	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
33	4	00205	普通	—	14.03	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
34	4	00205	普通	—	14.13	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
35	4	00205	普通	—	14.23	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
36	4	00205	普通	—	14.33	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
37	4	00205	普通	—	14.43	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
38	4	00205	普通	—	14.53	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
39	4	00205	普通	—	14.63	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
40	4	00205	普通	—	14.73	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
41	4	00205	普通	—	14.83	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
42	4	00205	普通	—	14.93	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
43	4	00205	普通	—	15.03	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—
44	4	00205	普通	—	15.13	—	6.0	—	1037/7 青銅色	ナリ	ナリ	—

表 (1) 内の数字は概算・計画の数値を示す

標準規格適合検査表 (IM15-5)

※ () 内の数値は規定可能な最大数値を示す

標準規格適合検査表 (IM15-5)	部品番号	部品名	種類	仕様	質量 (g)			組立	色調	外形	内径	備考
					口径	長さ (mm)	重量 (g)					
45	5	000200	樹脂加工品	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	エポキシ、炭素繊維	ナメ	—	
46	5	000201	樹脂加工品	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	エポキシ、炭素繊維	ナメ	—	
47	5	000202	樹脂加工品	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	炭素繊維	ナメ	—	
48	5	000203	樹脂加工品	嵌	17.0	64.0	—	10077/21-25.1黄褐色	エポキシ、炭素繊維	ナメ	—	
49	5	000204	樹脂加工品	嵌	17.0	64.0	—	10077/21-25.1黄褐色	エポキシ、炭素繊維	ナメ	—	
50	5	002000	520913	山系鋼	嵌	113.3	5.4	4.1	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
51	5	002000	520913	山系鋼	嵌	113.3	5.4	5.2	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
52	5	002000	520913	山系鋼	嵌	113.3	5.4	4.4	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
53	5	002000	520913	山系鋼	嵌	113.3	5.4	4.4	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
54	5	004005	520913	山系鋼	嵌	8.0	1.7	5.3	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	取付ボルト
55	5	002000	520913	山系鋼	嵌	8.6	1.7	5.0	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	取付ボルト
56	5	004005	520913	山系鋼	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	10077/21-25.1黄褐色	10077/21-25.1黄褐色	取付ボルト
57	5	002000	520913	山系鋼	嵌	108.3	11.7	10.9	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
58	5	002000	520913	樹脂加工品	嵌	121.7	17.2	—	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
59	5	002000	520913	樹脂加工品	嵌	121.7	17.2	—	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
60	5	072005	530110	養生土器	嵌	112.7	19.0	—	0027/4 黄褐色	ナメ、ハブ、エポキシ	ナメ	—
61	5	072005	530110	養生土器	嵌	—	—	—	0027/4 黄褐色	ナメ、炭素繊維、炭素繊維	ナメ	—
62	5	072005	530110	養生土器	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	炭素繊維	ナメ	—
63	5	072005	530110	養生土器	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	炭素繊維	ナメ	—
64	5	072005	530110	養生土器	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	炭素繊維	ナメ	—
65	5	072005	530110	養生土器	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	炭素繊維	ナメ	—
66	5	072005	530110	養生土器	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	炭素繊維	ナメ	—
67	5	072005	530110	養生土器	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	炭素繊維	ナメ	—
68	5	002005	530110	樹脂加工品	嵌	206.0	33.3	—	10077/21-25.1黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
69	5	002005	530096	樹脂加工品	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
70	5	—	樹脂加工品	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト	
71	5	—	樹脂加工品	嵌	113.2	5.7	66.2	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト	
72	5	—	樹脂加工品	嵌	113.4	5.5	7.6	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト	
73	5	004005	520913	山系鋼	嵌	7.6	1.7	3.2	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	取付ボルト
74	5	072000	520913	山系鋼	嵌	111.4	3.5	65.7	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	取付ボルト
75	5	072000	520913	山系鋼	嵌	28.1	0.3	—	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	取付ボルト
76	5	072000	520913	山系鋼	嵌	14.2	0.3	—	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	0027/21-25.1黄褐色	取付ボルト
77	5	—	樹脂加工品	嵌	136.4	16.2	—	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト	
78	5	072005	520913	山系鋼	嵌	122.3	18.0	—	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
79	5	070000	530078	樹脂加工品	嵌	124.0	17.9	—	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
80	5	—	樹脂加工品	嵌	—	—	—	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト	
81	5	—	樹脂加工品	嵌	—	—	—	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト	
82	5	000705	530109	樹脂加工品	嵌	4.1	4.9	2.8	10077/21-25.1黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト
83	5	072000	520913	山系鋼	嵌	—	—	—	10077/21-25.1黄褐色	0027/4 黄褐色	0027/4 黄褐色	取付ボルト

福岡消防活動視察表 (IM15-6)

表(1) 内の数値は概算可能な個人数値を示す

消防 番号	消防 タイプ	地区・団塊	種別	設備	日往 回数	出張 回数 (1日1回)	出張 人員 (1日1名)	出動 回数	出動 人員	出動 時間	出動 内容	内訳	備考
84	6	120652	消防上級	道	—	16.63	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	上級1名	—
85	6	120652	消防上級	道	—	16.63	—	—	消防上級	7.03時7分 7.03時14分	消防上級	消防上級	—
86	6	120652	消防上級	道	—	16.63	6.2	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
87	6	112615	消防上級	道	—	16.13	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
88	6	112615	消防上級	道	—	16.13	—	—	消防上級	7.03時7分 7.03時14分	消防上級	消防上級	—
89	6	112615	消防上級	道	16.63	11.23	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
90	6	112609	消防上級	道	115.23	14.73	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
91	6	112615	消防上級	道	125.63	15.39	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
92	6	112609	消防上級	道	—	15.43	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
93	6	112610	消防上級	道	—	15.43	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
94	6	—	消防上級	道	—	15.43	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
95	6	120649	消防上級	道	115.43	14.23	—	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
96	6	120655	消防上級	道	105.63	1.2	15.1	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
97	6	112615	消防上級	道	—	16.3	16.3	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
98	6	112615	消防上級	道	—	2.1	6.1	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
99	6	112615	消防上級	道	—	2.5	2.5	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—
100	6	112615	消防上級	道	—	2.4	6.1	—	消防上級	10時07分 10時10分	消防上級	消防上級	—

知能発達検査表 (IMI-5-7)

表()内の数値は標準化可能人数範囲を示す

検査番号	項目	グラフ	順位・成績	種類	材料	目録 (頁数)	所要時間 (分)	難易度 (%)	知士	色調	外面	内面	備考
114	7	143801	387279	学生上級	紙	18.9	17.4	0.0	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側色	ハシ、赤文字、 ナシ、赤文字	ヨコ文字、ナシ	
115	7	143805	387279	学生上級	簿	21.6	17.0	—	0級～劣等劣行	10185.0 両側側色	黒紙、赤文字	ナシ、赤文字	
116	7	143802	387279	学生上級	簿	21.2	12.0	—	0級～優等劣行	10185.0 両側側色	ハシ、ナシ、黒紙、 ナシ、ハシ	ナシ、ハシ	
117	7	150899	387279.1上級	学生上級	簿	—	—	—	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ヨコ文字、黒紙	ヨコ文字	
118	7	150898	387279.1上級	学生上級	簿	—	11.0	—	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ヨコ文字、ハシ	ヨコ文字、ハシ	
119	7	150899	387018.1中級	土級	高紙	17.6	—	—	0級～劣等劣行	2.3972.9 側色	ヨコ文字、劣等劣 行	ヨコ文字、劣等劣 行	
140	7	150899	387018.1中級	土級	簿	13.6	—	—	0級～劣等劣行	10185.0 両側側色	ヨコ文字、ハシ	ヨコ文字	
141	7	114845	387233.1上級	学生上級	簿	14.4	—	—	0級～劣等劣行	10185.0 両側側色	ナシ、ヨコ文字、 ナシ、ヨコ文字	ヨコ文字、ハシ	
142	7	150845	387233.1中級	土級	簿	14.8	17.6	6.4	0級～優等劣行	10182.6 側色	ナシ、ヨコ文字、 ナシ、ヨコ文字	ヨコ文字、ハシ	
143	7	150899	387018.1中級	土級	簿	—	—	—	0級～優等劣行	10185.0 両側側色	ハシ、ナシ、劣等劣 行	ハシ	
144	7	150899	387018.1中級	土級	簿	14.5	19.3	—	0級～優等劣行	10185.0 両側側色	ヨコ文字、ハシ、劣等劣 行	ナシ、ヨコ文字、ハシ	
145	7	150899	387279.1上級	学生上級	簿	13.1	23.9	3.8	0級～優等劣行	10185.0 両側色	ヨコ文字、ハシ	ナシ	
146	7	150895	387096.1上級	学生上級	簿	—	—	—	0級～劣等劣行	2.3972.9 側色	ナシ、赤文字	ヨコ文字、側側色	
147	7	150875	372745	学生上級	簿	16.3	0.0	—	0級～優等劣行	7.3972.9 側色	ハシ、黒紙、 ナシ、黒紙	ハシ	
148	7	150899	387103	学生上級	簿	14.3	—	—	0級～優等劣行	10182.6 両側側色	ヨコ文字、黒紙、 ナシ、黒紙	ヨコ文字	
149	7	150899	387103	学生上級	簿	11.4	—	—	0級～優等劣行	10185.0 両側側色	ヨコ文字、黒紙、 ナシ、黒紙	ヨコ文字	
150	7	143805	包含簿	学生上級	簿	—	—	4.7	0級～劣等劣行	10186.4 2.25.1両側側色	ナシ	ナシ	
151	7	143809	包含簿	学生上級	簿	—	—	—	0級～劣等劣行	10186.4 2.25.1両側側色	ナシ	ナシ	
152	7	140849	372008 (保証)	土級	紙	5.8	14.1	3.1	0級～優等劣行	10186.4 側色	ナシ、ヨコ文字	ナシ	
153	7	145899	包含簿	標準級	厚紙	6.0	11.0	2.7	0級～優等劣行	7.3972.9 2.25.1両側側色	ナシ	ナシ	
154	7	145899	372008 (保証)	標準級	厚紙	—	11.8	0.0	0級～劣等劣行	10187.6 側色	ヨコ文字、側側色	ヨコ文字	
155	7	150895	包含簿	標準級	厚紙	—	—	—	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側色	ヨコ文字、側側色	ヨコ文字	
156	7	150845	包含簿	土級	紙	7.9	1.6	4.9	0級～劣等劣行	10171.6 両側色	ヨコ文字、側側色	ヨコ文字	
157	7	143879	包含簿	10年級	紙	8.0	1.9	5.8	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ナシ、ハシ、ヨコ文字	ヨコ文字	
158	7	—	包含簿	10年級	簿	12.0	4.3	5.0	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ヨコ文字、側側色	ヨコ文字	
159	7	150879	882.25	10年級	簿	10.0	2.1	4.2	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ヨコ文字、側側色	ヨコ文字	
160	7	150845	882.5	10年級	簿	12.4	3.8	4.2	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ヨコ文字、側側色	ヨコ文字	
161	7	150845	882.5	10年級	簿	12.5	—	—	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ハシ、ヨコ文字、ナシ	ヨコ文字、ナシ	
162	7	150875	882.26	10年級	簿	12.0	12.7	—	0級～劣等劣行	2.3972.9 両側側色	ナシ、ナシ、 劣等劣行	ナシ、劣等劣 行	
163	7	140895	387023	土級	上簿	1.0	5.9	1.0	0級～劣等劣行	10185.0 2.25.1両側側色	ヨコ文字	ヨコ文字	
164	7	150899	387103	土級	上簿	1.0	4.2	1.2	0級～劣等劣行	10187.6 側色	ヨコ文字	ヨコ文字	
165	7	114843	387017 (保証)	土級	高紙	2.1	2.1	2.1	0級～劣等劣行	10187.6 両側側色	ヨコ文字	ヨコ文字	
166	7	150899	387103	土級	高紙	2.2	2.2	2.2	0級～劣等劣行	10187.6 両側側色	ヨコ文字	ヨコ文字	
167	7	—	—	—	—	14.3	14.3	5.7	0級～優等劣行	2.3972.9 両側側色	ナシ、ナシ	ナシ	

福岡清洲港物産表 (0015-8)

※ () 内の数字は重量(%)の数字の最大値を示す

新国 番号	品名	グレード	単位・量	種類	銘柄	JAS.COM		産地	色調	内産	産源	備考
						(%)	(%)					
166	8	000705	保正1	養生上級	台行蟹	—	03.33	—	7.0307/6 暗色	ナガ	熊本県 一畑製菓工場	
169	8	002300	精製原州	養生上級	台行蟹	—	03.71	6.8	10007/4 2-5-1 暗色	ナガ、ハナメ	熊本県	
170	8	—	総合品	北製品	製菓上級	—	03.71	—	10008/3 高黄褐色	ナガ、ハナメ	熊本県	
171	8	000705	保正1	総合品	蟹	12.57	4.7	06.01	10009/3 2-5-1 黄褐色	熊本県	—	
172	8	000705	保正1	総合品	蟹	13.43	4.3	—	10006/2 2-5-1 黄褐色	熊本県	熊本県	
173	8	000705	保正1	総合品	蟹	—	02.71	5.9	10007/2 黄褐色	熊本県	熊本県	
174	8	000705	保正1	総合品	蟹	—	02.71	6.4	10007/3 黄褐色	熊本県	熊本県	
175	8	—	精製原州	総合品	蟹	13.43	4.3	—	10007/2 黄褐色	熊本県	熊本県	
176	8	000705	保正1	総合品	蟹	13.43	02.43	—	10007/3 黄褐色	熊本県	熊本県	
177	8	—	精製原州	総合品	蟹	2.8	1.3	4.9	10007/3 黄褐色	熊本県	熊本県	
178	8	—	総合品	総合品	蟹	17.43	1.6	04.01	10007/2 5-1 黄褐色	熊本県	熊本県	
179	8	—	総合品	総合品	蟹	17.43	1.6	4.8	10007/2 5-1 黄褐色	熊本県	熊本県	
180	8	—	総合品	総合品	蟹	—	02.9	—	10007/2 5-1 黄褐色	熊本県	熊本県	
181	8	—	総合品	総合品	蟹	—	02.9	—	10007/2 5-1 黄褐色	熊本県	熊本県	
182	8	000705	保正1	北製品	蟹	11.720	11.645	01.33	10007/1 総合品	熊本県	—	
183	8	000705	保正1	総合品	蟹	—	17.43	—	10008/3 黄褐色	ナガ、ハナメ、ヨコナガ	熊本県	
184	8	000705	総合品	総合品	蟹	131.4	17.43	—	10008/4 暗褐色	熊本県	熊本県	
185	8	000705	保正1	総合品	蟹	36.6	05.83	—	10007/4 2-5-1 黄褐色	ヨコナガ	ヨコナガ	
186	8	000705	保正1	総合品	蟹	45.0	09.33	—	10007/4 2-5-1 黄褐色	熊本県、ヨコナガ	熊本県、ヨコナガ	

写真図版

写真1 (1地点)



1 SP1007 半截状況 (北から)



2 SK1009 半截状況 (東から)



3 SK1016 半截状況 (西から)



4 P1019・SD1020 断面 (北から)



5 1地点完掘状況 (西から)



6 4 地点遺構検出状況 (西から)



7 SB4052 検出状況 (北西から)

写真3 (4地点)



8 SD4006・4007 断面 (北から)



9 SD4006・SD4007 完掘状況 (北西から)



10 SD4028 断面 (南から)



11 SD4028 完掘状況 (南西から)



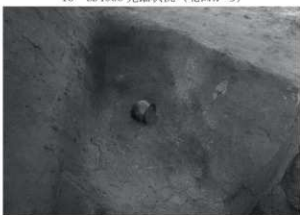
12 SD4035 断面 (南東から)



13 SD4035 完掘状況 (北西から)



14 SD4042 断面 (北東から)



15 SD4042 土器出土状況1 (東から)



16 SD4042 土器出土状況2 (東から)



17 SD4053 断面 (北から)



18 SD4053 完掘状況 (北から)



19 弥生包含層遺物出土状況 (西から)



20 4地点完掘状況 (南西から)

写真5 (5地点)



21 5-A 地点遺構検出状況 (西から)



22 SZ5054 完掘状況 (北西から)



23 SZ5054 断面 A (南西から)



24 SZ5054 断面 B (南東から)



25 SZ5054 断面 C (北から)



26 SD5013 完掘状況 (西から)



27 SD5013 断面 (南東から)



28 SD5004 断面 (南東から)



29 SD5004 完掘状況 (南東から)



30 SX5110 土器出土状況 (東から)

写真7 (5地点)



31 SX5110 検出状況 (北から)



32 SX5110 断面 (北東から)



33 SD5097 断面 (北から)



34 SD5097 完掘状況 (北西から)

写真9 (5地点)



35 SB5121 完掘状況 (北から)



36 5-B 地点完掘状況 (西から)



37 SB6107 完掘状況 (南から)



38 SB6107 断面A (南から)



39 SB6107 断面B (東から)



40 SB6107 断面C (北東から)



41 S26125 完掘状況 (南から)

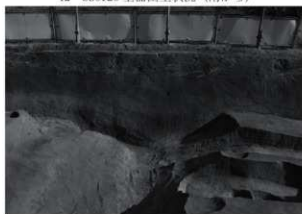
写真 11 (6 地点)



42 SZ6125 土器出土状況 (南から)



43 SZ6125 断面 (東から)



44 SD6043 断面 (南から)



45 SD6043 完掘状況 (西から)



46 SD6043 土器出土状況 (西から)



47 SD6095 断面 (南から)



48 SD6095 土器出土状況 1 (東から)



49 SD6095 土器出土状況 2 (東から)



50 SD6095 完掘状況 (南から)



51 SK6006 半掘状況 (北東から)



52 SK6006 石斧出土状況 1 (北東から)



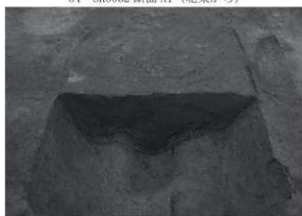
53 SK6006 石斧出土状況 2 (北東から)



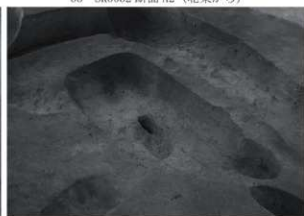
54 SK6032 断面 A1 (北東から)



55 SK6032 断面 A2 (北東から)



56 SK6032 断面 B (南東から)



57 SK6032 完掘状況 (南から)

写真 13 (6 地点)



58 6 地点完掘状況 1 (北西から)



59 6 地点完掘状況 2 (北から)



60 SB7057 完掘状況 (北西から)



61 SB7057 断面 1 (東から)



62 SB7057 断面 2 (東から)

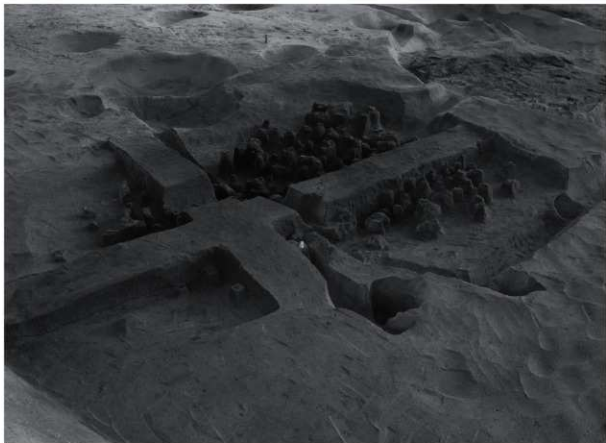


63 SB7057 断面 3 (南から)



64 SB7057 断面 4 (南から)

写真 15 (7地点)



65 SB7057 出土状況 (北西から)



66 SB7268 完掘状況 (南東から)



67 SB7268 断面 1 (南から)



68 SB7268 断面 2 (南から)



69 SB7268 断面 3 (東から)



70 SB7268 断面 4 (東から)



71 SB7268 石器出土状況 1 (西から)



72 SB7268 石器出土状況 2 (西から)



73 SB7269 断面 1 (南から)

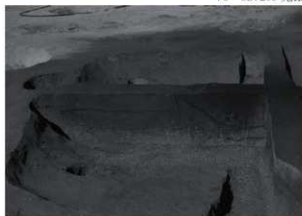


74 SB7269 断面 2 (南から)

写真 17 (7 地点)



75 SB7269 完掘状況 (南東から)



76 SB7269 断面 3 (西から)



77 SB7269 断面 4 (西から)



78 SZ7270 断面 (西から)



79 SZ7270 土器出土状況 (南から)



80 S77270 完掘状況 (北東から)



81 S77311 完掘状況 (西から)

写真 19 (7地点)



82 SZ7311 断面 A (西から)



83 SZ7311 断面 B (北から)



84 SZ7311 土器出土状況 1 (西から)



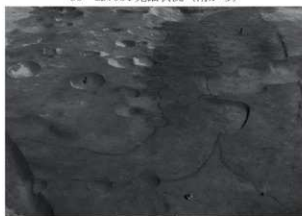
85 SZ7311 土器出土状況 2 (西から)



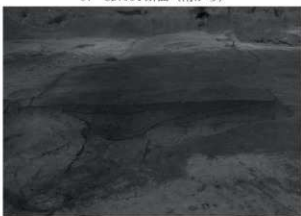
86 SD7034 完掘状況 (南から)



87 SD7034 断面 (南から)



88 SD7312 検出状況 (南西から)



89 SD7312 断面 A (南から)



90 SA7104 完掘状況 (西から)



91 SD7312 完掘状況 (南西から)



92 SA7132 完掘状況 (北東から)



93 SD7312 完掘状況 (南西から)



94 7地点完掘状況 (西から)

写真 21 (8 地点)



95 8 地点遺構検出状況 (南東から)



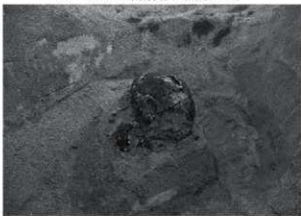
96 ST8005 半截状況 (東から)



97 ST8006 半截状況 (北東から)



98 ST8006 人骨出土状況 1 (西から)



99 ST8006 人骨出土状況 2 (西から)



100 ST8046 断面 A1 (北東から)



101 ST8046 断面 A2 (北東から)



102 ST8046B 断面 (南東から)



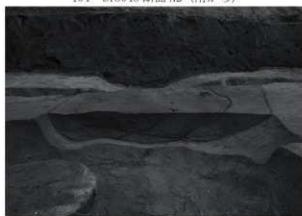
103 ST8048 断面 A1 (南西から)



104 ST8048 断面 A2 (南から)



105 ST8048 断面 B (南東から)



106 SD8001 断面 (南西から)



107 SD8001 完掘状況 (北から)

写真 23 (8 地点)



108 SD8028 断面 (南東から)



109 SD8028 完掘状況 (西から)



110 SD8039 断面 (北西から)



111 SD8039 完掘状況 (北西から)



112 8 地点完掘状況 (北から)



1

1地点出土須恵器环身



2

1地点出土須恵器壺



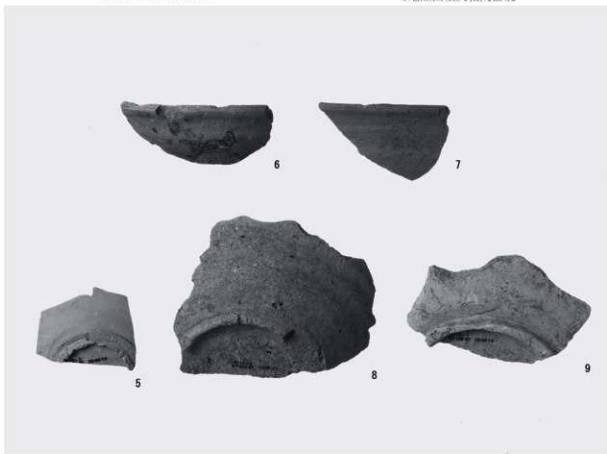
3

1地点出土灰軸陶器碗



4

1地点出土灰軸陶器碗



1地点出土山茶碗

写真 25 (1 地点)



1地点出土山皿



1地点出土天目茶碗



1地点出土仏花瓶



1地点出土山皿



1地点出土端反皿



1地点出土灯明皿



1地点出土土師皿



1地点出土土師皿



1地点出土製塩土器



1地点出土土師質釜



1地点出土土師質钵



1地点出土丸瓦



1地点出土土人形



SD4042出土弥生土器甕



SD4042出土弥生土器壺



SD4042出土弥生土器壺



SD4042出土土偶



SD4053出土弥生土器壺



SD4053出土弥生土器壺



SD4053出土弥生土器鉢

写真 27 (4 地点)



30

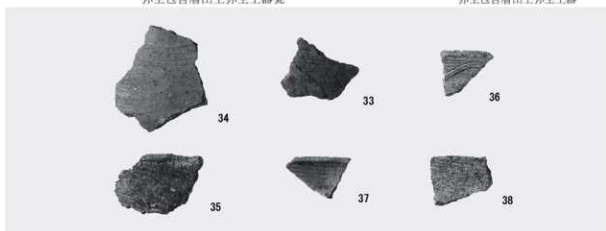
弥生包含層出土弥生土器甕



31

32

弥生包含層出土弥生土器



34

33

36

35

37

38

4地点出土弥生土器



39

40

41

4地点出土須恵器



42

43

44

4地点出土陶器類



48

SZ5054出土土師器高坏



45

SZ5054出土弥生土器钵



46

SZ5054出土弥生土器深钵



47

SZ5054出土弥生土器深钵



56



57

SD5013出土鉢

写真 29 (5 地点)



SD5013出土山茶碗



SD5013出土山茶碗



SD5013出土山茶碗



SD5013出土山茶碗



SD5013出土山皿



SD5013出土山皿



SD5013出土山皿



SD5013出土常滑焼甕



SD5013出土羽付釜



SX5110出土弥生土器壺



SX5110出土弥生土器



SX5110出土弥生土器



SX5110出土弥生土器



SX5110出土土師器高坏

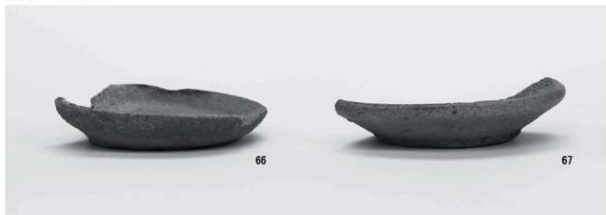


SX5110出土土師質鍋



SX5110出土山茶碗

写真 31 (5地点)



SX5110出土山皿



5地点出土土師器高坏



5地点出土須恵器坏身



5地点出土山茶碗



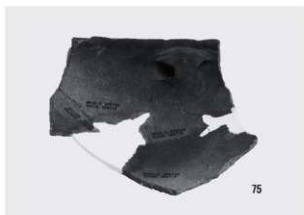
5地点出土山茶碗



5地点出土山皿



5地点出土土師皿



75

5地点出土土師質内耳鍋



76

5地点出土土師質釜



77

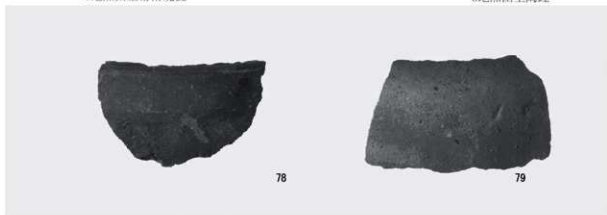
5地点出土常滑焼甕



80

81

5地点出土陶錘



78

79

5地点出土常滑焼くど



82

5地点出土土師石



83

5地点出土軒平瓦

写真 33 (6 地点)



SB6107出土弥生土器壺

84



B6107出土弥生土器壺

85



SD6095出土弥生土器壺

86



SD6043出土弥生土器壺

87



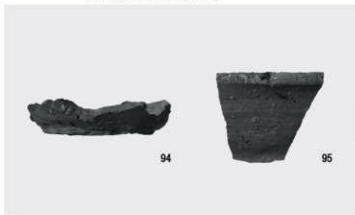
SD6043出土弥生土器深鉢

88



SD6043出土弥生土器壺

89



6地点出土山茶碗

94

95



6地点出土山皿

96



6地点出土弥生土器



6地点出土弥生土器



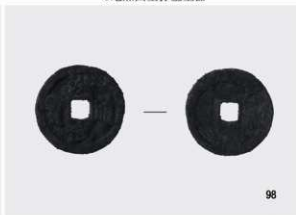
6地点出土弥生土器



6地点出土弥生土器



SK6006出土石斧



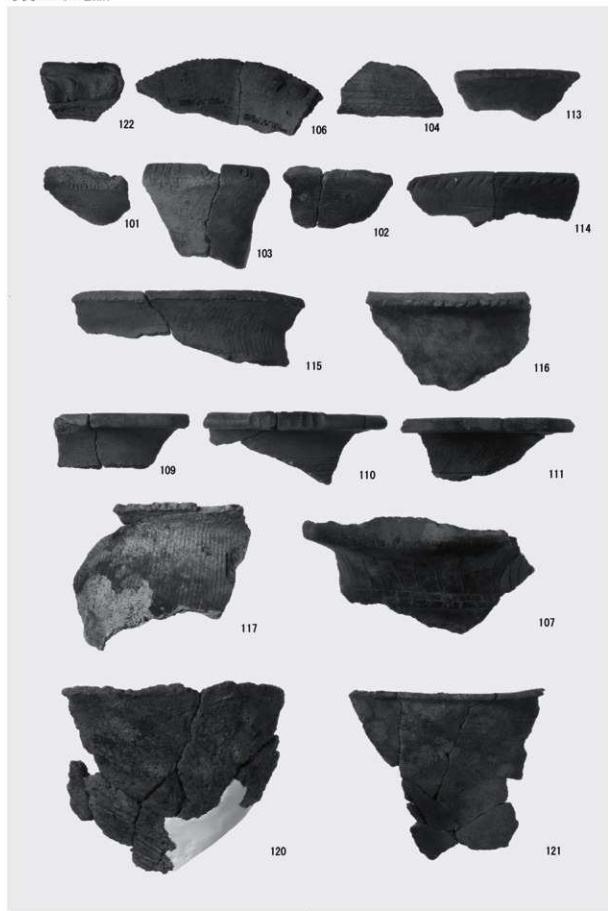
6地点出土古銭(洪武通寶)



6地点出土古銭(景德元寶)



6地点出土古銭(開元通寶)



SB7057出土弥生土器



108

SB7057出土弥生土器壺



112

SB7057出土弥生土器壺



105

SB7057出土弥生土器細頸壺



123

SB7057出土弥生土器台付壺



118

SB7057出土弥生土器壺



119

SB7268出土弥生土器壺



124

SB7057出土石鏃

写真 37 (7地点)



125

SB7268出土弥生土器壺



126

SB7268出土弥生土器壺



129

SB7268出土弥生土器壺



127

SB7268出土弥生土器壺



128

SB7268出土弥生土器壺



130

SB7268出土弥生土器壺



131

SB7268出土弥生土器壺



132

SB7268出土石鏃



133

SB7268出土石鏃



SB7269出土弥生土器鉢



SB7269出土弥生土器甕



SB7269出土弥生土器壺



SZ 7311出土土師器高杯



SZ7311出土土師器壺



SZ7311出土土師器壺



SZ7311出土土師器壺



SZ7311出土土師器壺

写真 39 (7地点)



SZ7311出土土師器壺



SZ7270出土土師器壺



SZ7270出土弥生土器壺



SZ7270出土弥生土器壺



7地点出土弥生土器壺



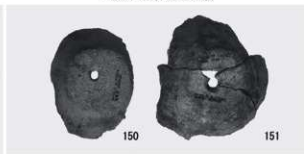
7地点出土弥生土器壺



7地点出土弥生土器壺



7地点出土弥生土器壺



7地点出土底部有孔壺



7地点出土土師器瓢壺



7地点出土土須恵器



7地点出土山皿



7地点出土山茶碗



7地点出土羽付釜



7地点出土伊勢型鍋



7地点出土土錘



7地点出土陶丸



7地点出土軒平瓦



7地点出土青磁碗



7地点出土陶器碗

写真 41 (8 地点)



8地点出土台付甕

8地点出土台付甕

8地点出土製塩土器



8地点出土山茶碗



8地点出土山茶碗



8地点出土山皿



8地点出土鉢

8地点出土鉢



8地点出土瀬戸美濃焼

8地点出土陶丸

8地点出土常滑焼甕

報告書抄録

ふりがな	はたまいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	平成27年度 畑間遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮澤浩司・丹生泰雪・梶ヶ山真里							
編集機関	株式会社島田組中部営業所							
所在地	〒454-0804 愛知県名古屋市中川区月島町6-1							
発行機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番地							
発行年月日	2017年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ハタマイセキ 畑間遺跡	アイタケントウカイシ 愛知県東海市	23222	43050	35 1 11	136 53 44	20150608～20160323	2501㎡	土地区画整理
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
集落・墓域	弥生時代・ 中世	住居址・方形周溝墓・ 溝・土坑			弥生土器・土師器・ 中近世陶器		集落跡・方形周溝墓・ 中世の区画溝・土坑墓	

愛知県東海市
平成27年度
畑間遺跡発掘調査報告

平成29年3月27日印刷
平成29年3月31日発行

編 集 株式会社島田組中部営業所
〒454-0804 愛知県名古屋市中川区月島町6-1
TEL 072-949-2410

発 行 愛知県東海市教育委員会
〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番地
TEL 052-603-2211

印刷・製本 株式会社才一エム